海外新潮
列國は仲裁の義務あり
獨逸皇帝と西藏

中央公論

第二十年第一號

概目



THE CENTRAL REVIEW

明治卅一年十一月廿九日第三種郵便物認可
毎月一回一日發行 明治卅八年一月一日

太陽

每月一回一日發行　**第拾壹卷第壹號**　一月一日出版發

茲に十年の長日月を重ね年々進歩發達せる本誌は**帝國**の**發展**を代表して東洋唯一の**證典**たらむとす年改ると共に生々たる**新面目**を備ふべし

口繪增加（從來十二頁なりしを更めて二十頁（アート刷四頁赤門刷十六頁）とし人物、建築、風景、美術品等を美術的に印刷す殊に戰況は眞に迫るものあり本誌の特色を益

新年大附錄

日露國勢比較便覽

地理、國體、政治、陸海軍、財政、産業等百般の事項を對照す

論說

● 東西文學の觸接地 …… 子爵 渡邊國武君
● 國定教科書の批評に就て …… 文學博士 加藤弘之君
● 時局の將來 …… 法學博士 添田壽一君
● 軍國の社會政策 …… 後藤新平君
● 日本帝國と第廿世紀の國際法 …… 法學博士 松波仁一郎君
● 露國の三大平和論者 …… 文學博士 大塚保治君
● 御用新聞記者（人物月旦） …… 鳥谷部春汀君

文藝

● 五反田 …… 廣津柳浪君
● 擬寶石 …… 内田魯庵君
● 歐羅巴大陸回顧の歌 …… 文學士 土井晩翠君
● 忠臣藏の原作 …… 饗庭篁村君
● 龍頭蛇尾辨 …… 巖谷小波君
● 文藝時評 …… 大町桂月君
● 浦島の人生觀 …… 長谷川天溪君

歷史地理

● 朝鮮海峽の史的研究 …… 子爵 小笠原長生君
● 韓國の教育に就て …… 金澤庄三郎君
● 題未定 …… 理學博士 石川千代松君
● 題未定 …… 理學博士 坪井正五郎君
● 寄生と退化 …… 理學士 飯塚啓君
● 琉球の原住民 …… 鳥居龍藏君
● 奉天附近の地理 …… 淺田空花君

其他各欄皆斬新の材料豐富にして讀書界に貢献する所偉大なり

每月一回一日發行

正價一册卅錢

前金 ●四册金壹圓拾五錢 ●八册金貳圓貳拾錢

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

恭賀新年

祈倍舊御愛顧

高等出來合洋服販賣廣告

歐米各國到る處高等出來合洋服を以て需用者の八九を占むるは既に江湖の了知する處に御座候弊店義之に倣ひ昨年來當所に於て開業仕候處愛顧諸彦より非常なる御賛辭を賜り陸續御注文被仰付候段奉鳴謝候本年は殊に澤山調製致置候間一應御來店の上地質の精選裁縫の巧妙及び價の廉なる等他店に比し幾何の勉强致居候哉を御一覽被成下度尚地質も珍柄多數取揃へ置候に付御好に應じ出來合直段に準じ調製可仕候

定價表

フロックコート	三ツ揃	二十圓方	三十五圓迄
モーニングコート	三ツ揃	十六圓五十錢方	二十五圓迄
背廣	三ツ揃	十一圓方	二十二圓迄
オーバコート	一枚	九圓方	十七圓迄
インバネス	一枚	九圓方	十八圓迄
トンビ	一枚	十一圓方	二十五圓迄
吾妻コート	一枚	十圓方	十四圓迄

但し現金にて一切掛引なし

尚地方の御方より御注文の節は御一報次第完全なる寸法雛形御送付可申上候

御注文

洋服廉價裁縫店

米田屋支店

東京市京橋區南大工町一番地(鍜冶橋外北へ寄角)

電話新橋一一二四番

總裁 伯爵 東久世通禧君

國文學講義

會員募集

國勢日に月に發展す**國文の研究**豈之に伴はずして可ならんや本會茲に見るあり懇切博識なる左記諸先生を賛成員講師に仰ぎ整齊なる組織と嶄新なる施設とに由りて、**國語の性質國文學發展の由來**各時代**文學の特色**を一目の下に通觀せしめんとす各時代の文學に亘る講義は實に本書を以て嚆矢とす如何に系統的にして又如何に組織的なるかは乞ふ本誌に就て之を見よ、

文學博士 芳賀矢一君　學習院教授 和田英松君　文學博士 上田萬年君　文學士 菊池壽人君
文學博士 荻野由之君　文學士 渡邊良法君　文學士 山內二郎君　文學士 志田義秀君
文學士 長谷川福平君　文學士 垣內松三君　高師教授 松井簡治君　文學士 森 治藏君
文學士 堀 重里君　文學士 武島又次郎君　文學士 藤岡作太郎君　高師教授 關根正直君
文學士 尾上八郎君　文學士 高木尚介君　文學士 藤岡繼平君　文學士 杉 敏介君

講習一年講義錄每月二回廿四册完了
●束修廿錢月費卅五錢一年四圓規則
郵劵二錢にて呈す

●講習科目大要

一、日本文學史
二、奈良朝文學評釋祝詞宣命万葉集等
三、平安朝文學評釋源氏大鏡三代集枕草紙等
四、鎌倉文學評釋增鏡太平記盛衰記等
五、足利文學評釋謠曲狂言舞本連歌等
六、德川文學評釋隨筆書類戲曲小說俳諧俳文川柳狂歌狂文等
七、日本文法
八、國語研究法

第一巻（十二月廿日）要目●日本文學史日本に於ける漢文學の變遷松井教授●奈良朝文學祝詞宣命堀文學士●平安朝文學三代集武島文學士大鏡藤岡文學士●鎌倉文學增鏡萩野博士●足利文學謠曲狂言森文學士●德川文學隨筆高木文學士戲曲小說山內文學士俳文俳句渡邊文學士●文法芳賀博士●國語研究法垣內文學士●檢定試驗問題解答●俗謠就て志田學文士●傳說と小說山內文學士●萬歲の話長谷川文學士●文學史料●其他應問文苑、彙報、新著批評等

文部省檢定受驗案內

●會則 郵劵二錢にて呈す

檢定試驗各學科の受驗者及受驗志望者のため講義錄紙上特に一欄を設け受驗上に必要なる手續報道又は心得を載せ或は之に關する質問照會等に應答す獨り國語漢文科のみならず各學科の受驗者に多大の便宜あらん、

東京神田區西小川町二丁目

國語漢文學會

中央公論 第二十年第一號 目次



新春の曙光

"The year's at the spring
And day's at the morn."

新年を迎ふ

明治三十八年來る

一杯の屠蘇。一椀の雜煮。心自から新た也。朔風河を凍らし。霜雪山を埋むる時。備さに陣中の艱苦を嘗むる我が出征將士も。元旦一瞬時と雖も、尙ほ幸ひに心閑かに氣胖かなるべき乎。

心自から新たなる時。半點の邪念妄想を加ふること無し。此の時、人則ち神に齊しく佛菩薩に同じ。玆に一年の計を立つ。甚だ佳ならざらんや。

吾人則ち容を嚴にして敢て曰ふ。此の年軍國特に多事也。戰線の進むに從つて軍費益々增加し。國民の負擔彌よ滋からんこと必然也。若し或は媾和の問題起りて列國皆動かん乎。樽俎折衝の間。利害を審らかにし。得失を明かにして。國民に適從する所を知らしむるの必要なる多言を俟たず。吾人操觚の職に在るもの。耳目を中外に放つこと益々緊切なると共に、審議し細說すべきもの大に多かるべし。吾人は實に之を期す。而して吾人の服膺すべき一大經典は他なし。曰く飽まで誠實なる事也。然り君國のために。飽まで誠實なる事是れ也。

新年を迎ふるに方りて。敢て一言を卷首に署して江湖の讀者諸君に約す。

中央公論



第二十年
第一號

和す可きか更に戰ふべきか

日露戰爭を環視せる列國の多數は、漸く將さに倦み來らんとするが如し、故に仲裁調停の說處處に傳へられ、今や倫敦政府の一角には、旅順口の陷落を期として居中調停を爲すの立案中なりとまで傳へらる。

始め日本人を『狡黠なる猿』と呼べる露人は、今や稱して『勇敢義俠なる日本人』といふに至れり、彼等の中に公然日露同盟論を唱ふるものもあるは事實也、貴族政治を顚覆して戰爭を中止せんと希望するものあるも事實也、彼の貴族政府の暴慢なる政事家中に於ても、到底提戰の目的なきを知つて如何に事局を收拾すべきと懊惱する者多きも事實也、若し戰局にして更に半年を延し、一年を延さば、彼の國の內亂漸く起らんとし、疲弊內より發して自から支持す可らざるに至らんとするも事實也。

我が日本に於て輕佻淺薄なる一部の徒が、漫りに戰爭に反對しつゝあるは事實なるも、而かも其の聲や小にして天下また顧みるものなし、而して彼等今に至つて公然和を主張するの勇あると無し、否々、其の識度なき也、多くの新聞紙は則ち言ふ、戰局の前途尙ほ遼遠也、飽まで戰はさる可らずと、然れども自から老實なる元老と稱するものが、早く既に和局に着眼して密かに其の機會の至るを俟つは事實也、夫れ日清戰役は明治二十七年七月廿五日の豐島沖海戰を發端とし、翌二十八年四月十七日馬關條約の調印に終るまで、其の

間實に九ヶ月を超えざりき、今や明治卅七年二月八日旅順口外の海戰より既に十一ヶ月に近く、其の期間は戰線と共に日淸戰役より長し、而して戰鬪激烈にして死傷の多大なる、軍費の莫大なる、共に遠く日淸役の上に出づ、元老等が早く密かに和局に着眼する亦其の所乎。

然らば則ち和竟に成るべき乎、否、我が國民は和すべき乎、抑も亦更に戰鬪を繼續すべき乎。

此の問題を解決する方法は明白也、和すると和せざるとの標準炳として日月の如くなれば也、我れは我が正義を顯揚し主張を貫徹すべくんば則ち和すべきと論なく、苟くも然らずんば斷じて戰鬪を繼續すべきのみ、更に詳言すれば、露國十年來の非義無道を悛め、他の領國を併呑し侵害するの野心を捨て、東洋の平和を攪亂する禍心を一擲せば、吾れ則ち和すべし、然らずんば則ち飽まで戰鬪すべきのみ。

吾れ曾て戰勝の効果として金州半島の領有を淸廷と約するや、露國は獨佛二國を聯ねて我れに忠言して曰く、是れ東洋永遠の平和に害ありと、吾れ唯だ東洋の平和を重んずるため、則ち强ひて其の忠言に隨ひて此の領有の念を絕てり、然るに露は期年ならずして淸廷を强迫し、金州以南の半島を永遠租貸せしめ、自からダルニーの大市港を構築し、旅順の天險に據つて堅牢無比の要塞を造り、茲に海陸軍の精銳を萃めて、巨然嵎に凭る虎の如く、大に東洋の平和を威嚇したるのみならず、淸國に拳匪の變起るや、ヴラゴヴエチエンスクより兵を進め、哈爾賓を陷れ、奉天を屠り、遼陽、海城、大石橋、金州を奪取し、且東淸鐵道なるものを布設して恣に滿州を併呑せんとせり、日本が僅かに金州半島を領有すれば則ち東洋永遠の平和に害ありて、露國滿州を奪略して據すれば則ち東洋永遠の平和に害なしと做す乎、日本を侮辱するも亦甚だし、且つ恣に他の領土を奪略するが如きは、盜賊の所爲也、非義無道の極也、況んや列國政府一致して滿州の撤兵を迫るに及び、三び其の期日を約して果さず、大に海陸の兵備を整へ、竟に傲然として自から之を領有するの野心

を公表したるをや、豈に非義無道なるのみに非ず、又實に背信不德の極にあらずや。

且つ露國は更に韓國を迫害して其の君臣を動搖せしめ、太た我が利權を壓迫したり、我れ進んで其の非を鳴らすに及び、彼れは武力を以て我れを壓倒するの意を示し、暴戾到らざる處なかりき、吾れ既に斯の如く輕侮汚辱せられ、彼をして非義無道、背信不德、暴戾横恣至らざる所なからしむ、國家の威信何を以て立たん、東洋の平和何を以て支持し得んや、我が口舌の競に寸効なきを驗して武力に訴ふる、實に万已むを得ざるに出でたる也。

日露戰爭なるものは實に斯の如くにして開かれたるもの也、露國々民の多數は今日尚ほ何の理由あつて日本と戰ふかを知らずと雖も、我が日本の君臣は、皆戰爭の避く可らざるを知り、擧國一致、銳意して事に從ひ、若し其の目的を達せずんば國を焦土と爲すも亦已まざるの大決心を有せり、此の目的にして達せん乎、今日と雖もまた直ちに干戈を收むべきのみ、具體的にいへば、露國にして第一朝鮮に對する野心を一擲し、我が利權を尊重して未來永遠朝鮮の事に容喙せず、第二旅順口及び青泥窪の租借權を放棄し、第三滿州全土を完全に清國に還附し、第四永遠に滿州に手を出さざるを約し、第五我が戰費を賠償せば、吾れは悅んで和約を成すべきのみ。

夫れ今日和するも、明日和するも、和は一のみ、要は我が正義を顯揚して我が主張を貫徹するに在り、露國若し頑陋依然たらん乎、吾れは旅順口を陷れ、奉天を取るに滿足せず、進んで哈爾賓をも取らん、浦鹽斯德をも屠るべし、ハバロブスクをも奪ふべし、斯くして我れ長日持久の策を立て、少兵を以て敵の大兵を防ぎ、其の間銳意して武を練り財を積み、五年十年五十年の後、進んで莫斯科に向ふの大計を立てば、露國例令近く內亂の虞なしとするも、竟に自から屈せざるを得ざるべし、我れは實に此の力あり、謀略ある也、何ぞ況んや露國は期年ならずして其の內より土崩瓦解を免かれざるべきをや。

抑も我が平和に眷々たるとは、宣戰の詔勅に於て炳焉たり、我が君臣擧げて平和を希望すると一日に非ず、一日片時と雖も曾て和意なきとはあらず、其の强ひて戰ふは他なし、是に由て其の永遠の平和を得んがためのみ、多くの軍費を國民に課して漫りに武を瀆し戰を好むものは、我が國民中一人でもあるなし、唯だ露國及び列國は記取せよ、我れに和戰兩樣の準備あり、我が正義と主張とだに貫徹せば、心より悦んで速時に平和に復せん、姑息にして不名譽なる平和は敢て求めず、是れ共に永遠の平和にあらざれば也。（十二月十四日稿）

武士道と人格の觀念

綱島榮一郎

武士道の精神は、殆んど一種の宗教的熱情を以て理想の實行に勇往する所にあると思ひます。「武士に二言なし」といひ、「刀の手前といひ」、如何に彼等武士が意氣然諾を重んじたか、如何に廉耻名分を重んじたか、武士たるの體面を全うするためには、花よりも潔き最後を遂げて顧みないといふ彼等が烈々たる精神は、實に宗教的光彩を放つてゐると思ふ。武士的精神は我が國民性の精華と稱してもよい。されば又武士道ほど義務(本務)の觀念の强く表はれてゐるものはありますまい。武士道とは義務的觀念、義務的精神の結晶と言つても可い。體面、名分即ちつまり理想のためには、何等の擬義なく之れを絶對無上の命令として直前して身命をも抛つといふその一種浩然たる義務的精神といふものは、をさ〳〵ストアの精神にも劣つて居らぬ。其の餘りに義務の觀念の强かつたと、克己訓練の烈しかつたとが、やがて武士の家庭が餘り窮屈な峻嚴主義に流れて、温かな自然の人情に遠ざかつたと謂はるゝ所です。かの淨瑠璃作者等が唯一の中心思想となせし義務と人情との衝突は、多くはこの武士道の理想と自然の人情との衝突を描いたものと言つてよいてせう。「腹が減つてもひもじゆうない」と言ひ「武士は食はねど高楊子」といふ、これ即ち武士道の義務的意識です。義務的觀念即ち俗にいふ義理がたいといふとが、武士道の武士道たる唯一の精神で、これを除いた武士道は空虚であると思ひます。

義理がたいといふことが武士道の生命である所からして彼等は又打算的精神が絶無であつたと思ひます。彼等は行爲の複雜なる結果を一々計算して其の利害如何を見極めてやるといふやうなことは毛頭ない。そんな面倒な算用的な勘定立ては彼等の氣象と合はない。彼等のやりかたは、どこまでも直覺的、本能的、衝動的であつたのです。若し武士の體面を傷けるものがあつたならば、直ちに其のものを手打にするか、自分が切腹するかといふ烈しい行り口で、此の所はかのストアなどが如何に我れに無禮を加へるものがあつたとて、そんなことは我が人間としての眞價値に何等の輕重もない、むしろそんな是非の辨への無い無知のものには憫れみをこそかけてやれといつたやうな慈仁、寛恕の精神とは全然違ふ。武士道は自分に義理がたいと共に、他人の不義理をも許さぬ。自他共に一毫も假借する所は爲ない。復讐といふことは、この正義の精神から出たのです。彼等は正義の權化である。「正を踏んで恐れざる」は實に武士魂の精華であります。而して正義は由來利害の勘定とは合はない。自分の利害損得を一々打算商量して行ふといふプルーデンシャルな、俗慮的な、用心深いやり口は、彼等の爲し得ざりし所、又其の最も忌み避けた所であつたのです。西洋人の驚歎する所謂 Harakirism は、決して利害の念を有するものに出來得ることでない。併し吾人は實際上、一行爲が我が窮極の目的を實現する上に、如何ほどの貢献を爲すかといふことを打算商量してやらねばならぬ場合が屢々ある。こゝに於いてか例の理想と方法、目的と手段との入り組んだ關係問題なども起こつて來る譯で、殊に倫理上或る究竟目的を立てゝ一切の義務を統率してゆくといふ立極的見地（テレオロヂカル、ヸウ）を抱くものは、どうしてもかゝる一種の計算的態度を取らねばならぬ場合があると思ひます。然るに武士道にありては、儒教の直覺思想の影響を受けて、忠孝をはじめ、仁、義、禮、智等、皆それ〳〵獨立に絕對無上の道德的命令を有するもので、何も此等一つ〳〵の義務に窮極の理由とか目的とかいふものがある筈はないと見、隨つて各義務の間の輕重を綿密に商量するといふやうな事は幾んどやらない。勿論彼等は理窟の上からかゝる考へをはつきり浮かべてゐた譯ではありますまいが、彼等が實際に行つた跡を見ると、どうもさういふ趣があるのです。孟子が「其の義を正して其の利を謀らず、其の道を明らかにして其の功を計らず」と言つた儒教

の直覺思想が取りも直さず武士道の根本精神をなして居たと思ふ。彼等の行ひの跡に辻褄の合はぬ非論理的の所や、兎角感情的に流れた所や、又浮田氏の言はるる如き個人の名譽を重んじ過ぎたやうに見える所があつたのも、畢竟一つはこの一方向きな、融通のない、直覺的な行りかたに基づいてゐるのではありますまい乎。既に理想を實行する方法の上に於いてすら、勘定ぎらひの行り口ですから、まして其の行爲の結果が自分の利害に如何なる關係を有するかといふやうな利己的、功利的な計算は一毫彼等の念頭に無かつたのである。もし毫しでもかゝる利己的、功利的な考へをまじへて行つたものがあつたならば、彼等は武士の風上にも置けぬ犬士として太く擯斥せられたでありませう。この點に於ける彼等の心術には、水ぎは立つた、皓潔な、け高い所があつたと思ひます。何事をするにも勘定だかひ、用心深い、自意識が附いて廻はるといふ歐米近世の俗慮的、功利的精神は、武士道の中には殆んど見當らないと言つても過言ではありますまい。理想の實行に熱しては我れを忘れ、自意識を忘れるといふことが、取りも直さず武士道の奕々たる精神であります。その功利かたぎを混へない、すゝぎあげたやうな純白な精神は、我等が何處までも維持してゆかねばならぬ立派な國民性の一つと思ひます。もとより理想を實行する方法については、隨分面倒な手續をも厭はないで、綿密な科學的計算をもやらなければならぬ場合がありませうが、既に其の實行に取りかゝつた以上は、どこまでも一氣浩々たる武士的精神を以て行り遂げねばならぬと思ふ。かつ又所謂行爲の結果の計算といふものが、なか〳〵容易でない場合が多い。一行爲の結果なるものは、無端の環のやうに連續してゐるものであるから、到底其の一切の近い結果だけでも精算することは不可能である。實際の場合に處しては大抵の所で其の結果の計算に見切をつけて、後とは一種の信念を以て大膽に實行せねばならぬと思ふ。この點に於いても我儕は武士道の精神に大いに學ぶべき所があると思ひます。かの先き頃黄海で戰沒した高橋海門艦長が、將に其の艦の沈沒せんとするに臨んで、悉く部下のものを短艇へ移して逃がしてやつて置いて、自分はまだ逃れられる餘地のあつたにもかゝはらず、從容として艦と運命を共にした悲壯な最後については、當時彼此の世評もありましたが、私はむしろ高橋氏の心事に深く同情を寄せたいのです。或は高橋氏の自殺を非

として、この場合、氏が自重してむしろ少々位の軍人の體面などは堪へ忍んでも、戰爭全體の目的の上から考へて、生き延びられるだけは生き延びて終局の勝利のために盡くすべきが當然であつたものをと言つたのがありましたが、そこが問題です。果たしてさう斷言が出來るかどうか。私も當時高橋氏に對してさういふやうな批評を下したかつたのですが併し一歩退いて高橋氏自らの位地に立つて考へたならば、氏は或はこれほどの事は十分考へぬいた上の、いよ／＼の最後の結論として、即ちどう考へても斯うする外はないといふ一種の直覺的信念を以て、一死、艦と共に殉じたのかも知れませぬ。而して誰れか其の果たして然らざりしかを斷じ得る。誰れか又高橋氏の其の行爲又精神が戰爭全體の終局の上に及ぼす結果の非なるを斷じ得る。之れを斷じ得るものは神より外にはありますまい。事實の表面のみを見て、深く其の人の心事に立ち入らない輕々しい批評は避くべき事と思ふ。要するに事の結果といふものは、到底計算しつくせるものではない。殊に複雑なる實際の事情に處しては、むしろ一種大膽なる直覺的信念を以て著々片ぱしから事を決めてゆかねばならぬ場合が多いと思ひます。この點に於いて、武士道の竹を斷ち割つたやうな、濶達な、直截な、明快な、大膽な、非打算的な、沒自意識的な、一種きび／＼しい行り口は、大いに學ぶべき所ではない乎（もとより其の何事にも餘り諦めが早すぎる氣短かな一面の弊もあつたものですが）。武士道は實行上の方法精神としては一種無類の長所を有つてゐると思ひます。

浮田和民氏は、我邦從來の武士道には個人の名譽を重んずる念強くして、義務（本務）の念が少ないと言はれたやうですが、私はかねてよりちやうど浮田氏とは反對の意見を抱いて居りまして、武士道ほど義務の觀念が旺盛で利己的打算の念の少ないものは無いと思うてゐるのです。勿論源平時代の武士のやうに、花々しい名乘をあげて、盛んに一騎打をやつた時には、隨分拔驅の功名を爭つたともありませう。佐々木高綱が梶原景季を宇治川の先陣で出し拔いたやうな個人的手柄話はいくらもありませう。しかし此等の事實によりて、武士道の特相を個人的名譽を重んずるにありとのみ一概に斷じ去るは如何でありませうか。武門の譽れを輝かしたい功名、手柄を遺したいといふ功名心は勿論武人には皆ありませう。又有つて少しも差支はない。有るべき筈です。今日の軍人について言へば、彼等も人

情の自然として、金鵄勳章も欲しいてしやう、年金も欲しいてしやう。これらの動機を看過するは人心の機微を逸した迂論たるを免れぬとも言はれましやう。併し彼等の動機は唯だこれだけであるか。私はさうは思はぬ。勿論これらも有力なる一動機でありましやうが、この名利以上に尙ほ一層重大なる有力なる動機はない乎。私は確かにあると思ふ。少なくとも今日の軍人に昔の武士道が傳はつて居らねば兎も角、傳はつて居るならば彼等の心を動かして居るものは名利以上のものがなければならぬ。古の武士に取つては、忠君といひ、義俠といひ、廉恥といひ、名分といふ理想は無上命令の義務の聲であつたのです。身命を抛つてこれらの義務を實行する所に、彼等の功名心の滿足が得られたのです。何故に自殺するか、何故に君の馬前に打死するか、他なし、これやがて武士の體面即ち理想を全うする事であるからです。所謂體面は空な名譽心の入れものでない。體面の一面は、即ち彼等が嚴肅なる義務の聲である、この强剛なる義務意識を離れて、唯だ〳〵自分一己の名譽心に驅られてゐると見るは、恐らく武士道の眞面目を盡くした言葉でない。少なくとも、武士道の武士道たる所を指摘すればどうしても此く言はねばならぬ。思ふに浮田氏の言は、我が軍人が兎角躁進して生命を輕んずるの風ありて、どこまでも忍耐して職分を盡くすの風なきを見て、乃ち打死の必ずしも名譽にあらざるを戒められた誠心の忠言とも見るべきでせう。私も氏の立言の精神には飽くまでも同感です。但だ、この打死を輕くする風あるを見て、やがて彼等武士もしくば軍人に義務の念なしと斷ずるは如何でしやう。中にはもとより少しも義務の念に驅られないで（勿論何人も念々に義務々々と思つてするものはありますまいが、根本的に義務の念に驅られないで）唯だ自分一人の名譽の戰死てふことを目的として、褒められたさに死を急ぐやうな病癖的のものも無いとは言はれますまいが、是等の例を以て一般を律するはいかゞと思ふ。彼等に取りては或場合に、即ち打死すべき時に打死するといふことは、取りも直さず嚴肅なる義務の聲であるのです（如何なる場合に打死するが眞の打死と言はるべきかの論はさて措き）。されば武士道に向かつて問ふべきは、義務の念の有るか無いかではなくて、其の義務の內容理想の內容は高いか卑いかといふことにある。生命を輕視し、打死を輕くするといふことは、義務の念の無い故ではなくて、畢竟義務の內容そのもの

の性質から來る或必然の結果ではない乎。然らば武士道の義務の內容、即ち理想は何ぞ。

武士道の理想は言ふまでもなく忠君にある。其の他仁義禮智とか義俠とか廉耻とか名分とかいふやうなものは皆忠君を中心として廻轉してゐる武士道の理想です。この忠君氣質は外國からの借りものでなく、既に王朝時代から盛んに發揮されてゐる我が國有の國民性で、後ち儒佛（殊に禪）の思想によりて尠からざる影響を受けた。而して鎌倉幕府以後の封建制度の下に養はれた武士道の忠君は、一藩一藩の主君に對する忠義を意味することとなつたのであるが、それが明治維新と共に、又昔しのやうに一天皇に對する忠實となり、武士てふ階級も毀れて、國民全體が一種の武士的精神を分有するに至つたのであります。或人は更に武士道の理想を擴充して、廣く正義人道のために盡くすことを其の理想としなければならぬといふ。これは勿論異議はない。忠君といひ、愛國といふだけでは狹い。武士道の理想の內容の擴張は結構です。併したゞ是れだけで滿足が出來ましやうか。武士道の理想を擴充して忠君愛國の上に、更に正義人道を以てするは可いが、唯だこれだけで十分であらうか。私は十分と思はぬ。武士道をして眞に活きたる日本國民の倫理主義たらしむるには、尙ほ一つ最も大切なる根本的のものが無くてならぬと思ふ。何か、曰はく人格尊重の觀念これであります。私は人格の尊嚴を自覺しなかつたことが武士道の根本的缺點であると思ひます。忠君愛國といひ、正義人道といふも、人格尊重の觀念が其の根柢となることなくば、それは力の無い、生命のない根なし草です。私は昔の武士が自殺を輕くし打死を輕くしたといふ事が、人格の觀念の明瞭でなかつた、否殆んど無かつた絕對の忠君主義、絕對の服從主義と重大なる關係があると思ふ。國家何故に重んずべきかならば、國家は多くの貴き人格の有機團であるからです。人道何故に重んずべきかならば、人道は人格の無窮の目的發展の總合的努力を意味するからです。人格の觀念を外にした國家は死制度の堆のみ。人格の觀念を離れた人道は空漠たる抽象感情の異名のみ。忠君の理想も個人の人格尊重の自覺と伴つて、始めて眞に堅實高上な意義を有してくると思ふ。固より自他の生命を何等の擬義もなく君の馬前に抛ち去る武士道の精神は、前いふ如く侮るべからざるものがある。其の無上命令の義務の聲に直前する旺盛なる獻身的精神は、高上なる宗教的精神

といつてもよい。但だ若し其の君の馬前に献げる生命が、人格であつたならば、更に幾層忠君の意義を豐富高上ならしめたでありませう。彼等が若し全世界にも換へがたい貴き人格をも君の馬前に抛つたならば武士道の精神は更に如何ばかり燦爛たる光彩を放つたでありませうか。彼等は封建社會に住まへる常とて、人間を階級的にのみ見て、其の萬人を通じて同一の尊嚴を有する人格の觀念、カントの所謂各々其れ自らが目的であつて他の絶對的、奴隷的手段たるを容るさゞる人格てふ權威ある觀念を有しなかつたのである。私は武士道に人格の觀念なきを惜しむべき缺點と思ふ。殊に種々の點に於いて類似を有するストア學と比較して、一層この點に憾みがあるのです。

ストア哲學者は誰れも知る如く天地を一貫する理性ありとし、我等人間は皆生まれながらにしてこの天地の理性を具へてゐると見た。而して此く人皆が天地の理性即ち道理心を有すると見ることに於いて一面には人間の平等性を觀じて奴隷制度廢止の先驅をなし、一面には又こゝに人間特殊の尊嚴を觀じて人格（ヒューマンパーソナリテー）の觀念の基礎を置いたのである。羅馬法の燦然たる權利義務の大組織も、畢竟この觀念より華さいた結果です。この人格の觀念は後ちに基督敎の深大なる影響を得て益々其の基礎を牢うし、オーゴスチンにより、ルーテルによりて、益々說き强められ、更にカントに至りて最も權威ある深遠の觀念となつたのです。今日の歐米人のやかましくいふ權利義務や、獨立自尊や、職分尊重や、皆深くこの人格の觀念に根ざしてゐる。私はどうしても今後の武士道にはこの人格てふ偉大なる思想を植ゑ込まねばならぬと思ふ。而してこれは强ちに西洋思想の眞似をして西洋種を植ゑつけるのではない。この人格尊重の觀念の基礎は既にわが東洋思想の畑にもあつたと思ふ。「天命之れを性と謂ふ、性に率ふ之れを道と謂ふ」の子思の一語は、恰もストア學と同樣なる濶大なる人性の哲學的根據を喝破してゐるのみならず、更に孟子が人が五常の性を具へて其の性に率ふことを人間唯一の品位價値の存ずる所とし、彼れの謂はゆるこの「在我者」又「天爵」に對して世の紛々たる富貴、名譽、地位、權勢などいふ彼れの所謂「在外者」又「人爵」は之れを得るも喪ふも毫も人としての眞價値を輕重するに足らぬと見たのである。これ恰もストアが、理性に從ふことを人としての唯一の値打あることとして、世の一切の功名、

利達、死生、貧富等を無記、無頓着の「外善」と冷眼視し去つたのと符合するではない乎。孟子は實にストア哲學者にも劣らず人間の眞の尊嚴、眞の權威を自覺した先覺者です。彼れは東洋思想史上に人格の觀念の基礎を据ゑ得た少なくとも有力者の一人と言つても過稱でない。然るに惜しいかな、東洋の社會組織の故であつたか、はた偉大なる宗敎的感化のなかつたためであつたか、(無我を根本思想とする佛敎に人格觀念の發達なかりしは無論の事です)或は其の他の理由事情の爲めであつたか、この人格の觀念は何等の著るしい發展をも遂げずに終はつたのです。武士道も亦人は生まれながらに貴き五常の性を天より禀けてゐるといふ儒敎思想の影響を受けながら、竟にこの人格てふ明瞭なる觀念を發展し得なかつた。これは封建時代の階級思想、服從思想に養はれて人間を上下の關係のみに從つて評價した武士氣質の已むを得ざる弊といたして、さて今後の文明的武士道は、どうしても一面にこの深遠なる堅實なる人格單位の思想を根柢とせねばならぬ。而して私のいふ人格單位の思想は、國家や人道の觀察と衝つ突かつて直ぐに碎けるやうな、そんな淺薄なものではない。否むしろこれらの觀念を容れて餘りある又これらの觀念の根柢となりてそれに限りなき活力を吹き込むものであるのです、(これは詳論を要すべき點ですが、今は其の遑がない)。この人格尊嚴の觀念を吹き込まずして、自重せよ、生命を重んぜよ、職分を大切にせよといふは、そも〳〵第一義論ではありますまい乎。生命の自重も、職分を大切にするとも、義務に忠なるとも、皆この一根本觀念から湧きいでゝ來なければならぬ。武士道の理想たる忠君愛國も、博愛人道も、この一根本觀念の上に立つて、始めて崇高偉大なる內容を有して來ると思ふ。この人格の觀念を吹き込むは、勿論容易ではないでしやう。併しこの觀念なき武士道は、到底眼睛を點ぜざる木佛石佛たるを免れぬと思ひます。大ぶ前の露國の一新聞に「吾人は正直に白狀すれば、今日までの戰爭に於て、日本人の如く勇氣と愛國とに富みたる敵に遭ひたることなし、併しながら我が耶蘇敎國民の勇氣は死を恐れざるにあれども、佛敎國の日本人の勇氣は、其の基づく所寧ろ生命を輕んずるにあり云々」といふ記事の載つてゐたといふことを或新聞で見ました。もとより一笑の價のない觀察です。但だ其の生命を輕んずる云々の一事、或は幾分の事實で、これやがて浮田氏其他の論者の物議を惹き起こし

た所以でありませう。併しこの事實は、彼等單に義務意識の無きことを指示するよりも、寧ろ其の義務意識の根本たる理想そのもの丶内容に或必然の關係を有することを語るものではない乎。少なくとも私の見る所によればこの事實は取りも直さず將來の武士道の理想が堅實なる人格尊重の觀念に立つべき必要を明示したものと思ふ。一言すれば人格の觀念を根柢とせる武士的精神、これが私の今後の武士道に期待する所であります。

然らば如何にすれば武士道の根柢としての人格の觀念を養ふことが出來るか。これは重大なる問題です。思ふに武士道には、彼のストア哲學者が安心立命問題を主として兎角主觀に立ち籠つた風や、又彼の宋儒等が唯一の學問とした持心だの居敬だの守靜だのといふ一念の存養省察の工夫に流れた點などは少しも見當たらぬ。武士道はどこまでも活動的です、社會的です、現實的です、人倫的です。かの山鹿素行が山崎闇齋等の心性の主觀的功夫を重んずる主義をいたく斥けたのも、畢竟この武士道氣質に基づいて居たのです。さりながら私は信ずる、今後武士道に人格の觀念を吹き入るゝには、どうしても一面人道の根據を天道に置くかの儒教や、ストア哲學や、基督教等の如き潤大深遠なる哲學的、宗教的思想感情と交渉せしめなければならぬと。我等が人格の尊嚴は其の深根柢を天地の一大人格に置かねばならぬ。我等が人的人格の觀念はこの不盡の一大源泉より滾々として流れ出でねばならぬと思ふ。しかしこの重大なる問題については、こゝには詳論の餘地がない。すべて他日を期します。

以上は少しも組織的に述べたのではありませぬ。ほんの武士道に對して思ひうかんだまゝの感じの一つ二つを述べて見たのです。兎に角、日本將來の新道德的理想を建設せんとするには、どうしてもこの武士道てふ異彩ある、固有の、深根の、國民性を基礎としなければならぬ。武士道は種々の方面よりして愼重なる研究を要すべき問題と思ひます。（綱島氏手記）

文藝の批評家と一般士女との關係

幸田露伴

文藝の批評家と予のこゝに謂ふところのものは、其

の人の識見學問、眞に文藝の批評家たるに値すると否とを論ぜず、すべて社會公衆の前に立つて筆舌を以て文學藝術に對し褒貶是非するところの人をいふ。

文藝の批評家は其の本然の約束よりして自から左右二面を具ふ。即ち一面は文學藝術に從事するところの人に對し、又他の一面は社會一般の士女に對す。

文學家美術家と批評家との間の關係は今こゝに說かず。今はたゞ江湖の士女と批評家との間の關係を說かん。

一般士女は即ち文藝の制作の需用者にして、文學及び美術に從事するの士は、必ずしも江湖に愛賞せられんが爲に其の制作を試み且つ之を公にするにはあらずと雖も、其の制作品の世に公にせらるゝに當つて、之に對するところのものは即ち一般士女なれば、一般士女は文藝の制作に就きて最大關係を有するものといふべし。

若し一般士女の趣味低卑にして、文學藝術の制作中に就きて、其の審美的の眞價値甚だ卑きところのものを愛尙し、其の眞價高きところのものをば却つて冷遇する時は如何。現在世界の自然の法律は、自から眞の文學者及び藝術家を飢餓せしめ失望せしめ究死せしめて、時の風潮に乘ずるところの幸運の文藝の似而非才子をして跋扈せしめ得意ならしめ榮昌ならしめ、其の第二期に入りては文藝の壇上全體の腐敗を醞釀すべし。

之に反して一般士女の趣味高尙にして、眞價値あるものを愛し、眞價値無きものを斥くるが如き狀態の時は、現在界の自然の手は、自から文藝上の眞價値あるものを供給する能はざるが如き文藝の士を飢餓究死せしめ、眞の文藝の士をして感奮盡力せしめ、其の第二期に入りては文藝界全體の情狀をして醇良の高潮時に達せしむべし。

一般士女の趣味高くして後、文藝眞に振ふべきか、文藝眞に振ひて後、一般士女の趣味高きに至るべきか。是れ卒然として解する能はざるの問題なりと雖も、要するに少くとも一般士女の趣味の文藝に影響すること無しといふことは、不可能の事たり。文藝上の制作品の需用者は即ち一般士女にして、言を換ふれば文藝上の制作品の取捨好惡を敢てし、之を世に存在し若くは存在せしめざるの權利は、現在直接に全く一般士女の手中に存するを以てなり。

文學藝術上の有力なる佳良の製作品は、もとより一

般士女の趣味を開發誘導して、自から低卑の境より高尚の域に至らしむるに疑無し。然りと雖も不良の有力なる製作品も、また其の有力なる以上は、一般の士女の趣味を墮落せしめて、無邪の狀より劣惡の態に陷し入るゝに疑無し。

一般士女の趣味如何が、文藝界の汚隆如何に關係すること尠少ならずとすれば、一般士女の趣味の高卑如何は、直接に社會に利害を與ふるは勿論の事、文藝界に取りてはまた實に多大の權力を有するの事實として觀るべき也。然るに一般士女の趣味にして、或事相に依りて保障せられ支持せらるゝ有る無くんば、所謂一般士女の趣味といふものほど有力にして而も危險なるものは之有らざる也。

文藝の批評家は此の點に於て多大の責任と貴重なる權利とを有す。即ち文藝の批評家は一般士女の趣味の保障者となり支持者となり、其の進歩を助け其の墮落を防ぎ、其の親切なる同伴者となりて誘導し、其の忠良なる諫爭者となりて警醒し、飽迄も一般士女をして其の取捨採斥に過失無からしむべき也。此の點に於て此の貴重の權利を十分に使用し、且つ其の威力をして實効あらしめてこそ、文藝の批評家は始めて眞價値あるの批評家として世に立つを得べきなれ。此の點に於て自己の貴重の權利を使用することを忘れ、且つ之を使用するも其の威力を實現する能はざるが如きは、即ち文藝の批評家としての一面の能力の缺乏と一面の用意の空疎なるを證し、全く文藝の批評家としての實質實力無き單に一個の饒舌家たるに過ぎざるを示すものなり。

明治の文學有つてより以來、幾多の文藝批評家中、一般士女の趣味を開發誘導して、誤謬と墮落とに陷るを避けしめたる點に於て、何人か幾年の實効を舉げたりや。殘酷なる探偵小説は隨意に流行したりしにあらずや、淫猥に近き戀愛小説は自由に横行したりしにあらずや、奇異なる繪畫は一時に盛行したりしにあらずや、法界節浪花節は明治の音樂なりと外客に評せらるるも辭すべからざる迄に行はれたりしにあらずや、歌人にして歌學者たる佐々木氏の如き歌は今猶行はるゝにあらずや。何れの處にか文藝の批評家が其の貴重の權利を使用し、其の效力を實現したるの蹟を認め得べきぞ。

おもふに明治の從來の文藝の批評家は、文學家藝術家に對しては或は親切なりしならん、一般の士女に對

しては餘り親切にはあらざりしならん。批評家は批評家たり、一般士女は一般士女たりし形跡無きや如何。善良なる批評家が文藝の士に對して懷きたりし同情の深厚摯實なるもの有りしは之を認むべし、一般士女に對して温き同情を寄せたりしものは果して之有りしや否や、確認し難し。文藝の製作物に對して嚴正なる判定を下せるところの裁判官は或は之ありしに似たり、一般士女に對して愛と義との下に神の眞意を解せしむるの牧師は之無かりしに似たり。文藝の士に對して教鞭を執らんと欲したる大先生は甚だ多かりし也、一般の士女に對して食物の能毒を論し示せる保姆は少かりし也。批評家は屋上に在りて法を說き、士女は隨意に歩みて或は溝に落ち或は塊に躓ける也。文藝の批評家と一般士女とは殆ど相關せざるに至れる也。既に其間に同情無し、何ぞ其間に相感應するの作用あらんや。こゝに於てか文藝上の批評に注意するものは、大抵文藝の士か若くは將來或は身を文藝に托さんとする程に文藝を嗜好せる一部の士女のみとなりて、一般の士女は何等の注意を此等の專門臭き文章演說に與ふること無く、自己の隨意に其の好むものを取り其の好まざるを捨つるに至れり。實に一般士女と文藝批評家との間には大塹濠の横はり隔つるあるに至れる也。

文學書類の發行者を以て名ある春陽堂は、文藝の批評家を尊敬すること甚だ篤し、故に其の刊行するところの書は、大抵之を所謂批評者に贈る。然るに同じく書肆なる嵩山堂は自店の發行にかゝるものを評家に寄せて其の評を乞ふこと稀なり。予曾て之を主人に詰りしに、主人答へて曰へらく、批評者は批評者なり、購買者は購買者なり、批評者は隨意の言を爲し、購買者は隨意の書を購ふ、今日此間に多大の關係ある無し、信頼するところの人の言を耳にするにあらざるよりは、誰か得知れぬ他人の言に依つて自己の錢を使ふの痴をなさんや、購買者の書を購ふは、發行者を信じて也、體裁の意に協へるを愛てゝ也、著者を好みて也、題目を悦びて也、すべて全く自己の撰擇に隨ふのみ、批評の善惡と販賣の多少とは正比例を爲さずと。予此の言を聞いて初は訝りしが、爾後大に世に行はるゝの書の、實に皆必ずしも好評の書ならざるを目擊するに及びて、主人の言の誣ひざるを悟れり。噫、是豈文藝の批評家と一般士女との距離甚だ大なるを語るにあらずして何ぞや。

文藝の批評家は如何なる時其の目的を達したりとす

べきか。批評家の能力有りや將無能力なりやは如何にして檢すべきか。批評家の言の、たゞ一部樂屋内にのみ止まりて、社會の全體に徹せざる時幾干の功あるべきや。是等は所謂批評家の皆自ら解すべき問題ならずや。

一般士女の趣味の高下は文藝界に多大の關係あるを思ひ、而して文藝批評家の一面は當然一般士女の趣味の啓發誘導に勉むべきものなるを思ひ、更に飜つて今の文藝批評家が文藝の士に對する一面に於てのみ言議を爲す事甚だ多くして、一般士女に對する一面に於て用意甚だ疎なるの觀あるを思ひ、扨批評家と一般士女との間の距離甚だ大なるを證する各種の事實を綜合して之を思考すれば、予は今後の批評家の一に偏して一を忘れず、今少しく一般士女に接近して甘露法門を開き、十分に其の貴重の權利を使用せんことを望まずんばあらざる也。

清國留學生問題

寺田勇吉

清國人にして目下我國に留學しつゝあるもの、其數の詳細は知るべからずと雖も、凡そ三四千人内外のものなるべしと聞けり。我輩の調査したる所によれば、此三四千の清國留學生は、毎月一人平均三十圓を下らざる學資を使用するが如し。然らば清國留學生より我國に入る金額は、少くとも一ヶ年百万圓を超過する計算となるべし。殊に現在の狀況によれば、留學生の數も漸次増加し、萬朝報の如き已に五千人以上に上りたりと傳ふ。加之吾同胞にして清國よりの招聘に應じ、彼地の學校に於て敎鞭を執るもの亦決して少からざるを以て、此等の日本人によりて敎育せらるゝもの頗る夥しかるべし。今此清國にありて日本の敎育を受くるものと、日本に留學して其敎育を受くるものとを合算せば、恐らく數萬の多きに達せん。我日本の敎育が清國に及ぼす影響や實に偉大なりといはざるべからず。

往昔我より彼に學びたるも今や地位轉倒しかゝる多數の清國人が、其國の内外にあるとを問はず、我日本に學ばんとするとするの盛なる斷象を呈するに至りたるは吾國の名譽なり、是れ我國民が血と涙とを以て成効し、若くは成効しつゝある、日清戰役、及び日露戰爭の効果の大部分を占むるものと見て不可なかるべし。日清戰役は勿論、就中今回の日露戰爭が始めより

淸人の豫想以外に連戰連捷したる結果、淸國人は續々として我國に留學し、又有爲なる敎師を招聘して、彼地に採用するの機運に向ひたるなり。此淸國の目的は我國の文明を吸收せんとするにあるは勿論彼等は何れも中等以上の人士なれば後日故國に歸るの日其力の大なるは期待すべき事也。故に我國當局者及敎育家は此機運を利用し、以て他日一層大いなる効果を收むるの原因たらしめざるべからず。今日の如き顯象を呈するに至りたるは、實に前に述べたる如く、全く我同胞が血と涙とを以て購ひ得たる賜物にして、幾多の忠臣義士の靈魂は此顯象の中に磅礴しつゝあることを知らざるべからず。然らば吾人が將來之よりして大成功の事業をなさんことは、此等の忠臣義士の靈魂に對するの當然なる感謝にして、又吾人非戰鬪員の國家に對する最大義務たることを忘るべからざるなり。

目下は戰爭中なりと雖も、將來は必ず平和の戰爭、即ち實業及び外交術によつて、戰爭の善良なる結果を收めざるべからず、就中彼等淸國人に向て適當なる敎育を施すことによりて、其効果を收むることを期せざるべからず。而して淸國政府が莫大なる費用を吝まず[illegible]我國に男子の留學生を送るのみならず女生をも送り來るは誠に我國の幸福且つ利益とする所なれば、我國人も亦、只淸國人が我國に來りて金錢を費すを利とするが如き考を持たず、彼の爲めに大いに、有爲の大才を養成して歸國せしむるの好意を盡すべき義務あるものといはざるべからざるなり。是れ敎育の方法如何に依り出來得べからざるの事にあらず。

然かるに目下我國にある淸國留學生の現狀果して如何。勿論例外もあらんも、其大多數は殆んど無監督の狀態にあるにあらずや。彼等が日常居住する所は、多く營利的の下宿屋にして、而かも一の下宿屋に多數の支那人のみ集合する有樣なり。又外に出てゝも淸國人のみの一群列をなして市中を遊歩する樣恰かも海中を游泳する小魚の群の如し。之を我國の學生が歐米に留學する風に比すれば實に天壤の差あり、即ち我國の留學生は同國人のみ集合して一の下宿屋に多數起臥するが如きこと全くなく、各々異りたる下宿屋に居るか、又は普通人の家に寄留して歐米の善良なる家庭の風習に浸染することを得るなり。之に反して淸國留學生が、我國にありて同一の下宿屋に淸國人のみ集合するの結果、一向に日本の善良なる空氣及び文明を吸收せず、從て毫末も善良なる風習に感染せず、以て遙々日本に

留學したる效果を收めざること果して何所ぞや。

且つ彼等が下宿屋にある狀態を一見せば、更に驚くべきものあるなり。某氏の隣地にも清國人の下宿屋ありて、聞く所に依れば朝より夕に至るまで其騷擾いふばかりなく、且つ其不潔なる沙汰の限りにして、洒掃したる某氏の庭園に向つて窓よりして唾痰を吐き、同氏の庭園の一部は恰かも彼等の痰壺なるかの如き觀あり、又支那は文字を尊ぶの國なれば、反古などは疎かにせまじと思ひの外、實際彼等の反古を放棄することは實に甚しく、同氏の庭園の一隅は彼等の放棄したる反古と唾痰とを以て山をなせりと其の不規律なる事甚しと云ふ。又下宿屋にても兎に角お客なれば、よし外見丈けにもせよ、彼等を鄭重に取扱ひ、彼等を利用して一毫と雖も其懷中を溫めんことを望むもの丶如し。而して下宿屋には、晝夜の別なく下女と戲れて甚だ騷々しく、又彼等が歸りしときは「何番さんお歸り」などと高聲にて歡迎し、又下宿屋に馴るゝにつれて「姐さんちよいと」などゝいひて惡戲をなし、漸次邪徑に入り、之が良風を養成することは到底不可能になり了らんとする傾向あり。少しく心あるもの慨然として嘆息せざるを得んや。

又近來清國人を教育する學校も漸次增加し、爲に自費を以て留學するものは多く富豪の子弟にして、其消費する金額も亦他の官費生よりも多きを以て、その利益を得んと欲し、此等の清國人を當て込みて設けたる私立學校の數非常に增加したり。清國人を教育する私立學校の增加する決して惡現象にあらざるも、多くは利己、又は營利をのみ目的とするが如き風あるは、其筋に於て嚴格なる監督をなすべき必要の切なるを見るなり。我東京に於ける私立振武學校のみは清國人に向て陸軍人的教育を授ける唯一の學校なれば、此校に於ては嚴格なる規定を設け、其の生徒は他校に轉入するが如きこと稀なるも、其の他の私立學校に於ては、少しく嚴重なる規則を設くれば、直ちに他校に轉入する風ありといふに至ては、我輩又之を何とかいはんや。殊に私立學校の多くは、全く營利的のものなるを以て、成るべく多數の生徒を集めんことを欲し、彼の學校に於て諸費一ヶ月廿五圓とすれば、我は廿四圓となし、又第三者は廿三圓となして他の二者を壓せんと勉むるの弊あり。斯の如くして奈何ぞ品性を陶冶し、人物を養成し、清國政府が期待する所の教育を施すことを得べき。されば今日甲校にあるもの、明日は乙校に轉じ、

明後日に至れば更に移りて丙校に入るが如きもの決して少からず。然らば即ち其結果如何に至りては、識者を待て後知るべきにあらざるなり。

清國留學生にして我國にあるもの、斯の如き状態にありとすれば、到底日本的の清國人を養成することを得ず。其結果或は、清國が日本に留學生を送ることを廢し、改めて歐米に向て派遣するの方針に移らんことを恐る。清國留學生をして今日の儘に放任することは斷じて不可なり。當局者は此際確實なる監督の法を定め、嚴重に之を取締るの策を講ぜざるべからざるなり。且つ又一方より考ふるに、前にも述べたる如く今日日本にある清國留學生は、何れも彼地中等以上の子弟にして、將來留學を終りて歸國し、以て國務に執掌するの曉に至れば、我國教育の如何が甚だしき影響を及ぼすべきこと、我歐米留學生の事情を一考するも直ちに了解せらるべきなり。即ち今日我國の要路に當れる人は、概ね維新以來洋行して歐米の新智識を受け、彼地の新空氣を吸うて歸朝せるものなるが如く、現今我國に於ける清國留學生も、亦他日彼國の要路に當りて、萬般の施設に從事すべきなり。而して殊に注意すべき[illegible]學生中にても、英國に留學したるものは長く英國を信じ、獨國に留學したるものは深く獨國を愛し、佛、米に留學したるものは又各々佛、米を賴とするが如く、己れの留學したる國は第二の故郷となり、長く其國の信念と感化とを失はざるものなること即ち是れなり。今我國に留學する清國人も、他日彼地に歸りて、日本の信念と感化とを維持するの長短、又は多少は、全く我國に於ける留學生教育の施設如何によつて定まるものといはざるべからず。此理よりして考ふるも、清國留學生を現狀に放任するは斷じて其可なるを見ざるなり。若し之を放任せば、多くの費用を惜まずして留學せしむる清國に利益なきのみに止らず、我國を信賴するの念慮も大に薄らぐべく、戰捷の結果一時は信賴するも、長き將來之を維持することは甚だ難しといはざるべからず。

若し事斯の如きに至らば、我國民が血と涙とを以て得たる結果も全く水泡に歸すべく、戰後清韓の經營に關しても非常なる不都合を生ずべきなり。故に吾輩の希望する所のものは、我當局者たる人は清算あるべしと雖も願は速かに清國公使等と協議の上、嚴格に其留學生を監督取締をなすの法を講ぜられんと是れなり。遙々日本に留學して滿足なる學問もせず、懶惰輕卒不

嚴律なる清國人をして滿洲後其富有國をしむるとも、自他互に何の利益する所なかるべし。而して此監督取締の法たる、少からざる費用を要し、又隨分困難なる問題たるに相違なきも、日清戰役、及び日露戰爭の効果を完全に收め、且つ將來我國をして少くとも東洋の中心たらしめ、東洋の平和を維持せしめんと欲すれば、清國留學生問題は實に容易ならざる關係を有すべきことを確信するものなり。而して其最も急務とする所は、有爲なる日本人をして之が監督に當らしめ、且つ私立學校を嚴重なる取締の下に置くにあるなり。其他此監督取締の方法に就ても、種々なる考案なきにあらずと雖も、目下多忙の身、更に他日を期して之を談話することあるべし。

本篇は前高等商業學校長寺田氏を訪ひて其談話の大要を記せしものなり。　記者

當今の青年と社會の氣風

德富猪一郎

中央公論の御依賴により、當今の青年と社會の氣風とても圖すべき様なる問題に就て、聊か意見を述べて見たいと思ひます。

豫て此事に就いては私は既に國民新聞にも書いたことがございますが、尚ほ其趣意を今一層適切に申しますれば、敢て概言する譯ではないけれども、其著明なる現象に就いて觀察致しますれば、今日の青年の或一部若くは多くの、且重もなる一部に於きましては、極めて個人的の傾向が增長して社會的若くは國家的の傾向が收縮して居るかの如く考へられまする。

近き例を取つて申しますれば、日露の戰爭に對しても、其熱心の度は年齢と逆比例になつて居はしないか、年を取つて行く程熱心の度が加はつて居るやうに見えはしないか、語を換へて言へば老人程戰爭には熱心であつて若い者程不熱心で冷淡であると云ふやうな傾きがあるやうに思はれはしませぬか、是は或は私の觀察が一局部に偏して居る譯であるかも知れない、或は又皮相の見に止つて其眞相を察することの出來ない爲であるかも知れない、併ながら私のみならず、友人等と話して見ても同感の者も亦決して少くありませぬ、私は今日の所謂老人崇拜者の仲間ではありませぬ、何れかと言へば成るべく若い者が仕事をする方が好きであ

りまする、併ながら今の所謂老人、先づ政治上、社會上に於いても、元老などゝ申す連中の狀態を觀察して見れば、隨分感服の出來ないこともないではない、又嚴正なる標準を以て彼等の言動に押篏むる時には、隨分非難の點も少からぬかと思はれまする、併し彼等が若し取るべき所ありとすればです、それは彼等が昔取つた杵柄とでも申しませうか、極めて國事に熱心なる點である、是だけは如何に四十年來の歲月が彼等を消磨しても、維新前後の風雲に養はれた、所謂單身國に許すといふ精神は依然として存在して居るやうに見受けられます、若し今日元老などゝいふ者が生存して居る理由があるとすれば、其理由は彼等が過去の勳功では無くして寧ろ彼等が現在に有して居る所の愛國若くは愛國の精神であらうと信じまする。

ところが今の青年者流に於ては、それが絕へて無いと言ふ事はないけれども、寧ろ少いと云はねばならぬ、私が遺憾に堪へないと云ふのは即ちその愛國若くは愛國の精神が少い事である、それで今の青年者流に於ては、少くとも其一部分に於ては、國家の事を論じても何となく氣乘りがしない、ツマリ彼等には國事道樂な、此道樂の趣味も乏くすらぬやうに思はれます

る、是は何故であるか、其理由に付てはそれ〴〵の說明もありませうが兎も角も斯かる現象は國家の發達の上から見れば決して歡迎すべき事ではあるまいと信じまする。

何故であれば今日は世界の大勢が國家を以て競爭の本位として、國と國とが互に團體を成し、其團體同士が互に生存の競爭をして居るのである、それで若し國を組織する所の要素にして、其國の爲に盡す精神が薄弱となるといふ事であれば、畢竟國家の運動がそれだけ薄弱になる譯である、それだけ薄弱になればツマリ國際競爭がそれだけ我に不利益になる譯である、天下の大勢は追々國際競爭が激甚になつて居る、激甚になるから隨つて國內で互に相爭ふことを止めて國家を一つの本位として爭ふ事が流行して行きつゝある、それにも拘らず我帝國に於て、現今若くは將來に於て國民の要素となるべき殊に敎育ある青年者流が國事に冷淡であるといふ事はです、此大勢と全で逆行して行きはしないかと思ふので、極言すれば頗る寒心に堪へぬ現象と言はねばならぬ、併し固より是は私が唯、一局部の觀察に過ぎぬのであつて敢て此の如しと槪論する譯ではありませぬ。

そして今日の青年諸君の最も興味を感ぜられるところは何事であるかと言へば實に不思議な事が多い、それは人生の歸趣であるとか、宇宙に於ける人間の地位であるとか、極めて空漠且高遠なる事にのみ馳せて居るやうであります、そは哲學問題として研究することは差支なきのみならず、定めて有要なることでありませうかなれども、總ての國民を驅つて哲學者となす譯にも行かず、二十にもなるかならぬか、三十を越すか越さぬかの少壯の人にして、人間は何處から生れて來たかどうか、何處に行くのか分らぬかとか、若くは宇宙經濟の理法とか人道の基本とか、種々樣々の面倒な問題に首を突込み若くは身體を突込んだとて、それで解釋が出來やう筈もなく、詰り其結果は天に昇らんと欲して毎日天に向つて足踏するだけのことで、所謂勞して功なきものでは無いかと思ふのであります、斯かる空漠なる妄想、——妄想と申せば或は苛刻かも知れませぬが、その妄想に煩悶するよりも寧ろ現在我が爲すべき事を爲したればどうであらうかと思ふのでありまする。

又或種類の青年は之に引換へて唯々金が儲けたい、若しくは立派な生活をして見たいといふやうな極めて卑近なる成功なるものを目途として、頭だ之に心を傾け力を傾けて居る、是も決して惡い事では無いが、其結局は唯々飽食煖衣の四字に過ぎないのであります、是では人生の興味が極めて卑俗且淺薄であらうと思はれる。

それで申して見れば精神的に走るものは精神的の主我的傾向を取り、物質的に走るものは物質的の主我的傾向を取り、何處までも主我的であつて、唯々我といふことのみを考へて他に及ばないのであります、此傾向は前述の通り何れに參りましても決して國家の爲に健全なる徵候とは思はれませぬ。

今の青年の氣風を極端に言うて見れば、或は支那人其儘になりはしないかと思はれるのである、支那では精神的に發達したるものは老莊の虛誕空茫なる哲學に傾き物質的に走りたる者は所謂金儲主義一遍に傾くやうになつて居る、而して此二者の爲に遂に支那には殆ど一人の愛國者らしき愛國者を見出すことが出來ないのである、そこで個人として支那人を見れば隨分立派な者も居る、又人種として支那人を見れば有力なる人種である、併ながら國民として國家の大事を負擔して行くといふ點に就ては、支那人は殆ど何等の取る所も

無いのである、私は今日青年の傾向が何となく支那人風に類して行きはしないかと思うて杞憂に堪へぬのである、彼等は必ずしも支那人を唯一の模範とするのでもありますまい、併ながら覺えず知らず、其到着點が支那人と同樣では無いかと思ふのでありまする。

或人は青年が國事に冷淡なることの顯象を見て是は教育の罪であると申します、或人は是は社會の罪であると申します、教育の罪と言ふ人は餘り教育が國家主義であるが爲に、恰も坊主の不信心、醫者の不養生と言ふが如くに却つて反動の勢を馴致して斯かる奇怪なる現象を生じたのであらうと云ひ、或人は社會に種族の階級があつて祿を世々にする其間は、衣食に差支なきが爲に往々國事をのみ專務としたけれども、今日となつては何人も衣食の爲に汲々たらざるを得ないが爲に斯かる傾向を生じたのであらうと申します、何れも一理あることとてありませう、併し其原因は何れにしても事實は即ち事實である、我等は其事實を正面に認めて、如何にして之を改善するか、如何にして之を矯正するか、と云ふ事に就いて充分なる考慮を要することと存じまする、如何に國家主義の教育が多量であればとてそれに反動しなければならぬ必要もありますまい、如何に衣食に汲々たれば迚、生活するが爲に國家の事を抛たねばならぬといふ必要もありますまい、私の信じます所に依れば、眞に國を愛する者は却つて其日稼ぎの人に多いと思ひます、若し生活に餘裕ある者が眞に憂國の士と言ふことであれば門閥家は憂國の士で無くてはなりませぬが、維新の改革は門閥家の手に成らずして却つて士族——士族の中でも殆んど下等士族、僅かに士族と言ふ事の出來るか出來ぬ位の位地に在る人の手に依つて成されたといふことを思へば、必ずしも衣食の必要と國事の冷熱とは關係があるものと言ふことは出來ますまい。

教育に就ても、或は國家教育を餘りに賴みにしたが爲に多少の害を及ぼしたかも知れないが、併しながらそれは教育の主義の罪で無くして寧ろ其主義を實行してまだ徹底せしめない爲の罪であらうと思ひまする、私は鸚鵡的の勅語の注入などの如きものを以て國家教育の目的此に達したりと言ふことを信ずることは出來ぬと同時に、無暗に國事を冷淡ならしむる所の教育の主義には毛頭同情を置くことが出來ないのである、苟くも日本國民をして將來日本民族の活動を世界列國競爭の間に於て演ぜしめんと欲するに於きましては、何

處までも國民が萬事を抛つて國家に盡すといふ精神を養ふを以て教育の第一義としなければならぬことゝ信じまする。

當今青年の氣風に就いての氏が所論は我青年の大に聞くべき問題なりとす、本誌載する所は、氏が匆卒の際漸く二十分の閑を得て談ぜられしものにて、未だ氏の意見を盡したりといふ能はざれども、亦以つて其一班を窺ふに足るものあり、吾人は我青年諸君の必ず之を熟讀せんことを望む者也。

今後の中流社會

法學博士　戸水寛人

從來日本の中流社會と稱するは、主として封建時代の士族、並びに農家、商家中の名門等を指せしものというて不可なかるべし。然れども日本が外國と盛んに交通を開くに至りたる後、其情勢大に昔日と異なるものあり、今後此中流社會を如何に改造し、如何に之を維持するかは實に一大問題なりといはざるべからず。「武士は喰はねど高楊枝」といふは、古來武士の間に行はれたる教訓の一なり。かゝる氣性を有せざれば、以て高尚なる人間となることを得ざるべし、此教訓は確かに武士道の精神より出でたるものに相違なきも、國民の操行をして廉潔ならしめんと欲すれば、今後尚此教訓を遵守するの決心なかるべからず。然りと雖も、啻にかゝる教訓にのみ拘泥して變通を知らざれば、自ら世界の趨勢に後るゝ恐なしとせず。かるが故に今後日本の中流社會を改良するに就ても、主として世界の趨勢に基きて此れが方途を講ぜざるべからざるなり。

今世界の趨勢を概觀するに、十九世紀の中葉より廿世紀の初頭に跨り、科學の進歩頗る迅速にして、其結果世界の交通機關は著しく發達し、世界到る處の新富源は續々として發見せられたり。此れが爲めに十九世紀の末葉に至つては、文明國人のなす所一として、非常なる大規模にあらざるものなし。假りに今回の日露戰爭を以て其例とせんか。那翁時代には無數の戰爭續起せしと雖も、軍隊を輸送するに鐵道によれることなく、號令を發するに電信電話を利用したることなし、蓋し當時未だかゝる文明的の交通機關發明せられざりしを以てなり。此れが爲めに那翁の如き古今無双の名將と呼ばれ、不世出の英雄と稱せられし人と雖も、其

軍隊の一部分には糧食の剩餘を來たし、他の部分には其缺乏を告げたるが如きこと決して少からざりしなり。之れよりも遙かに以後、一千八百七十年の普佛戰爭の頃に於ては、或程度まで鐵道を利用したりと雖も、號令に電話を用ひたることなし、蓋し當時未だ世界に電話の應用あらざりしを以てなり。加之其戰報忽ちにして世間に傳播するが如きことは、當時決して見るべからざることなりき、何となれば當時尙ほ世界の交通機關の發達極めて幼稚なりしを以てなり。然るに今回の日露戰爭に於て、露國は西比利亞鐵道の如き長距離のものを利用し、亞細亞大陸を貫通して夥しき軍隊を東洋に輸送し、且つ此軍隊に要する非常なる糧食についても、未だ缺乏を來たしたる事實を耳にせざるなり、又我日本の如きも、數十萬の軍隊を滿州に送りながら、糧食は勿論、其他萬般の事項に關して不手際なりしとの評も未だ耳にせざる所なり。且つ又聞く所によれば、日本の將軍は其部下に號令を發するの際、屢々電話を利用しつゝありといふが、電話をかく盛んに戰爭に利用したるは、世界開闢以來今日を以て初めとなす。加之、日露戰爭の報知は瞬間にして世間に傳播し、今日滿州の野に戰へば、明日歐米の人の口にせらる。甚だしきに至つては、敵將黑鳩公が露國の大本營に對して送りたる報知も、忽ち日本に於て之を知ることを得べく、日本の大本營にて發する公報も、亦忽ちにして露國ツアールの耳に入るべきも論なきなり。

單に戰爭に就てのみならず、商業に關しても亦萬般の形勢、十九世の末葉に至つて全く其面目を一變せり。例へば、商人は如何なる事業を爲すに當りても、十九世紀の初頭に於ては大會社を組織せしもの甚だ少かりき。ゾンネンシャインの出版にかゝるソーシアル、ホライゾンと題する書に記せる、僅かに牛乳配達の事に就ても此變遷を證するに足るべし、即ち當時牛乳屋の主人は、身自ら戶々に牛乳を配達したるものなりしも、現今に於ては、大會社は多數の雇人を使用して之を配達せしめつゝあり。又米國に於ては、十九世紀の末葉に至て種々なるトラストの勃興せしも皆人の熟知する所なり、而して就中ロックフェラーのスタンダード、オイル、カムパニイの如き、カーネギーのスティル、カムパニイの如きを以て其最も著名なるものとなす。其他近來船舶のトラストも出來つゝあり、又麥粉に關するトラストも將さに成らんとするの形勢あり、かゝる大規模の事業續々としてあらはれたるが爲め、商人

は各自一個の資本を以て活潑的に計畫をなし、以て商業に從事せんことは頗る困難なりといふべく、又今後益々困難となるべきは疑を容れざるなり、歐人と雖も米人のトラストを見ては流石に驚嘆し、目下此に對する方畧を盛んに講じつゝあるなり。

又十九世紀に至つて、世界到る處新富源の發見せられたることも世人の知る所なり。就中亞弗利加に於けるランドの金鑛の如き、其最も著しきものなりとす。又石油は諸所に於て採掘せられ、石炭も亦之に劣らざるの盛況を呈しつゝあり、殊に米國に於て石油石炭の採掘せらるゝ高は非常に大にして、其結果亞米利加の石油は諸所に輸出せられ、石炭の如きに至つても亦大西洋等に於て盛んに使用せられつゝあり、亞米利加の石炭は重もにペンシルバニア、メーリーランド、及びジョールヂア等に採掘せらる。今日に於ては主として太西洋に用ひられ、時としては地中海まで闖入するとあり。然れども他日南北亞米利加の間を開鑿する所謂パナマ運河の成就する曉に至れば、米國石炭は必ず太平洋に於ても大に用ひらるべきこと疑を容れざるなり。其他米國の富源を擧ぐれば、綿に關して、米に關していふべきこと決して少からず。パナマ運河の開鑿と共に、此等の物産は、東洋に著しき影響を與ふべきことと燎々として火を睹るよりも明かなり。

夫れ世界の情勢は以上述ぶる所の如し、十九世紀の末葉に於て、世は大に昔日と其面目を異にし、如何なる事業と雖も皆大規模を以て之に當らざるべからざるに至りぬ、且つ新富源の續々として發見せられたる結果、大規模を以てなすべき事業の數も亦著しく增加したり。而して殊に注意すべきはかゝる大規模を以てなすべき事業の大多數は太平洋及び其沿岸に於て活劇を呈すべきこと即ち是れなり。世界の情態已に斯の如しとすれば、我中流社會を改造するに就ても、主として此趨勢に基て之が方途を講ぜざるべからざること論なかるべし。

然るに我國現今の教育制度といひ、其他社會に存する萬般の事業といひ、未だ此世界の趨勢に應ずる丈けの準備をなさゞるものゝ如くに見ゆるは、予の極めて遺憾とする所なり。例へば一つの中學校に於て、大學に入るの準備と、中流社會に入るの教育とを兼ねしむるが如き、最も誤りたる方針なりといはざるべからず。一つの學校に於て二つの目的を兼ねしむるの結果、其課目を檢査すれば、大學に入るの準備としては不必

のものあり、又不足なるものあり、中流社會に入るの教育としても亦然り。今中學校の課程が、中流社會に入るの教育として不足なるもの、一例を擧ぐれば、經濟思想の發展を計らざるが如き其最も著しき缺點なるべし。又大會社を作り、大規模の事業に從事するには、必ず敏腕なる事務家を要す、而してかゝる敏腕なる事務家を養成するには、必ず多少の法律思想を注入せざるべからず、我現今の中學校に於ては此準備全く整はざるにあらずや。日本の教育家は政治思想に乏しく、又世界の趨勢に通ぜざるなり。日本の政治家は政權の爭奪に多忙にして、冷靜に前途の經營を考ふることをせざるなり。之が爲めに、他日國民の柱礎となるべき中流社會の改造の如き大問題と雖も、今日の有力者の顧る所とならざるは甚だ遺憾なりといふべし。苟も社會の進歩を欲するの人は、充分此點に注目し、中流社會の改良に力を盡されんことを希望して止まざるなり。

（文責任記者）

▲消化論　和田垣謙三氏

其他豫告の寄稿、締切期日に後れたるが爲め、遺憾な

戰局私觀

福本日南

（一）

日露戰局に就て我邦人一般の論ずる所を見るに、餘りに樂天的觀察をなすもの多きに驚く。予は今露國の狀態、戰略、並びに列國の嚮背如何を說きて世論の妄を破し、以て大いに我國民の覺悟する所なかるべからざるを述べんと欲す。

露國の狀態を論ずるもの、成るべく日本に都合よき觀察をなし、以て我邦人の自負心を滿足せしめつゝあるもの甚だ多し。露國内には自由黨あり、社會黨あり、虛無黨あり、又彼の如き團體なれば其人種も一樣ならずして、大露西亞人、小露西亞人を除くの外、波蘭人、フキンランド人等をも含めり。而して此等の黨派及び異人種は、皆現政府に對して不平滿々、或者は政府を改革して立憲政體となさんと欲し、或者は好機會を窺ひて露國の手を離れ、以て獨立の國を建てんことを願ふ。此等の連中は此戰局を以て無二の幸となし、乘じて以て其年來の目的を逐せんと企圖しつゝあり。彼の成るべく日本に都合よき觀察をなす人々は之を見て、

今にも革命の起るかの如く考へ、戰局だに進めば露國は內亂の爲めに自ら屈服し、到底日本に抵抗する能はざるに至るもの丶如くいひなせり。予の見る所によれば、これ甚だしき謬見にして、全く信頼するに足らざる妄想なり。

勿論彼等各種の不平黨は、皆機會あれば蜂起せんとの念切なるは事實なり。就中フィンランド人、波蘭人等は何れも事を擧げんとして熱中しつ丶あり。されど露國の狀態を詳かにすれば、か丶る事の一朝一夕にして起らざるべきを知るに難からざるなり。何となれば彼露國政府なるものは非常なる兵力と警察力とを有す。此二大權力を以て國內に臨む、彼等不平黨は容易に起ること能はず。加之一方は此二大權力を有するに反し、露國の人民は全く兵器と稱すべきものを有せざるなり。是れ彼等が叛亂を企つるに當りての一大缺點なりといはざるべからず。起らんとするの希望は山々なりと雖も、到底起るべき機會と準備とを有せざるなり。

今茲に一例を擧げんに、其人の名を指すは憚ありと雖も、日本の或筋の人に向て、フィンランド人の獨立黨は其總代を出して交渉に及びたり。其言に曰く、我等は此戰局を利して露國に叛亂せんとす、只我等には兵器なるものなし、願はくは若干の兵器を我等に供給せよ、兵器備はらば我等は直ちに蜂起せんと。又一方に於て、開戰以來各種の不平黨は、內國の兵營に手を廻して兵士を其味方に附くることに盡力したり、是れ兵士を味方とせずんば彼等は到底起ること能はざればなり。

夫れ露國の狀勢や以上の如し、而して露國政府も亦此事情を熟知せり、さればか丶る際に憖いに叛亂を起せば、却て政府の術中に陷れるものといふべし。何となれば微弱なる力を以て起れば政府は一擧にして直ちに之を鎭壓し得べければなり。現に先帝亞歷山二世の御宇に當つて革命黨大に起らんとせり、然るに當時各不平黨の首領を捕へて或は斬首し、或は放逐し、或は流謫したるを以て爾後其首長たるもの之が爲に殆んど勢力を失墜したり。政府としてはか丶ることを宣言すると能はざるべけれど彼等政府黨の心中を察すれば寧ろ叛亂の起らんことを希望するもの丶如し。起るものならば一刻も早く起れと希望するもの丶如し。然れども革命黨も亦此事情を熟知せり。現に波蘭人にして革命黨の一人なるもの東京に來て曰く、吾人は滿を持して放

たず、輕忽に蜂起せざる方得策なり、其故は慾いに起れば直ちに鎮壓せらるべし、起らざれば何時起るやも知れざるを以て政府も幾分か其暴戾を謹む所あるなり。而して戰局進めば力を東方に專らにせざるを得ず、かゝる時に當つて蜂起せられては容易ならずと思ひ、我等の滿足する程には至らずとも、或程度まで我等の要求を容るゝに至るべき傾向ありといへり。近くはプレヴエーの死後、比較的溫和なるミルスキーを以て內務大臣とし頻りに人心を和げんと勉むるが如き風あるを以ても見るべきにあらずや。かゝる狀態なれば內亂が直ちに起り、內より潰えて日本に抵抗する能はざる如く考ふるは甚しき妄想にして、決して依賴とするには足らざるなり。

（二）

露國の戰略に於ては全く彼の遺算なりしこと勿論なり。即ち彼は開戰前日本は洞喝して屈服せしめ得べきものと深く妄信したりし結果、準備の整はざりしことは極めて明白なる事實なり。これ露國人と雖も屢々自白し、又後悔しつゝある所なり。要するに彼等は全く日本を知らざりしなり。日本の眞價を知らずして輕卒に事端を開けるなり。然れども彼は或一部の日本人が考ふる如く容易に屈服するものにあらざることを知らざるべからず、何となれば露國の地位は世界の第一等國として如何なる强國と雖も其右に出づるものなしと露國も自信し、又列國も然りと認めし所なり。而して日本の地位を顧みるに日本自身は等しく世界の一等國と信ぜしならんも從來列强よりして之を視れば一等國の最尾か又二等國の頭位の地位にありき。今其日本國と戰局を開き、而かも日本の爲めに散々に打破られ、それに閉口して日本に媾和を乞ふに至らば露國の現地位は一朝にして地に墜ち、歐洲に於ける權力の平衡を失するの恐あるのみならず、且つ各種の民族を集めて成る露西亞帝國內部の地位を危殆ならしめ、爲めに露國の大變動を來すべきこと論なきなり。假令露國は亡びずとするも現ロマノフ朝廷は殆んど危き運命に陷るべし。かるが故に露國は決して今回の戰爭に敗れて止むべきにあらず。これ露國の容易に戰局を收めざるべき一原因なり。

又露國の政體にして若し西歐諸國の如く立憲國ならしめんか。輿論の制裁は專制主義若くは官局主義（ビューロクラシー）に反對して此馬鹿〳〵しき戰爭を妨止するに充分の効力あるべし。然るに露國の如き絶對なる專制君主國にあり

[illegible]ニコラス二世は善良の君主たるに相違なきも、極めて初心なる善良の君主と稱せざるべからず。凡そ日本の國内にありても知らるゝ如くお大名そだちのお坊ちやんは極めて氣隨氣儘なるものにして、只管自己の主張を立て、我意を通さんことをのみ願ふ。これお大名そだちの坊ちやん、又一段上にしては專制君主國の君主の常態なり。而して此等の人に限りて時の情勢に暗きこと古今共に一なり。今ニコラス二世も此お大名の亞流たるを失はず。此お大名の如きニコラス二世が深く聖露西亞の雄大なるを信じ、世界何れの國と雖も此聖露西亞に向て指一本をもさゝせまじとは彼の篤信する所なり。然るに國もあらんに極めて小なる東洋の一國が此聖露西亞と戰局を開くとは事已に意外なるに、而かも海陸共に敗をとるを見ては、彼の嚇然として怒るは當然なりといはざるべからず。彼小國人の亞細亞人が露軍を破るとは實に不埒千萬なり、奇怪至極なり。我露軍が敗れしとあれば、これ我兵數の少きなり、これ我船艦の足らざるなり。兵數少なければ兵數增すべし、船艦足らざれば船艦加ふべし、我あらゆる勢力を擧げて一擧此無禮なる小國を滅せざるべからずと號令[illegible]而して露國には[illegible]しき君主の意志を抑制し、妨止するの機關一もあることなし、即ちルイ十四世の所謂「朕即國家」は露國全體を支配する言葉なり、事斯の如しとすれば再三再四露國を破れりとて露國恐るべからずと安心するが如きは到底智者の爲す所にあらざるなり。然りと雖も更に考ふれば露國と雖も凡そ國計には程度あるを以て君主の我意を何處までも押し通すが如きことはなし能はざるに相違なき事情あるなり。

（三）

今彼の戰略の變遷を問はんに、彼が最初の戰略は開戰前に當り、日本の國狀を熟知せず、一擧して日本を擊破し、所謂『城下の盟』を贏ち待んとするにありき。予をしていはしむれば第一期に於ては露國の目的はいふまでもなく城下の盟にありき。然るに漸次戰を開くにつれ、海陸共に退敗し、露國も全く其見當違なりしことを悟るに至れり。是に於て彼の戰略は一變し、予の名つけて『一勝媾和』の策に移りたり。此一勝媾和の策に移れるは近くは遼陽の戰爭の如き全く此戰略を基礎として開かれたるものと見るべきものなり。此戰爭、

の開かるゝ前に當りて露獨の間に確かに一の協商ありき、遼陽に於て露軍我に勝てば恐らく獨逸此仲裁者となりてあらはれたりしに相違なし、今煩はしきを厭ひて此例證を擧げざるも此徴候は甚だ明かにあらはれたりしなり。然るに露國は遼陽にも破れ、又沙河にも破れ、彼の所謂一勝媾和の策も到底行はるゝ見込なきに至れり。

　而して予が一勝媾和の戰畧ならんと見當をつくるに至りたるは歐洲の輿論よりも之を推定することを得べく、又露國從來の舊套によりても認知することを得べし、今歴史上に於ける此れが類例を擧げんに、彼のクリミヤ戰爭の如き即ち此れなり。該戰爭は普通セバストポールの陷落を以て結末を告げたるものと稱す。之を大勢の上より論ずれば勿論然りといはざるを得ざるべし。然るに剛愎なる露國は決してかくの如く見るを欲せざるなり。今該戰爭の詳細をいへばセバストポールの攻圍は一千八百五十四年の九月より起り、翌五十五年の九月に至りて始めて攻下することを得たり。此城の攻下せられし爲め、露國も大いに困却し、到底抵抗することと能はずとは外國と共に彼も亦自認したる所服することとは彼の好まざる所、彼は尙一層内地に退却し、抵敵の行爲を繼續したり。而して露國は此セバストポールの陷落に先つこと一ケ月即ち同年八月より他の一軍を以て土耳古領たるアルメニアに侵入し、アルメニアの首府カルスを圍み、非常なる勢力を以て終に同年十一月に之を攻下したり。之を攻下して後始めて媾和の端緒を開きたり。實際よりいへばセバストポールとカルスとは到底比較し得べきものにあらず、比較し得べからざるものと雖も露國人は揚言して曰く。汝等セバストポールを陷落せしとて得意なるも我等はカルスを攻下せしにあらずや、我は一方に破れて一方に勝つ、戰爭は五分〳〵なりと。かゝる口實を以て甚しく露國の面目を毁損せずして媾和の道に入りたるなり。見よ、これ明かに我が所謂一勝媾和の政策にあらずや。

　今回の遼陽又は沙河に於て必ず勝たんを勉めたる理由も之を見て後に考ふれば必ずや思半ばに過ぐるものあらんなり。而して今後猶彼は此一勝媾和の戰畧を捨てたるにあらず、彼は今年より來春に亘りて何處かの戰爭に於て一度は勝たんものと希望しつゝあり。一度でも勝ちしなれば媾和の道は速かに開くべきも、

さりとてかゝることは吾人の決して許し能はざる所なり。されば此戰爭の長からざるを得ざるも亦いはずして明かなり。

今戰局の終結を考ふるに彼をして一勝媾和の望全くなからしめば彼は先きに城下の盟より一勝媾和の戰略に移りたると同じく、終に第三の「戰局維持」の戰略に移るべし。即ち長く屈せず、飽までも服せずして何時までも戰局を維持するに勉むべし、然らば此場合に於て仲裁又は他の方法によりて其結果を告ぐるに至らん。勿論彼と雖も徒らに戰局を維持するも何の勝算なきに至れば、終に窮せざるを得ざるべし。されど體面上決して閉口はせじ、小日本に對して決して屈服はせじ、露國は其面目を持する丈けの外觀を失ふ如きことはせざるべし。見よ、其間に必ず或強國の仲裁入りて此局を結ばしめんとすべきなり。

（四）

又更に眼を轉じて列强の嚮背如何を見るべし。此點に就ても日本人の或者は總て己れに利益なるが如き觀察をなすものあり。予の見る所によれば日本は決して彼等の想像するが如き利益ある地位に立たざるなり。先づ英國に就ていはんに英國は日本の同盟として深き同情を我に寄するに相違なし、然りと雖も日本人が依賴する程の同情を有するや一大疑問なりといはざるべからず、そは英國に行はるゝ多數の輿論に徵して明かに推察することを得べし。英の外交論者なるヂプロマチカス又はカルカス（兩者共に匿名なるべし）等の議論は此問題に就ては大要一致するが如し。即ち其意見に曰く、成るべく多く日本の利益を保證すると同時に露國をして甚しく利益と名譽とを毀損せしめざる程度に於て局を結ばざるべからずと。而して此點は英國の輿論の殆んど一致する所といふて可なり。此矛盾したる二要件を一時にして收めんとす、何たる困難なる注文ぞや。彼等がかゝる要求をなす所以のものは日本が露國を極東に於て打擊するは英國の最も喜ぶ所にして今日本が露國の極東に出したる頭を擊退すれば露國は少くとも今後暫くの間は此方面に手を引かざるを得ざるべし。即ち日本のお蔭を以て英國の極東に於ける利益を未來若干年保證し得べし。かるが故に日本の大に露國に勝たんことを希望するなり。然りと雖も英國の眞に恐惧に堪へざるものは露國の外に今一國あり、獨逸即ち是れなり。獨逸のカイゼルの政策は十年以來明かに知ることを得べし。彼は大いに海軍を擴張し、其援

助によりて到る處に英國の商權を奪はんと企つ、これカイゼルの大目的なり、夫れ故に十年以來海軍を擴張すると甚しく、今猶擴張に勉めつゝあり、然れども英國の大海軍力に向て抵抗するとは實に容易ならず、又現在の有様を見るに、歐羅巴大陸の事情は獨逸を箝制して思ふが儘なる擴張をなし能はざらしむ。即ち獨逸の腹背には露佛同盟軍あり、獨逸は其間に介在せり、此に對する陸上の軍備に國力を傾注せざるべからず、今海軍に於て充分なる力を盡さんとすれば先づ、此重荷を卸さゞるべからず、此重荷を卸せば始めて海軍に其力を傾注するを得べし、而して此れをなすには先づ第一露國を其の味方にするの必要あり、一度露國をして味方たらしめ露獨の間假令同盟を結ばずとも過去の三國同盟、對露佛同盟の如き相嫉視を解けば、國境の準備即ち露國に對する準備の一部を緩うすることを得べし、而して此機會を作らんものと彼れカイゼルは其炯々たる眼光を以て十年以來睥睨しつゝあり。今日日露戰局の起りしは全く彼れカイゼルの圖案に入れるなり。されば彼は開戰以來あらゆる神秘なる策畧を以てツアール及び其臣民を極東に追ひ込まんと勉めつゝあ[illegible]

が故に今露國が日本の爲に再び起つべからざる程挫折せば、即ち其時はカイゼルの政策の歐大陸に即位するの時なり、衰弱したる國を味方に附くれば佛も亦其伴侶として之に加はるべきことと疑なし、然らばカイゼルの大目的たる海上の商權を一手に掌握するの政策は充分に行ふことを得べし。是れ英國にとりて何よりの大禁物なり。夫れ故に英國は此點よりして露國を餘りに弱はらしむることを欲せず。極東に於ては日本をして露國に勝たしめ、多少露國を閉口せしめたきも、さりとて一敗起つ能はざる致命傷を負はしむることを願はず。これヂブロマチカス及びカルカスの成るべく日本の利益を保證すると同時に甚だしく露國の利益と名譽とを毀損せしめざる條件を希望する所以なり。之を以て後日列強仲裁の下に日露の媾和成立するとあらば、其時容喙する英國は、日本人の或は案外として驚く如き提案をなすべきや未だ知るべからざるなり。

又獨逸の政策を見るに、大體今述べたる如く、彼は露國をして成るべく極東に於て疲弊せんことを歡迎す、然れども彼も亦露國に全く敗をとらしむることを欲せざる事あり。而して其欲せざる程度の如何をいへば彼は寧ろ遙かに英國の上にありといはざるべから

ず。何となれば彼は膠州灣を占領して支那の山東に其根據を据ゑたるものなり。山東の地たる極東に對する戰略上及び商業上の最高位置にあり。即ち山東半島は東海に面して南清と北清との中央にあり。戰略上よりいはんか、支那の南北を兩斷するに適し、商業上よりいはんか、商品を南北共に供給するに宜し。而して少しく其手を伸せば一方は滿州まで達すべく、一方は朝鮮迄も其商業區域を擴張するに便なり。此好位置に坐してカイゼルは其大政策を行はんとす。然るに省みれば獨逸が此膠州灣を占領するに至りしは露國が旅順を占領せしよりも一層理不盡なる行爲なりしなり。露國の旅順を取りしは猶托辭あり、即ち獨逸なる一强が膠州灣に據りしは極東に於ける權力を一方に傾くるの恐あり、之を平衡して極東の平和を維持せんが爲めに旅順の占領を必要とすといふにありき。露國の旅順港をとりしは獨逸の膠州灣占領に誘はれて發したる出來事と稱すべし。故に其罪をいへば露國は寧ろ從犯の徒なり、而して主犯の罪は實に獨逸にあり。其重き主犯にあるは獨逸自らよく之を知れり。今日本は其從犯の露國を怒りて之れが爲に其戰局を開く。若し從犯者が破れて旅順を明け渡し、滿州を捨てゝ退くの運命に至ることあらんか、日本は夫て一層重き主犯の罪を問はるゝことなかるべきか。之れ獨逸の杞憂とする所なり。されば獨逸は露國の力を弱からしめたきも又今回の戰爭には露國を勝たしめたしと希望しつゝあり、夫れ獨逸はかゝる希望を有す。開戰以來獨逸が露國に對するいふべからざる好意あるは、自ら此間の消息を語るものなるを了すべきなり。然らば一朝列國の仲裁によりて媾和の條件規定せらるゝ場合に至れば、獨逸が多く日本に利益すべきや、又露國に利益すべきやは推測するに難からざるなり。

又次ぎに佛國を見れば、之れは勿論露國の同盟なればあらん限りの力を以て露國を援助したきは當然の事なり、而して現今の世界に於て全世界を料理塩梅するもの交戰の當事者を除き、先づ英獨佛の三國が其主要なるものなり、此主要なる三國の嚮背にしてかくの如しとすれば、仲裁によりて戰局を結ばざるべからざる曉に至り、日本人の希望する程の目的に達することは容易ならざることゝいはざるべからず。此等の點に就て眞確なる計畫を立て置かざれば、期に臨んで非常なる落膽をせざる可らず。以上戰局に關する私觀を述べて世の樂天論者を戒むること斯の如し。（文責在記者）



海外新潮

本誌に掲載する處の海外新潮に依つて歐米列國の大勢を知らんと欲するもの頗る多きが如し、歐米の大勢を知るは即ち世界の形勢に通ずる也、吾人が之に多大の費用と精力とを傾注するもの、各國語に通ぜざる人をして現世界をより多く熟知せしめんが爲め也、これ蓋し我國現時の急務なりと信ず。

列國は仲裁の義務あり

「スピーカー誌」

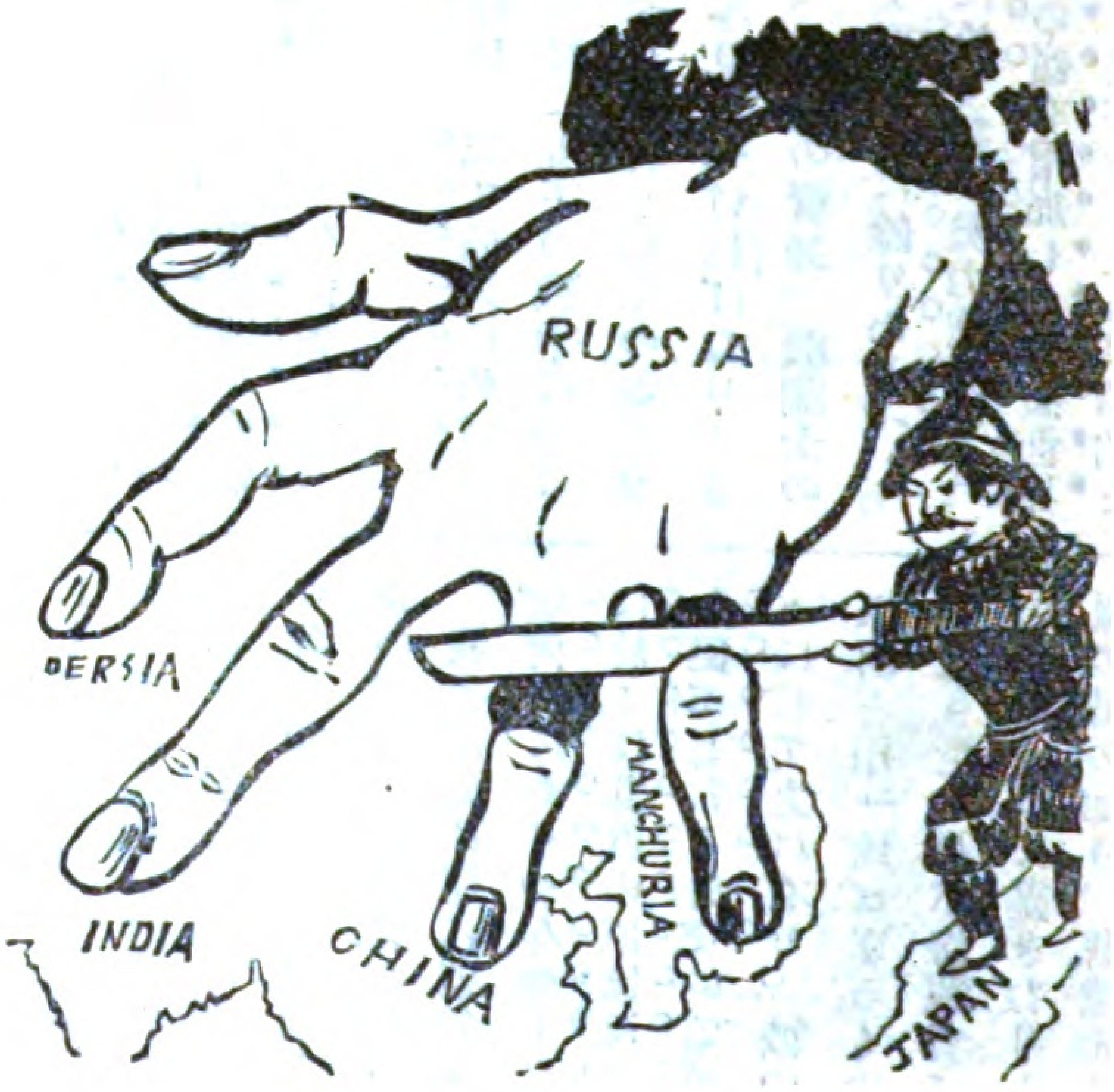
遼陽の大戰に於ける兩敵國の戰闘員及び死傷者の數、並びに長時日に亘れる激烈なる殺戮の有樣を見れば、該戰爭が世界の戰史に於て最大なるものたりしことの恐るべき事實を認めざるを得ざるべし。是に於て文明諸國が仲裁して以て此殺戮を妨止すべきの好機會に到着したることを思はずんばあらず。

露國は如何なる人が如何なる種類の仲裁をなすとも決して之に耳傾け[illegible]に耳傾けざるのみならず、かゝる企を以て全然惡意に出づるものなりと認むとさへ揚言したりと傳ふ。然れども現時に於ては仲裁を以て惡意に出でたりと看做すは甚だ事理を解せざるものといはざるべからず。思へ、遼陽の如き大戰爭に於て、兩敵國互に其勢力を損耗したる後、好意と勢力とを以て呈せられたる仲裁に對し、日本も露國も之を忌み嫌ふべき所以何處にありや。今に至て兩國は少くとも敵の侮るべからざるを互に認知したり。又吾等は今回の戰爭が露國民にとつて甚だ不人望なるの事實も説明し得べし。今回の戰爭は露國民にとつては殖民地の戰爭なり、此一事已に露兵の心をして戰爭に熱する能はざらしむ。彼等思へらく我等は滿州と何の關係ありや、遼陽奉天吾等にとつて何の利益ありや、かゝる土地に於て吾等の勢力を發し、生命を賭する眞に愚かなる業なりと。又日本人と雖も左程戰爭を歡迎するものにあらず、彼等が日常旅順及び遼東半島の還附を遺憾とし、又朝鮮及び滿州との通商を沮害する露國の海關税に就て不安の念を抱きしことは事實なりと雖も、之が爲めに戰爭を惹起するが如きは彼等の好みし所にあらざるなり。よし始めは熱心なりきとするも永久冷却せざるの熱心は世界何處にあるべきや。日本は遼陽第一戰に於ける不明の勝利に實に恐るべき程の盛大にして驩擾なる祝捷の會合を開きしに拘らず、其第二戰に於ける疑なき大勝利には寧ろ甚だ冷淡にして街上歡呼の聲なく、屋前旌旗の飜るを見ずといはるゝを見ても日本の現情如何を推察すべきにあらずや。

勿論露國に於ては人民の輿論なるものに何の効力なし、露軍は政府の命を報じて敵と戰ひ、殺戮を遂行せざるべからず、然れども彼の滿州の占有を不可となし、開戰的外交に反對せしウヰッテ氏を首領とする黨派が漸々露都に於て勢力を得つゝあるを見れば露政府と雖も全く戰爭を歡迎しつゝあるものにあらざるを知るに足らん。

即ち仲裁は全く戰爭を豫防するものにあらざること以上の如し、又假令當局の意向吾等の推察に異りとするも、列國互に協同して此悲慘なる戰爭に仲裁を試むるに何の關する所ぞや。千八百九十九年海牙に開かれたる第一平和會議に於ては日露兩國も出席して仲裁は中立國の最大義務たることを決したるにあらずや、而かも其草案は全く露帝代理人によりて呈出せられたるものにあらずや。或は曰く仲裁とは開戰前、起らんとする戰爭を止むるの意なりと。されどこは大いなる誤りなり、有名なる露國法律學者マルテンス氏は第一平和會議の際其政府の爲めに記したる仲裁の條の說明に於て、近世の戰爭の大多數は中立國の干涉仲裁によつて結了するものなること露土戰爭の如しといひ、仲裁は戰爭を中止せしむる唯一の道なることを明かにせり。且つ第一平和會議の第三條の條文を見れば此事一層明白となるべし。仲裁は啻に正當なるのみならず、必らず之をなさゞるべからざる義務あり、而して現今は當さに此仲裁をなすべき最好時機にあらずや。吾等は列國が其義務を自覺し、以て仲裁の勢を取らんことを希望するものなり。

メルボルン記載



〔あんまり手を伸ばすから
二本ばかり切りてやらう〕

獨乙皇帝と西藏

「スペクテートル誌」

極東に於ける獨乙皇帝の政策を明かにするは、全く不可能のことにはあらずと雖も、隨分困難なる問題といはざるべからず。タイムスの北京通信員は報じて曰く、英國と西藏との條約を承認することを拒むものは露帝ニコラス二世にあらずして實は獨帝ウイルヘルム二世なりと。而して此通信員は深く清廷外交界の內幕に通ずるものにして獨帝がかゝる舉動に出てたる理由を明かにせんと試みたり。獨帝が西藏に於て利害相關せざるべきは、恰かも天上界の星と異なることなかるべし。又彼が如何に黄禍論を主張し、且つ將來必ず起らんことを眞實に考ふるにせよ、之が爲めにあらゆる政策に影響を及ぼすべしとは我等の信ぜざる所なり。若し黄禍論の爲めにあらゆる政策を曲ぐるを肯ずるものなりとせば、其西藏に干涉せんとする、英國はたゞ日本の同盟國たりとの理由よりせるものならん。然れども我等は決して此事實を信ずること能はざるなり。又聰明なる彼の政策は、佛國政治家の一時慣用せしが如き、重箱の隅を楊枝にてほじくり、以て他人の恨み

を買ふが如きものとは、萬々其撰を異にするや疑を容れず。吾等は寧ろ彼の行爲を以て、全く別種なる二つの動機より出でたるものと見るの妥當なるべきを思ふ。一は彼自身の性格より起り、一は此事の成就は大いに自國に利あるべしとの政略より來りたるものゝ如し。ウヰルヘルム二世は支那たるを問はず、ヴェネズュラたるを論ぜず、世界何れの場所に於ても己れの勢力を示さんことを欲すること切なり。是れ其性格の虚榮心に富めると、又彼が其國民に對する政略に基するものなり。何となれば彼は成るべく四方八方に手を延ばし、其人民より陸海軍の爲め、又は殖民地の爲めとして頻りに徴收するの金額も要するに其の商業區域を擴張し、以て彼等人民の便益を圖らんとするに外ならざることを彼等に知らしめんと欲すればなり。

又他の理由は彼が露國と益々密接なる親交を結び、以て極東に於ける日英同盟を破壞せんとするにあるが如し。彼は直接に現下の戰爭に加はり、以て露國を援助せんことは決してなさゞるべし、若し斯くの如くせば英國も戰場に顯はれ、以て彼の新艦隊の破壞を見るべければなり。されど彼が開戰以來、非常なる好意を露國に表し、物品の賣却、機關士の給與等心を用ひざるなきを見れば、彼の精神や又察するに餘りあるべし。即ち彼は之を以て露國に勝利を得さしめ、清廷に於て露の勢力確立せば、獨乙は特別なる通商允許の利益を得、且つ土地の領有増加し、將來世界の最大市場たる支那に於て充分なる利益を獲得し得べきことを其目的となしたるが如し。若し露國が不幸にして敗をとらば、獨乙の極東に於ける位置も極めて危險に陷るの恐あり。かるが故に彼は英國の小憤を買ふを意とせずして西藏に干渉し、一には己れの勢力が世界到る處に存することを知らしめ、一には以て極東に於ける日英同盟の妨害をなさんと試みつゝあるなり。露帝の西藏干渉豈に他意あらんや。

英國は日露孰れに左袒すべきか

「ガーヂアン」

極東に於ける今回の大戰鬪は當さに歐亞兩大陸の爭亂と見るべきものにして、今尚ほ其第一期即ち發端期にあるものといふて不可なかるべし。而して吾英國は日露孰れに左袒すべきか、露か、將た日か。吾人の之に與ふべき返答如何は實に世界にとつて最も重大なる事件なると仝時に、又我英國にとつても頗る重大なる事件なりといはざるべからず。故に此返答は決して輕忽に發することを得ざるなり。

我等は此問題に返答するに先ち、兩敵國が此戰局を開きたる眞の原因の何れにありやを知らざるべからず。かゝる國民的及び人種的の大爭亂に於ては其眞の原因深く伏在して容易に知るべからず、彼の直接に開戰を促がしたる外交的宣言の如き原因として何の効力なきものたること往々にして之れ有り。彼の我英國と南亞との戰爭の如き其宣言の全く眞の原因と相一致せざるものなること人のよく熟知する所なり、然れども深慮なき世人及び傍觀者は此無意味なる外交的宣言を過重視し、眞の開戰の理由此れに盡きたりとなすものあり、夫れ故に四十年前亞米利加の内亂の時の如き、思慮ある人と雖も南州の權利がリチモンドをしてワシントンに弓を引かしめしものなりと論じ、千八百七十年の普佛戰爭に於ては、佛の外交官の拙なりしが爲め、佛の味方たるべき人と雖も、西班牙の王位に關する爭亂なりと思ひて佛の敵となりたるなり。而して爾後數年の後吾等は始めて其見解の誤謬なりしことを認め、其眞の原因は深く他に存在せしことを知るに至る。

亞米利加の北州は最初之を拒みたるに拘らず實際奴隸解放のために戰爭を開きたるものにして、千八百七十年の爭亂は實は歐大陸に於けるゲルマン民族とラテン民族との爭鬪として見るべきものなりき。かゝる場合に於ては普通人民の本能性が却てよく其眞相を認知し、所謂政治家と稱するものは寧ろ條文等の外觀に迷はさるゝもの多きが如し。今之を日露戰爭に照して考ふるに此戰爭の眞の原因は決して、日本が朝鮮を支配すべきか又は露國が滿州の占有を繼續すべきかの簡單なる皮相なる問題にあらず、一層根本的にして深遠なる原因即ち歐洲に於ける基督敎的希臘の文明と、亞細亞に於ける非基督敎國的ツラニアン民族の文明との一大競爭なるを認めざるを得ず、若し此觀察にして誤らずんば、日露戰爭は實に世界の最大活劇の序幕にして此事件の進行は彼のゴッス及びヴアンダルの爲めに西羅馬帝國の陷落したるよりも重大に、彼のアラブ及びタークの下に東羅馬帝國の滅亡したるよりも緊要なる事項を生ずるに至るべきや必せり。

人或は此說を以て甚だしき空想に流れたるものとなさん、吾等英國人も亦政治を論ずるは科學を學ぶが如く全く空想を容るゝの餘地なきことを熟知するものなり。吾等は勿論事實に基きて立論し、事實に基きて推

ウイクブラッド誌所載



學生却て敎師となり
海軍の戰術を講述す

理せんことを期す。吾等は先づ事實を陳述せん、我等は先づ彼の最も曖昧なる權利なる語を放棄せん、露國が滿州を占有する權利、日本が朝鮮を管理する權利、是れ皆世人が口にする所にして而かも最も曖昧なるの議論なり、若し露骨に論ずれば日本は朝鮮を支配すべき權利なきこと、佛蘭西がモロッコに干涉する口實なきと同一なり。我等は決して佛蘭西に向て他國民の財產を與ふべき理由を有せず。之と同じく露國も亦滿州又は支那の領地を占有する權利を有せざるなり。彼は元と歐洲の命令を奉じて其の地を治むべく行けるものにして、彼が企つる如く永久其地を占有し、彼の主權を振はんことは其認許せられたる所にあらざるなり、而して日本が朝鮮を管理すべき權利に於ては毫も吾人の認むるを得ざる所なり。

而して我等の最も奇怪なりと思惟し、而かも世人の人氣に投じたる議論は、日本人を以て露國人よりも倫理的なる國民とすることなり、世の物質論者に向ては此說或は道理ある如く見ゆべし、現世の榮譽を求め、其利慾を專にせんとするは日本人の倫理なり、彼は何處までも異敎徒的なり、彼は全く敬虔の念を缺き、至上神を尊崇するの心あるなし、彼は罪を犯すとも罪と思はず、道を破るとも道を破れりと考へざるなり、か

るが故に彼は如何なる殺戮を行ふも却て之を快しとなし、毫も惻隱の心を起すことなし。人或は露國の如き專制君主の下には決して文明と平和となく、日本の如き立憲にして出版の自由なる國に於ては幸福と安心ありとなすものなれども、之れ亦極めて皮相の見なりといはざるべからず。日本は立憲國と雖もそは外觀的のものにして其内部は未だ眞の文明的狀態に入らず、其結婚、其家庭、其階級總て基督教徒の見て以て快からずとする所なり。而して其人民は剛愎にして虛榮心に富み、殘忍にして不潔に、我等基督教徒の見て以て甚だ厭ふ所なり、佛蘭人が管理し得ざりし臺灣を統治するが故に日本人を偉なりとするか。之れ日本人が愛好すべからずして極めて危險なる人民なることを示したるものにあらずや。我等は五十年前の事件を顧て露國人を嫌惡するの偏見を抛たざるべからず。又露人が印度を侵さゞるべきやと心配するが如きも全く杞憂なりといはざるべからず。若し英露の兩國が互に其精神を了解し、以て眞正なる同盟を形成せば世界の面目を一變せしめ、兩國の幸福は勿論、世界の利益を增進すること甚しく、世界に戰爭の起ることを全滅し能はざるも大いに減少せしむることを得べし、而して其第一着歩とし英露及び佛は亞細亞の天地を分有することを得べきなり。

かゝる同盟の成立は日本が主張する新帝國の建立に向て大打擊たるべきや論なし、日本が大野心を有し、之を主張し實行するは世界にとつて一大危險なりといはざるべからず、之れ勿論一種の想像に相違なきも、今日の想像は明日又は明後日に至つて實際となつてあらはるゝことあるを知らざるべからず。世界人口の三分の一を有する黃人種、而かも生命を輕視し、基督教徒の敢てせざる野蠻なる勇氣を有する黃人種が蜂起するの日は吾人にとつて一大危險なりといはざるべからず。露國が獨り此人種の蜂起を壓抑したるの功績を今日始めて認めたるは歐洲、少くとも我英國の甚だ遺憾とする所なり。我等は世界の大趨勢に着目し、ひとり現下の皮相的觀察をなすに止らず、露國と相依賴するの當然なるべきを思はずんばあらざるなり。

是れ素より大愚論なり、大愚論なりと雖も亦以て彼等の思想を窺ふに足らん。（記者しるす）

日本の連捷は醫療整備に負ふ所多し

「セント、ゼームス、ガゼット」

今日の如き進歩したる戰爭に於ては、科學の力を用ひ、又は藥劑、醫士の力によりて傷痍者を速かに恢復せしむること極めて必要なることゝなれり、之が爲めに嘗は無用者として見られたる負傷者が直ちに强健となつて再び戰場にあらはれ、以て味方の勢力をして減損せしめざるの利は今日の戰爭に於て最も著しき顯象なりとなす。

而して此看護醫術の進歩が甚しく戰捷に効果ありし事實と、此事の不備が大いに戰敗を招きたるの事實とは、今回の日露兩國の狀態に於て最もよくあらはれたりといふべし。何となれば古來何れの國と雖も日本の軍隊の如く科學的思想と衛生藥劑の知識に富める醫士に伴はれたるものなく、又露國の如く此點に於て不備なりし軍隊は稀に見る所の事實なればなり。我等は露軍に於て其負傷兵の最も悲慘なる有様を聞き、日本に於ては負傷兵が迅速にして心地よき程巧妙なる介抱を受くるの事實を知り、今回の勝敗の因つて來る所此醫術の如何に關すること頗る大なるを思はずんばあらず、實に日本の負傷兵にして本國に歸り、死亡したるも

のは僅かに其歸國せるものゝ百分の三を超えずといはるゝにあらずや、以て日本の醫療が如何に整備したるかを推測すべきなり。

日本は其衛生及び醫術に於て世界が未だ嘗てなさゞる所をなしたるものといふて可なり、彼はよく、恐るべきは敵の破壞力にあらずして内より發する疫病及び負傷兵の治療にあることを知り得たるものなり、かるが故に彼は開戰前已に醫士を遣して戰地の狀態を視察せしめ、其地の食物を精細に調査せしめたり、此等の醫士は其軍隊の到着前其地の食物、藥物、及び人民によりて賣らるべき植物等を調べ、又顯微鏡及び化學的藥劑の助を藉りて井水を檢査し、以て決して惡水、汚水を飲ましめざるの用意をなせり、又彼等は軍隊の要すべき被服及び家屋の用意をなし、且つ各營舍に至りて衛生學及び養生論の教を軍人に聞かせたり。此非常なる注意に基ける日本軍の清潔は如何ばかり軍人の生命を救ひたるべきや、或一人の醫士予に告げて曰く、

我等日本人は戰爭に出づるときに最良にして最清なる衣服を着、紳士の如く戰ひ、紳士の如く死す、故に我等は紳士の如き衣服を着するなりと。之を只實際上の問題として觀察するも、彈丸が兵士の躰中に命中したる時、新らしくして清き衣服は、舊くして汚き衣服よりも遙かに防腐に効あるは、人の皆知る所なり、日本人はよく此事理を應用し、且つ休戰の時に至れば河又は池に至りて身を清め、齒を洗ひ、衣服を濯ぎて來るべき戰爭の準備を整ふ。かゝる醫術の整備が如何に彼等の健康に益し、從て其連捷の原因となりたるかは、智者を俟て後知る所にあらざるなり。

而して之と全く正反對の狀態にあるは露國なり、露國人は汚くして且つ衛生上の原則をも全く不知なる上、露國政府がなしたる醫療の不備は實に言語同斷なり、露國人自身が書きたる記載を見れば、實に此點に於ける甚しき缺陷を認めざることを得ざるなり。

日本人が藥劑及び病院の準備を開戰前に送り、且つ軍隊過ぐる所の地に就て其食物家屋等を調べしに反し、彼等露國人は全く此醫療の準備をなさず、藥劑及び彈藥とを送るべき筈の列車が哈爾賓に着したるを見るに、全く數千の女と人夫とを以て充されたりといふを以て見ても如何に彼等が此點の注意を怠りしかを見るべきなり。

露國の醫士は語って曰く、若し傷口を繃帶するの準備さへあれば吾等は多くの人命を救助し得べかりしなりと。又他の醫士は曰く、負傷兵を治療せんとするも全く器械なく我等は露都より其到着するを待たざるべ

北米フイラデルフイア所載



ツアール陸兵を訓練して曰く
汝等が取るべき重要なる行動は退却なるぞ

からざりきと。かゝる狀態なれば負傷者は數日野に殘され負傷者自ら六十哩を徒歩して、其身の治療を計らざるべからずといふ、又他の醫士は遼陽に於ける病院の狀態を記して曰く、其空氣の惡しきこと甚しく、病室は非常なる惡臭を放ち、血又は汚衣の目に觸るゝ惡感いふべからずと。之を日本の病院及び治療と比するときは誠に天壤の差ありといふも過言にあらざるなり。日本の病院に於ては藥劑の配置宜しきを得負傷者は其衣服の上に色紙を貼し、之に病傷の輕重及び、其病傷の名稱を記し、速かに傷口を洗滌して、白き病服に改め、鄭重なる看護を受くることとなるなり。而してかゝる行屆きたる衞生と治療の効果は疫病の侵入を防ぎ、日本軍の疫病にかゝりしもの少き誠に驚くに堪へたり、米國が西班牙と戰を開きたる當時疫病にかゝれるものは百分の七十に上りたることありしに、日本が開戰後六ヶ月の計算によれば僅かに百分の一を超えずといふ、而して露國の傷病兵が死亡するの數は米國よりも上にあるべきを思へば兩國の差異實に輕視すべからざるものといはざるべからず。

この差異の兩國の勝敗に關すること素よりいふまでもなく、戰爭にして永續すればする程其結果益々顯著となるべし。何となれば長時日の間には日本の傷病者快癒して再び戰場にあらはるべきに反し、露國の傷病者は快癒せざるのみか、死亡するに至るべきもの續々として生ずべければなり。露國は如何に其兵數多しとするも其供給には自ら限あり、若し今日の儘にて負傷者の數多く、而かも之を治療するの法整はざれば、彼等が大いに困阨の地位に陷るべきは疑を容れざる所なり。要するに今回の日本の連捷は其醫術の整備に負ふ所多き極めて明白なる事實といはざるべからざるなり。

獨逸の小亞細亞に於ける經濟事業の進捗

「ノウオエ、ウレミヤ」

近來獨逸銀行が埃及に建設せらるゝ由の風說新聞紙上に散見したるに頃日に至り右の風說は無根なりと打消されたるが抑も獨逸銀行を亞細亞に創設するの議は同國半官報「ポスト」新聞紙上に於ても熱心なる贊同者を見出せり同新聞は頻りに大銀行事務を君士坦丁堡に開設し之と同時に小亞細亞の貿易繁盛なる市府に其支店を設くることの必要なるを皷吹せり。

抑も小亞細亞に於ける獨逸の商工業は近來大に進渉し現に布設中なる彼の「バグダッド」鐵道は獨逸人の拓殖事業に偉大の利便を啓發し同國人の土耳古領港灣間に於ける航運業は益々其盛大を致し同鐵道線路に於ける油礦開掘は愈々巨利を與へんとす元來小亞細亞は富源豐厚にして民物殷盛なる市邑少なからざれば今又銀行事業を擴張するに於ては獨逸の實業者をして陶朱猗頓の富を博せしむるは將さに遠きに非ざるべし。

一八九六年獨逸は業已にジエルサレムに銀行を開設したるが最初は甚微たる兩替店に過ぎざりしに僅々三年間にして發達の結果株式銀行に變ぜり該銀行は僅かに壹百万萬馬克の小資本を以て創立せられたるに業務年々逐ふて恢弘し今や陸續其支店を同地方の各市邑に設けられたり想ふに此等の金融機關は君士坦丁堡を始めとしパレスチーナ埃及等に於て漸やく其規模を擴張し以て小亞細亞方面に獨逸國の勢力を固定するは數年を出でざるべし獨逸人の拓殖事業に敏なるや此の如し吾人豈に驚かざるべけんや。

露人が日本人を評する負惜み

「リテラリー、ダイゼスト誌」

歐洲列國及び米國の人民は皆等しく日本人の勇敢壯烈なるを賞讚して措かずと最も露國人の日本人に對する見解は大に之と異なるものありとは露國ノヴオエ、ウレミヤの報ずる所なり。彼等露國人は曰く、若し賞讚すべきの美點あらば敵と雖も之を嘆美するは誠に公明なる行爲なりといふべし、日本人にして世界各國人がいふ如き勇敢壯烈を有せりとせば、吾等も亦之を認むるに於て決して否ならざるべきなり、露國人が日本人を賞讚せざるは偏見又は嫉妬の所爲にあらずして實に日本人を以て劣等にして不德に、毫も賞讚すべき價値なき人民なりと信ずればなりと。

「世人若し深く日本人を觀察せば露人が彼等を賞讚せざるの理を了するに難からざるべし。勿論何人と雖も露人を以て勇敢ならざる臆病者なりといふものはあらざるべし、露國の歴史を一讀せるものは必ず露國人の臆病者ならざるを見ん。然れども露人は未だ曾て悲慘にして激烈なる戰爭に出陣したることなきの事實は注目すべきの價値あり。即ち我等は未だ好んで戰爭を起したることなし、我等は國の爲めに生命を擲たんことを期す、されど戰爭は我等の好まざる所なり、我等は其血管の中に最高なる倫理的觀念を有し、之が爲めに屢々不利を受け、又不健全なる傾向に至ることあり、我等は餘りに人道を思ふが爲めに到底戰爭を樂しむこと能はず、我等は多くの戰爭をなし、又屢々勝利を得たり、されど未だ曾て最後の必要に迫らるゝまでは戰爭を開きたることなく、且つ戰爭を開きたる後も戰爭は平和を得るの手段たることを忘れたることなし。戰爭をなしたる後、次で來るべき平和の關係を攪亂するが如きは吾等の未だなせしことなき所たり。然るに吾等は此平和を愛好するの念慮を日本人中に見出すこと能はざるなり。冷淡にして苛酷、徹頭徹尾計算的にして、情誼を解せず、又戰爭を戰爭として愛する彼等日本人の氣質は露人の嘆美し能はざる所なり。



支那人〔お前さんが戰さに負けるかと思ひ心配だよ〕
日本人〔なぜ〕
支那人〔なぜつて、日本には騎兵がないからさ〕
日本人〔なーに大丈夫だよ、日本の兵隊はコサツクよりも足が早いんだもの〕

英國人は曰く、今回の戰爭は新進の文明國と、頑固なる老大國との間の紛亂なりと、而して淺薄なる見解を持するの徒概ね之に贊同しつゝあるもの〻如し、我等は今回の戰爭に於けるあらゆる謬見を許容するも、日本人を以て文明國の代表者となし、露人を以て其反對なりとするの意

見に仝ずること能はざるなり、日本人は恐らく熟練にして大膽に、且つ怜悧なるに相違なし、只彼等は戦爭を嫌惡せず、戦爭中の害惡をも意とすることなく、又戦爭の益々激甚ならんとするを耻づるなきなり。彼等は到底歐洲文明國の思想と一致すべからざる暗黒にして野蠻なる氣質を帶ぶ。若し歐洲が已に騎士制度を無用としたるの事情を考ふれば、露國が其天職を全うし、戦爭の惡むべきを知らざる東洋人を嘆美する能はざるを了解すべきなり。

又他の部分に於て仝紙は露人が日本人を輕蔑する他の理由を掲げたり。其意に曰く、日本人は大に成功し、且つ大に賞讃を博しつゝありと雖も彼等の爲す所一として欺瞞ならざるなし。大事に於ても小事に於ても彼等は常に欺瞞を用ひ、術數を行ひ、絶えて其赤心を吐露することなし。彼等は英米其他の强國の面前に物品を陳列し、以て彼等の賞嘆を博しつゝありと雖も、其中に入れば一切空虚なる有樣なり。彼等は公然日本が朝鮮の自治を認め、滿州の保管をなし、又日本が占領したる滿州の地は支那に還して管理せしむべしといふも是れ亦例の欺瞞なることといふまでもなかるべし。日本人が占領したるものは日本が自ら守護し管理することは毫も疑なし、若し支那にして此欺瞞を誠とせば他日必ず臍を嚙むの悔あらん也と。彼等の負惜の强きこと以て見るべきにあらずや。

旅順とセバストポールとの比較

「デーリー、グラフヰック」

セバストポールの包圍攻撃のありたるは今を去ること方さに五十年前なり。而して五十年後の今日に於て露國が再び類似したる包圍攻撃を受けつゝあるは一奇なりといふべし。セバストポールは旅順と仝じく重要なる海軍の根據地にして其港内には仝じく堅牢なる造船所を有したりき。港内には露國の軍艦横はれり、されど東郷司令長官がなしたる如く敵の軍艦を港内に封鎖することは仝盟軍にとつては全く必要なかりしなり、何となれば九月廿日アルマの戦爭の後、露國は多く其船艦を港内に沈沒せしめ、實際上出入すること能はざらしめたればなり。又セバストポールは全く包圍せられたるにあらずして、北の一面は尙交通することを得、爲めに糧食に缺亡するが如きことなかりしは旅順と異る所にして其他に於ては全く同一の情勢にありといふも不可なし。我等は一々玆に詳細を語るの餘裕なし、只此攻撃は十月十七日に始まり、翌年九月八日まで繼續せり。

露軍が退却するの時、自ら港内の軍艦を爆沈せしめ、同盟軍が市中に入りしときは黑海艦隊一も其形影を止めず、只檣及び斷片の水面に散在するを見るのみ。此攻圍の間市中に發砲せられたる彈丸の重量九千噸に上れりと傳へらる。

今予輩をして暫く此事實を以て旅順の狀態と比較せしめよ。旅順の城砦に於ける露人は初め三万五千人と稱せられたれば、今尙二万人以上の戦鬪員を保つべし、而して旅順の周圍に於ける日本軍の總數は八万人なり。之をセバストポールに比すれば人員に於ては到底仝日にして語るべからず、何となればセバストポールに於ては漸次其人員を増加し最後には非常なる大數に達したればなり、之を一週間にて交代したる人員に見るも英國は凡そ四万五千人、佛國は六万にして露國の死者は三万五千乃至五万の多きに達し、英國の戦爭に死せるもの三千五百、虎列剌又は其他の病氣にて死せるもの二千二百なり、而して佛國は凡そ六万三千人を失へり。又武器の進歩は全く戦爭の態度を一變せしめたり。日本軍は完

全なる醫療及び赤十字の制を整備して戰場に向ひたり、傷病者が充分なる保護を受くること、日本の軍隊の如き未だ嘗て世に見ざる所なり。然るにクリミヤの戰爭に於て其設備極めて不完にして之が爲めに非常なる不都合と、非常なる慘狀を呈したること擧げて數ふべからず。彼のナイチンゲールが病院の制を設けたる如き實に此戰爭の終りに起りたることなりとす。要するにセバストポールと旅順との比較は最も興味ある問題にして、啻に歷史家の研究すべきことのみならず、又軍事上の事實として大に參考すべき價値あるものとす。

露國の農民と戰爭

戰爭によつて初めて新農具を知る

「フイナンシアル、タイムス」

露國が今回の戰爭によつて損失を蒙れること數ふるに遑なく、殊に商工業の如き一大打擊を受けたるに拘らず、只一事彼の爲めに利益を齎らしたるものあり。そは即ち露國農民が初めて新農具を利用するに至りたること是れなり。露國の新聞雜誌に記する所を見るに、今回の戰爭起るや田舍の農夫にして軍役の使用として召集せられしもの極めて多く、彼等が其村落を出でゝ初めて新農具の便利なるを見、續々として之を注文し、彼等の多數集りたる所に於ては全く新農具の實切れをなしたる位なり。從來彼等の使用したるものは極めて舊式のものにして、其不便不利なることは勿論なりしが、今回初めて知れる新農具を以て耕作するに至らば、其收穫も大いに增加すべく露國の農產物には少からざる影響を及ぼすべきこと疑なかるべし。是れ强て不幸中の一幸なりともいふべきか。

ヅルケル所載



髑髏の對話

露〔予はツアールの名譽の爲に死せり〕

日〔而して予はミカドの名譽の爲に〕

鷄卵と毒

「リテラリー、ダイゼスト誌」

破壞せざる鷄卵にても、必ずしも毒ある物質入り込まずとは斷言し難し。或佛國の經驗者は液體の毒物は殼の穴を通して鷄卵の中に入ることあるを證明したり。コスモス誌に曰く、

衞生家にして食物に注意し、科學的有害物の身體を毒せんことを恐るゝ人物は常に鷄卵を食し、以て其危險より免るゝことを得べしとするものゝ如し。されど此安心は最早や彼等より取り去られざるべからず。日常食物の事に當りて、料理の事を司るものは鷄卵の殼は思ひの外、穴の多きものなることを知るなるべし、

卵少しく古くなれば其中の成分次第に減じて其代りに空氣が中に入り込むを通例とす。これ其殼に穴あるによりてなり。又藁の中に久しく蓄へたる卵の藁の臭氣を有し、格羅實翁（コロデオン）と共に卵を包み置く人は、殼を通して入りたる格羅實翁と交りて一種の卵燒（オムレツ）と化したる事實を發見すべし、是れ亦卵殼に穴あるを以てなり、而してかゝることは化學者の實驗すべきことにして、近來カムス氏がなしたる結果を簡畧に述ぶれば左の如し。

第一卵は之を煮れば其溫度によつて重量を變化す。湯より取り上れば卵中の水蒸氣悉く蒸發したるによつて其重量を減ず、而して之を水中に入るれば水氣を吸收することによりて其重量加はる。而して生卵にては水に入るゝも水氣を吸ふこと極めて少し。之れ生卵にては煮たる卵ほど卵殼の穴大ならざるを以てなり。若し煮たる卵に於て斯の如く水氣を吸收するものとすれば、水に溶解したる有害物又は黴菌の如きも其殼隙より入ることあるべきは自然の理なり。故に料理の際煮卵を冷却せんとして汚水に入るゝが如きは最も謹まざるべからざる所なり。

本誌は武士道に關する諸大家の高見を叩き聊か思想界に貢獻するところあらんことを期す

△時局より見たる武士道　井上哲次郎氏
△武士道と今後の敎育　戸水寛人氏
△武士道に就いて　渡邊子爵
△武士道の懷古　根本通明氏
△武士道は基督敎に酷似す　本多庸一氏
△武士道と人格の觀念　綱島梁川氏

以上は既に掲載せり、江湖の一讀を乞ふ



明治闇黑史（一名舊人物）

有磯逸郎

此頃言論社會の一部に、花を咲かせてゐる社會主義一味の連中は、歐洲の社會黨が、甞て經驗し、今又現に經驗してゐると同じ經路を履み、妙に政府當局者に睨まれて、其の團體は、解散の嚴命を受け、機關紙は、朝憲紊亂の廉を以て、發行禁止の命を受けてゐる、我れ等は政府者の所爲が良いか、渠等社會主義者の行爲が惡いか、爰に其樣な事を論じてゐる暇が無い、唯、我國の社會主義者も、そろ〳〵歐羅巴の社會黨と同じ徑路を履みつゝあるのを、局外より見て、一種の興味を感ずる。

今、自分は爰に明治十一年より明治二十二三年に亘る十年間の政治的變遷と言つた丈けでは面白くない、此の十年間、政治社會の最底に流れたる暗潮、然かも餘り世人の知らざる事實を擧げて、明治年代の政治史に意を置ける讀者の參考に供へやうと考へる、之は社會主義者の近狀より思ひ立つたのでもなく、福田英子君の

何んとかの半生涯といふ著書が出たのを機會としたのでもなく、我國政治史の側面觀察の必要上、數年前より、明治陰謀史の編纂に心掛けてゐた結果を披露する迄で有る、讀者よ、日本今日の政治的進歩は、一直線に進んだものではない、斯く場所が雜誌であるから、今は單に其の舞臺に活動した人物――其人物の訪問記事を揭ぐるに止めて、系統を立てた詳細の記事は異日に讓る。

本文に入る前に、對話者の人物を披露して置く、其の姓名は暫らく預つて置くが、人物を言へば、二十幾年前は、政治難難の花役者で、板垣氏の岐阜遭難の騷擾の際は、此の對話者は、今の大石正巳氏と、自由黨の本部に事務を取つてゐて、遭難の電報迄イの第一番に受取つた老壯士、若し順序を以て進めば、今日は相當の位置に在るべき筈の人物で有る、が、餘りに人物が正直で、一本調子で、其の僻功名に急に陰謀が好物といふ所より、某犯罪事件に加はり、其の蹉跌が原因と爲つて、他の國事犯罪者のやうに、第一期の國會開設にも、情が拗らず、今は深く／＼社會の最底に陷り、闇黒に葬られて、妻とも別居し、小供とも離れて、獨り場末の裏長屋に、二階を假りて、孤影、悄然と、其の日／＼を暮らしてゐる、其の職業は何？と問ふ丈け野暮であらう、世の中には此の冬の寒天に、單衣二枚を重ね、上に薄い羽織を着流して、何んだか忙しいやうな、忙しくないやうな風に、日々外出する、爲體の知れぬ階級あるを知る者は、恐くは此の人物――時勢の潮流に逆つた此人物が、今日如何なる生活に在るやを想像するに、難くは有るまい。辭はる迄もなく、今日の日本は、假に位置を高めて、國家としては一等國の班に入つてゐる、が、社會の半面には、時勢の進運とうらはらの、一條の暗潮が、澎湃として流れてゐる、此の對話者の如きは、その潮流を人格にしたもので、能く此の人物に依りて、這の般の消息を説明し得らるゝやうに思はれる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

○明治年間の秘密結社

『ヤ、之は珍客ぢや、能く我輩の此處に居るとが判つたもんだ、フム其樣か、彼の男から聞いた、成程、判つた筈ぢや、明治の陰謀史を調べてゐる？、不相變暢氣な事を言つてゐる、我輩の如きは、傲骨依然たりぢやが、『貧乏』といふ奴には、どうも敵はない、薩長政府を敵にしたよりも骨が折れる、ハヽ、ハヽ、と洒然たる態度で記者を迎へた某氏は、記者の携へた正宗の四合壜二本を机の上に置き、之を眺めながら、二三閑話の後、その熟知せる陰謀事件を語る。

『單に我輩知つてゐる丈けでも、秘密運動の數が隨分と多い、今の青年輩には、其の名をだも知られてをらぬぢやらうが、明治十年頃に千屋歸一、宮崎岬といふ有志がゐた、此の兩人が、相謀らつて政府顛覆の陰謀を企てたともあつた、陸奥宗光氏も、林有造氏と結んで、同じく大陰謀を企てたともあつた、河野廣中氏

の福嶋事件、名古屋鎭臺奪略事件、飯田事件、加波山事件、靜岡事件の如きも、明治の歴史には、僅に二三行で、サラ〳〵さつと書き流さるゝてあらうが、其の間に一條の連絡が有つて、世間に知られてゐるやうな淺薄な、單純なものではなかつたのぢや、續いて後藤象次郎氏が、福澤諭吉氏と結び、佛蘭西公使と謀つて、內國の刷新を圖ると共に、朝鮮の革命を企てたともあつた、之は恐らく世間て知つてゐる者は、澤山は有るまい、此の時、佛國公使と後藤氏等との中間に立つて、通辯の役を勤めたのは、大阪事件の小林樟雄さ、之は進行の途中に、政府の知る所と爲り、折角の大計畫も、烟のやうに消えたのは殘念千萬、その餘沫を受けたのは、大井憲太郎氏等の大阪事件てあるが、世間では馬鹿に大評判と爲り、お蔭て大井憲太郎氏等は、一時世間では大豪傑のやうに持て囃されたのは渠等の僥倖、其の實は一時のお祭騷のやうなもの、餘り大した準備も用意もなかつたらしい、最も其の運動には、歐羅巴の陰謀事件を型に取つたやうに、景山英といふ美人もゐた、笑つちや可かん、兎に角婦人も加入つてゐた、爆裂彈製造の爲に、同志の二三人は、身を職工に投じ、幾多の艱難を經た歴史も有る、危道を履んで、同志の或者は埼玉縣や滋賀縣で、强盜に這入つたとも有る。

『强盜といへば、可笑しなことが有る、之は我輩が又聞の又聞て、或は聞き過つてゐるかも知らぬが、加盟者の一人が、友人に咄したといふ事實に依ると、何んでも埼玉縣で、今は衆議院議員に爲つてゐる某氏の家を見込み、一夜各々覆面して、闖入したといふ事ぢや、すると今は國會議員で御座い、と時めいてゐる此の政治家殿、議會て縱橫の辯を奮ふ今日にも似ず、顏眞青に、生命丈けは、と平蜘蛛のやうにへたばつたさうな、其の後此の政論家の顏を見る毎に、其の演說を聞く毎に、彼樣なえらさうな事を言つてゐる、「國家の運命は繫りて己の辯論の上に在り」といつたやうな利いた風な事をいつてゐるが、强盜の前では平蜘蛛のやうに爲つた、と思へば、可笑しい、と笑つてゐたさうぢやが、我輩も其の後此の政論家の顏を見ると、矢張其樣なやうな事を思ふ、己は今日斯んな境涯に陷つても昔取つた杵ぢや、彼の男のやうに生氣地のない眞似は仕ないぞ、と何んだか氣が悠揚としてくる、痩我慢ぢや無い、實際其樣思つてゐる……』

『話說は餘談に渡つたが、尙右に擧げた外に、馬場、大石氏等の爆裂藥事件あり、餘り世間に知られてはゐ

は、ゝ速見市次郎、大伴直念氏の大變則事件――軍資金必要の爲に、贋札製造を企てたともあり、ホヽ速見市次郎、と言ふと、一寸面白い人物ぢやつた、當時早くも社會黨の成立を希望し、スペンサーの社會平權論を理想とし、魯國虛無黨の運動を標準として、貧富平均論を主張し、其の筆法から、社會黨の組織を希望してゐたのぢや、一體當時の有志者氣質は、今日から見ると、迂然と單純で、高尚であつた、最も單純であるから高尚であつたのかも知らぬが、今日の有志輩の樣に、阿堵物に一切眼をくれなかつた、爾うして當時松嶋剛氏の飜譯した社會平權論は、非常に行はれたもので、彼のルーソーの民約論と、此のスペンサーの平權論とは、當時有志者の信賴した唯一の經典で有つた、左樣だ、今君の言つた社會主義者が、金科玉條としてゐるといふカールマークスの資本論、といつた樣な鹽梅式、併し何んぢや、我輩が今ま君の言葉で初めて知つたので、カールマークスといふ男は、那處の國の者だか其れさへ知らぬのぢやが、今の若造――社會主義者のやうな輕躁ではなく、飜譯ではあつたが、當時の有志と言へば、何れも皆んな此の社會平權論と民約論とを熟讀してゐたのを少しく感心して呉れ玉へ、我黨の如きも、最初の第一員は、今でもちやんと暗らんじてゐる、當時の有志者氣質は斯うであつたから、速見市次郎といふ男も、其の精神は見上げたもので、心から貧富の平均すべきを信じ、薩長政府を顛覆すると同時に、其の社會說を實行すべしと覺悟してゐた、此の速見は、之も社會黨の必要を稱道してゐた大伴直念と謀つて、贋札の製造を思ひ立ち、一擧して天下を簒はんとしたのぢや、今から思ふと、疎大な考ではあるが、當人共は一生懸命で有つた、のを見て遣らぬと可愛さうぢや、大伴直念といふ人物も、當時は有志の中で、理窟の判つた俊才で有つたが、今は如何してゐるぢやらうか知ら」

「速見大伴等の變則事件と前後して、株券模造を企てた山岡重倚等の變則手段もあつた、吉松壽太郎、佐野義一氏等の大臣要擊の陰謀も有つた、大臣要擊といへば、其の當時其れは非常な恐ろしき陰謀が企てられた事が有る、日比谷練兵場に爆裂藥を埋伏した一條で、年月は判然と記臆してをらぬが、何んでも天長節の前日の事ぢや、練兵場の周圍に爆裂藥を伏せ措き、參議の手合が練兵式に列なるのを見て、粉灰微塵に皆殺しにせんと企てたのぢや、處が其の前夜俄に此の大冒險

を中止せねばならぬ事情に立ち至つた、といふのは斯うぢや、御風邪の爲に御出ましに爲るまいと期してゐた　至尊は、矢張例年の如く觀兵式に御出ましに爲る、と判つたのぢや、參議連の要撃は、主義の實行であるが、　至尊の玉體に萬一の事あつては、と俄に骨折りに骨折つて埋めた爆裂藥を夜陰に乘じて、再び窃と堀り上げたとも有つたのぢや、若し此の計畫が實行されてゐたら、如何ぢやらう、悚然として、今に肉心を寒うする」

「右に擧げた外に、まだ陰謀事件が有つたぢやらうが、一寸爰に思ひ出ぬ、兎に角く政府の壓迫やら、政黨維持の軍用金の缺乏やら、民間有志の惰氣の發生やら、何やら、かやらで、自由黨も、改進黨も、表面の運動は中止して以來といふものは、此處にも、彼處に

事件――歐羅巴の言葉で言ふと秘密結社、此の
が發生した、其の棹尾の運動、と言へば、彼
八郎氏が、大同團結の法螺の貝を吹き、民間
いて、人心に興奮を與へた前後の計畫で有
が、秘密出版事件で、入牢したのなぞは、
、著しい事實とも見えぬが、其の裏面
一種の計畫が有つた、と我輩は後に爲

つて聞いた、三大事件の建白運動も、新聞紙上では、ガヤ〳〵と地方の有志者が、元老院の門前を騷がしたお祭騷のやうにしか見えぬが、彼にも其の内部には、色々と秘密計畫が有つたらしい、何んでも西南戰爭後、武張つた政府の對抗は、一轉して政黨運動と爲り、その餘勢は、幾多の秘密運動を胎み出したので、斯くの如きを約十年間、保安條例といふ薩長氏の大奮發で、首尾よく政府對抗の氣勢を挫いたのは薩長氏の大手柄、息もつかせず大隈後藤の兩人を政府に入れ、憲法を發布して、チヨン〳〵と幕を切つたのは、見上げた腕前ぢや、と今に爲つて、我輩等は伊藤博文氏の腕前に感服してゐる、何んぢや、今少しく早く感服してゐたら良かつたらう?、と其樣であつたかも知れない、アハ〳〵」

「冗談は別として、殆ど六十歲に近い今日に爲つて考へて見ると、餘り世の中を眞正面に考へるのが、如何もわろい、我輩等と一所に働いてゐた連中で、當時賴母しがられてゐた、正直な方の人間は、今皆んな困つてゐるではないが、横着て、世と推し移つて、利巧に遣つた奴は、其の位置に各々相違はあるが、先づ相當に遣つてゐる、特に今日知事などに爲つてゐる手合

は、一々名は言はぬが、今に爲つて考へると、彼は利巧であつたのかも知れぬ、否、愚痴は廢める、之から此の酒でも煖めて、明治前半の最底に流れた社會裡面の狀態でも語ると仕やう、左樣ぢや、色々と面白い消息があるぞ……」

虛字の妙用

岩溪裳川

詩も亦文學の一なり、讀豈容易ならん、而して詩中の眞理眞趣眞情眞味の、悟るべく、解すべく、又融會すべく、咀嚼すべきは、本より一二の種別にあらずして、百態萬變窮極する所なし、若し之を細論せん歟、唐宋以來汗牛充棟啻ならさるの詩話詩論ありと雖も、猶其理其趣其情其味の盡く言ひ得て、復餘蘊なしと云はんや、復遺憾なしと云はんや、蓋し其理の悟る所、其趣の解する所、其情其味の融會咀嚼する所、古今の人之を包括して、之を極論するは、爲し能はざる所ならん、况して予の如き寡陋の聞見に於て乎、能く之を論じ得ん、故に之を大方の君子に讓り、單に虛字の妙用を述べ、初學者の作詩上の工夫に資せんと欲す、而して其詩は專ら七言絕句を主とし、之を周弼の三體詩中に求むるものは、其書は坊間にて之を獲ると易く、且つ耳濡目染の詩多かるべきを以て、之を吟し之を誦し、知らす識らす、作詩上其理趣情味を得て、契心應手の域に達する一捷徑とせん。

抑虛字は、其用一ならざるも、主として運意を活動して、含蓄不盡の思を承接轉換の間に加へ、以て音調の穩順を諧り、聲律の一助とするは、殆ど同條共貫に歸す、故に斡旋の妙不妙は、其詩の巧拙を斷定すべく、又其人の敏鈍を認識すべし、夫れ虛字の用は、然く大なりと雖も、火の物に附て見はるゝ如く、其至る所燎原の勢あるも、皆一篇の理趣情味を本として、其妙用を見るべく、又其の効果を收むべきなり、予頃日男女兩伎の劍舞を演するを觀るに、其姿勢の軒擧、其意氣の激厲なる、其吟聲の淸越悲凉なる、大に人意に投するものあるも、其詩の多くは詩として之を聞くの價あるもなし、然れとも其風の及ふ所、短衫高屐の書生、醉て吟し醒めて唱ふる所、節奏一に劍舞者流の口にする所に外ならず、故に此撰も亦諷誦に便にして彈絲吹竹の外、其韻の冷冷として餘りあるものを取るも、聊か微意のある所なり。

別ニ李浦之ク京　　王昌齡

故園今在ニ灞陵西一。江畔逢レ君醉不レ迷。小弟鄰莊尙漁獵。一封書寄數行啼。

是れは詩天子の名ある、王昌齡の詩にして、七言絕句は太白(李白)少伯(王昌齡)を以て擅場の主とするは、千秋の定論にして、所謂淸廟の朱絃、一唱三嘆すべきものあり、誠に李か詞の自然にして閑雅飄逸なる、王の詞の自在にして深厚和婉なる、餘子の及ばざる所なり、前人は王維の俊雅、岑參の濃麗、高適の雄渾を以て、相近しと云ふの說を爲すのみ、此二十八字中今在尙漁獵の三虛字は、如何に詩意を暢達し、又如何に音調に抑揚を與へたる歟、且其情を盡くす事の如何に委曲なる歟を見るべし、今在の二字は、蓋し神來氣來情來の中に得るものなれど、讀者は却て措

字の奇を疑ふものあらん、昌齡は江陵の人にして、江陵は灞陵の西に在るは、今と昔と變らざるべく、假令は靜陵は函嶺の西に在りと云ふに異らず、灞陵の西なる江陵は、東へも南へも北へも移動せざるに、殊更に今在と措きたるは、故なきにあらず、世上には陵谷の變もあれば、江陵も何つ其變に遇はぬとも云へず、然し今も無恙灞陵の西に在ると云ふは、思潮の情の隱然とし見え、又々右の字か、一種の理想を影寫したるを見るべし、即ち其思師の情は骨肉を分ちたる、小弟の上に推列して、李湘の京に之くに遇ひ、湘は昌齡か莫識の士なれば、醉中なからも見逆へず、我故園に住する小弟は士君子の業を修めず、尙鄰莊に漁獵杯して、小人の事を樂しむならん、故に其放縱を戒めて、更に致る所あらんため、李湘に托して傳逹を乞ふ所の一封書には、此兄か數行の啼を寄すると云ふ、啼は涙なり、其弟を愛するの情深くして、其言の婉なるは、一讀するもの、思ひ半に過ぎん、一封書寄數行啼は句法の最も佳なる所、杜甫の詩に此行何日到。送汝萬行啼。白居易の詩に今日因君訪兄弟。數行鄉涙一封書。其意相似たるも。因君何日二虛字は、今在尙の意餘りありて、情の盡きざるに及ばざる如し。

贈殷亮　　　　戴　叔　倫

日日河邊見二水流一。傷レ春未レ已復悲レ秋。山中舊宅無二人住一。來二往風塵一共白頭。

逝く者斯の如し晝夜を舍てず、日日河邊に水流を見る、其感如何、叔倫か別詩に沅湘日夜東流去。不爲愁人住少時。と云ふ如く、光陰も荏苒として。過ぎ行くは、水の一たび逝て復回らざるに同じ、されば春を落花芳草の時に傷みて、未だ已ざるに、草木搖落して秋を悲むの候となりぬ、蓋し殷亮も我も同く宮に在りて、功名の志を遂げず、然れば官を罷めて故山に歸臥せん歟、其舊居も荒廢して人の住するなく、又丹砂の心を空くし、出處共に心志に違ひて、依然風塵の間に來往し、共に白頭となりしと云ふの意なり、詩にも種々の格體ありて、此詩は正しく贈答の一體なれど、詩中專ら自己の身況を述へて、一語の殷亮に及ふなく、唯第四句に共の一虛字を着け、殷亮に推到して、其體を成したるは、正しく創格に屬し、虛字の妙用も、是に於て能事畢る、註家あり云ふ東坡泛潁の詩に、我性喜臨水。得潁心甚奇。到官十日來。九日河之湄。知る者は其哀怨を得るも、知らさる者は豁逹と爲す、此詩も亦此口ありと云ふ、坡仙か泛潁の詩は、情文相生して、語に一種の禪機あるもの、哀怨とか豁逹とかの意あるにあらず、叔倫の此詩と殆と其品種を殊にするもの、註家の作意を誤る此の如き、唯一笑に付すべきなり。

和孫明府懷舊山　　　　雍　陶

五柳先生本在レ山。偶然爲レ客落二人間一。秋來見レ月多二歸思一。自起開レ籠放二白鷴一。

縣令に贈るに、彭澤の陶令を用ゆることは、慣熟の典故なるも、淵明の歸去來を賦して、柴桑里に歸臥したる高風は、後人の欽仰する所なれば、決して習見を憚らず、淵明か五柳先生の傳か作りて、自述したるあり、孫明府の官跡人品も相似たるに依り、直に五柳先生と云ふ、偖て五柳先生なるものは、木と山にあるべきものなるに、偶然にも客となりて、人間に落ちたり、偶然爲客の語已に奇なるに、又落人間と云ふは、更に妙なり、秋は人の感を增し又悲を生するものなるに、月も亦同し思を爲すは、詩に明月高秋迥。愁人獨夜看ると云ひ。國風に月見れは、千々に物こそ。哀しけれ。我身ひとつの。秋にはあられど。と歌ひしも、能く月を詠したるなり、孫明府も秋來月を見て、故山に歸らんと欲するの情、

禁ずる能はざるも、我身は官に羈たされて、山林の志を遂ぐるを得ず、其情を飼置きたる白鷴の上に及ぼし、久しく籠裡にありても浮過の舊巣を戀ふの心は、已れが故山を思ふの情にも同じからんと、其籠を開きて之を放ちしと云ふ、白鷴は羽族中、神貌淸閑にして、衆禽に雜らず、栖止遐深にして、人境に接せすと云ふを以て、山に在るべき五柳先生に相似たるの品性もあらん、蕭穎士は白鷴を賦し物に因て己れを感じ、此詩は己れを推して物に及したる、其趣を異にするも、其情は同じ、其用意の斬新なると、措語の奇逸なるは、一に虛字の妙用に因て、發揮せらる、雅陶は晩唐の作者なれど、詩は決して大歷七子の下に在らざるべし。

長信秋詞　　王昌齡

奉ㇾ帚平昭金殿開。且將ニ團扇一共徘徊。玉顏不ㇾ及寒鴉色。猶帶ニ昭陽日影一來。

長信宮秋詞とは、可樂府題にして、漢の班倢伃が、成帝に寵幸せられしを、趙飛燕の爲めに、其寵を奪はれしのみならず、飛燕が後宮呪詛の譖言に、許皇后は坐廢せられ、其身も連坐の罪を以て、拷問に遇ひ、幸に其寃を雪ぎたるも、久しき中には、其身の危からんを知り、太后（成帝の母）を長信宮中に共奉せんことを求め、之を許され宮中に在りて、愁むべき秋に、倢伃が意中に怨する所を述べしなり。

奉帚平明とは、身の賤職を奉し、平明に洒掃して、金殿を開くと云ふ、是れは倢伃が自悼の賦に、奉共養於東宮兮。託長信之末流。共洒掃於帷幄兮。永終死兮爲期。との意を申言す。且將團扇共徘徊と云ふも、亦倢伃が秋扇の賦、常恐秋節至。凉颷奪炎熱。棄捐篋笥中。恩情中道絕。と物を賦し己を寓て哀れ今は棄捐せらるゝ其身も、一時の恩寵は忘るべくもあらねば、昔の懷しきに、團扇を持ち此所彼所と徘徊す、其意中には君王の太后を省覲するの次て、或は一顧の榮をも得べき歟と、窺覦低徊するの狀、描き出して神ある如し、然ども其寵幸の望むべからざれば、彷に嘆して思ふ樣、妾が玉の如き顏も、終に色黑々たる寒鴉にも及ばざるにや、彼の寒鴉は今も猶、君王の常に在ます、昭陽殿上の日影を帶びて飛來ると云ふ、且將共猶の虛字、一一斡旋の妙を得て、其詞を助け、怨んで怒らず、麗にして淫ならず、情を言ふて極に造り、婉にして章を成す所、實に國風の遺響ありと云ふべし、是れ一の樂府題なれど、經へて六朝の習氣を帶びず、新意新調は李青蓮が橫江詞少年行の古調なるものに、比すれば自ら異彩を生ぜり、蓋し絕句としての神味は、此に在るべき歟、因に之を昔し明の李滄溟は、唐代の絕句を撰み、王翰が葡萄美酒夜光杯。欲飮琵琶馬上催。醉臥沙場君莫笑。古來征戰幾人回。李白が朝辭白帝彩雲間。千里江陵一日還。兩岸猿聲啼不住。輕舟已過萬重山。王昌齡が秦時明月漢時關。萬里長征人未還。但使龍城飛將在。不敎胡馬度陰山。王之渙か黃河遠上白雲間。一片孤城萬仞山。羌笛何須怨楊柳。春光不度玉門關。の四首を絕唱とせり、其後淸の王漁洋は少しく其見る所を異にし、李白の下江陵前詩王之渙の凉州詞前詩と王昌齡の長信秋詞（即ち本篇）王維の送元二使安西。渭城朝雨浥輕塵。客舍青青柳色新。勸君更盡一杯酒。西出陽關無故人。を以て之れに當つ、されば此詩は既に角に、有唐三百年に於て、絕句の第一に撰まれしもの、其妙は強て贅するに及ばず、又此數絕の如き、一たび之を誦すれば、亦李笛の耳を悅ばすと、同一ならざるを悟るべき歟。

江南意　　于鵠

閑向ニ江邊一採ニ白蘋一。還隨ニ女伴一賽ニ江神一。衆中不ニ敢分明語一。暗擲ニ金錢一卜ニ遠人一。

此詩は本集には、閨怨の題にて、載せあるも、音調の合拍して、節奏に妙なるを以て、江南意の曲名を付して歌ひたるなり、此の類は三體詩中にも、往々例ありて、杜牧の江南道中春望、千里鶯啼綠映紅。水村山郭酒旗風。南朝四百八十寺。多少樓臺烟雨中。を江南春の曲とし管絃に上せし如し、詩意は空閨を守る思婦の情を寫し出したるにて、註家は之を鵠の夫婦の事に解するも、必しも拘はるに及はず。

先づ第一句の閑字は、無意に讀過すれば知らず、仔細に看來ると、無限の意を此一虚字に含みあるを知るべし、閑は等閑の義にして、閨婦が夫を思ふの悶意は遣るべきなくも、無駄ながらも、責めて離情を散せんと、江邊に向て白蘋を採り、還た女伴と共に江神に賽するなり、蘋花は清らかなる水草にて、之を採て神に獻するは、聊か敬神の意を致す所以にして、又詩の召南采蘋の意を含む、采蘋の詩は、周の國民が文王の化を被り、夫妻能く祭祀を奉し、家人の其事を美として詠したるものにて、今閨婦は夫妻隔斷し、共に其情を同ふせざるも、空しく白蘋を採るとの意中にある怨意自ら見ゆ、然ども夫を思ふの意は、衷中にては分明に之を語らず、暗に金錢を神前に供して、遠人の安否及其歸期の遠近をトするなり、其思婦の情を寫し、委婉の妙も、亦數虚字に依て、暢達を得しなり。

閨情　　孟遲

山上有レ山歸不レ得。湘江暮雨鷓鴣飛。蘼蕪亦是王孫草。莫下送二春香一入中客衣上。

才子傳に孟遲詩名あり、尤絶句に工なり、風流嫵媚、皆宮商金石の聲ありと、誠に此詩の如き、詩名の空しからざるを知る、此題は閑情又は閨詩と同く、江南意の題となすものもあり、是れも閨婦の夫を思ふの情を述べ、詞意の幽婉なる中に、思婦の怨意を見るは、絶妙の才と云ふべき歟。

山上有山とは、古樂府に、藁砧何處去。山上更安山。云々の句ありて、出の字の謎語なり、即ち婦の夫の一度家を出て、歸り得ず、湘江の暮雨に鷓鴣の飛ぶ時、其邊に旅して在らん、湘江は舜の二妃が其南巡の後を追ひ、此地にて蒼梧の崩を聞きて、其身を沈めたる折、夫婦には淺からぬ關係のありて、愁を生ずる處、一日の中最も悲を添へ哀を催すは暮にして、殊に雨をも添へては、一段に愁を生ずる時、鷓鴣は行不得哥哥と啼くと云へは、旅人の之を聞ては、其意如何ん、是れ愁を生ずる物なり、婦は家にありて外を思ひ夫は旅に在て内を思ひ、湘江の暮雨に鷓鴣を聞ては、夫も亦行不得してあらん、蘼蕪は當歸の草、王孫は不歸の草にして、其當歸なる蘼蕪の、不歸なる王孫となりては、遂に歸へるべき事なからん、左なくば疾くにも歸るべきに、今猶歸らざるは、恐らく蕪の王孫草となりて、春香を客衣に吹き送くりたるにやあらん、若し然りしなれは、再び相逢ふ事も難からん歟と、心に問ひ心に答へ、疑ひ惑ふの狀は、能くも思婦の意中を寫して、此に至りしものかな、莫の字、多く禁止の語と做して讀むも、禁止の語とすれば、詩味索然蠟を嚼る如し、唯池五山翁は、之を反語として解したるは、能く作者の本意を知るものなり。

山路見花　　崔魯

曉紅輕拆露香新。獨立二空山一冷二笑春一。春意自知無二主惜一。恣レ風吹逐馬蹄塵。

詩に落想の絶奇なるもの、措詞の絶妙もの、三體詩中にても、錢起の歸雁。瀟湘何事等閑囘。水碧沙明兩岸苔。二十五絃彈夜月。不堪清怨却飛來。

と云ふ如きは、流石に大匠の巨匠の手に出て、絕奇絕妙と云ふべく、廣明の詩は敢て仲文の絕奇絕妙には及ばざれど、用意の相似たるは、作法の略同しきありて、更に一段の巧意を弄し、晚唐の風格を備へ、自から一種の情味あるを知らん、第一の七字は、山花の露も香ふばかりに開き、第二の一句は、花の空山に咲き、唯一人之を賞するものもなければ、春の無情なるを冷笑すると、春はまた花も人の之を賞し、之を觀るを得べき地にあればこそ、人も花の落ちて土となるをも惜しむべけれ、斯る空山に在りては、花の開きたりとて愛するものもなければ、又落しとて惜しむものもなし、さなくば春も幾らか愛惜する人に對しても、遠慮もあるけれど、主の愛惜する無き所の花なれば、春は無頓着に、思が儘風を吹かしめ、花を落して馬蹄の塵を逐はしむるなり、恣風吹逐馬蹄塵とは、句法の奇拗なる如く見え、恣の字は一字句なりとの說もあれど、予は風吹恣逐馬蹄風の誤りにて、其誤りは傳寫に因るものならんと思ふ。

寄㆓山僧㆒　　張　　喬

大道本來無㆑所㆑染。白雲那得㆑有㆓心期㆒。遠公獨刻㆓蓮花漏㆒、猶向㆓山中㆒禮㆓六時㆒。

佛家の大道は本來染むる所なきものにて、安養蓮臺に在るも、酒肆淫房に在るも、其染むるなきの心は、看て淨となさず、又看て汚となさず、彼の白雲の出沒するも、之と染むる所なければ、別に心期のあるべきあらんや、然るに遠公の如き高僧も、大道を知らず、獨り蓮花漏を刻して、晝夜六時行道の節となす如きは、頗る染むる所あり、淨土を修むる遠公にして、何の心期ありて斯の如くなる歟、此山僧は敎外別傳、白雲の心期なきに似て、佛家の大道を得たるものと、山僧の今を褒め、惠遠の昔しを貶したるなり、一說には殆ど反對の解釋あり、此山僧も遠公の風を學び山中に六時を證するとし、遠公の如き高僧の唯獨りありて、持法の謹嚴なる、蓮花漏を刻し修行の節を期したるを以て、山僧の之を追ひて、猶山中に己れが業を修め佛に仕ふるとの意なり、此說も解すべからざるにはあらざるも、第一第二の句より、考ふれば正しく、前解を以て正を得るとせん、何故なれば、蓮漏を刻して六時を禮するとは、修行の上は暫く措き、頗る拘はる所あるは染む所なしと云ふ大道に對して、未た看破し得ざる所あらん、惠遠若しあれば、此の言に對し、什麽の答を爲すや、近時印度哲學杯、大に流行すれば、個中の眞理を解するものあらん、一虛字も斯く解釋を異にしたる結果は、反對の意を表出するに至る、虛字の用も亦至難と云ふべし、因に云ふ、惠遠は晉の僧にして、本姓は賈氏、雁門樓煩の人、學博く才高く、六經を綜へ、尤も莊老を善くす、後釋の道安に逢ひ、儒道九流は糠粃なりとして、投簪落髮道に入ると云ふ、予が此稿を脫する時、平生識る所の某氏來り、氏が兼て修得する禪理を談じ、且大道白雲の二句を評して、仲尼曰天何言哉。四時行焉。百物生焉。天何言哉。と結論し、遠公獨刻蓮花漏。猶向山中禮六時の十四字を論じて、若夫以佛祖不傳之妙道、掛在胸間、一食卯齋、六時行道者、所謂終日行而未曾行終、日說而未曾說底之人也、と結論し、遠公の果して俗塵の人なりしかは知らず、佛の大道は斯の如しと云へり、微妙の心理も、蓋し此中にあらん、然らば蓮花漏を刻して六時を禮するも必しも染むるものとは云ふべからざるも作者の眞味は前解の外に在らざるべし。

（次號完結）

外國從軍記者

渡邊生

見た事も聞いた事もない丸で知らない人達の人物評なんて云ふものは存外面白くもお可笑くもないものだが、一時我國民朝野を擧げて大に歡迎した所謂從軍外國記者なるものが何んな人々であつたかと云ふ事を諸君に紹介するのは滿更下らぬ事でもあるまいと思ふ、閑文字には違ひないが。

尤も茲に僕が紹介しやうとする外國記者は第一軍に配屬された連中のみで總計十六名、內譯すれば英國七、米國七、獨佛各一、第二軍にも之と殆んど同數の外國記者が配屬された、されどバーレーとジエームスの兩人を除いては別に取り立てゝ批評する程の人物も居なかつたらしい、第一軍には比較的豪傑達が配屬されたので二軍の樣に赤いネツキタイの生若いハイカラが居ない代りに恐ろしい蠻カラが混じて居た。

兎に角四月十日鎮南浦上陸以來遼陽の戰爭まで五六ケ月間寐食を共にしたのであるから(中には早く歸へつた者もあるが)書けば隨分アラもあるが差障りのない限り一人宛描いて見やう。

○スタンダード(倫敦)のマックスウエル氏

至つて小兵な而も肥つた、そして外人中稀に見る痘痕面で、英國人の通有性とも云ふべき剛慢な態度を遺憾なく具へて居る、何時、如何なる場合と雖も己の品位を墜さゞらん事をのみ懸念してゐる容子が明白と見える、だから苟も口を開かず、苟も人と爭はず、頗る眞面目で悠々濶歩してゐる有樣は鴉群に於ける孔雀の樣だと云ひたいが、何んな贔屓目で見ても蝦蟇のそれ以上に評する事は出來ぬ。

毎朝鬚を剃るのは外人の常とは云へ、從軍中には隨分鬚蓬々の先生もある中に、之は亦如何な事、山上に野營をしても畑中に露宿をしても必ず鬚を剃つてそして湯浴をする、一日たりとも欠かした事がない、何んでもない事の樣であるが、一椀の清水をすら得るに難く、況して湯を沸す器具も不備な時に此嚴命に接した從僕、雇人共の迷惑は一と通りでない、されど先生平氣なもので「人間は習慣を變へると病氣になる」と空嘯いてゐる、そして襯衣は日に着換へるのみか襟飾も毎日換へる、刷毛をかけざる着物は決して着ない、茲

にお可笑いのは先生の靴下で、一足宛必ず印が付けてある、夫を若し間違へて右足にはエー印左足にはビー印（無論同種のもの）と斯う云ふ風に出せば、印が違ふとて穿かぬとの事である。

何も從軍中で加之も山の中で靴下のエーとビーが違つたからとて同種の三打子も四打子もある中から撰り出すにも當るまいと思ふが、其所がそれ所謂デグニチーに關する問題で、修飾家と云ふ譯ではないのである。一度眼鏡を掛けて居なかつた爲に朝鮮家屋の低い鴨居でイヤと云ふ程頭を打つて少々怪我をした時は流石の先生も酷く狼狽たへたものと見え、頭を押へて五六回室内をキリ〳〵舞ひしたと云ふ、是が後にも前にも莊重の態度を失した只の一度であると其通譯は話して居た。

ヲックス、フオド大學出身丈あつて文章も勿々巧みなものだ、現に同じ從軍記者の中でもタイムスのフレーザー氏の如きは通信の原稿を一々訂正して貰らつて居た位、外國記者一行中の文章家を以て自任して居たが、亦他も許して居た樣である、英杜戰爭の當時も矢張り同新聞軍事記者としてすこぶる名聲を揚げたとのと、されど同氏の長所は能文の一事ではない、すこぶる明斷なる頭腦と鋭利なる判斷と而して事を處するの機敏とは一行中氏の右に出るものはなかつた、其の代り詭詐姦黠時に或は同輩を欺き而かも巧に其の跡を晦し一時一物盡く自家の利害得失より打算して苟も他の己れを凌ぐが如きの事あるときは方法の如何を撰ばず對手を倒し己れ執て代らざればやまず、然して其の手段の功妙唯だ〳〵驚嘆の外はない。

事物を利用する事は實に旨いもので、朝鮮内地旅行中たつた一晩宿泊したと云ふ緣故ある宣川の某米國宣教師を自家藥籠中のものとして、通信原稿を其の宣教師の手を通して他の從軍記者よりは常に三四日間は早く發送する樣にしたなどは其の一例である。

一時外國記者連中の仲間に檢閲難の聲が喧しかつた際にも己れ張本人となつて或は煽動し或は敎唆し一層事件を重大ならしめて置きながら、一方に於ては係官に對して己れは一切此の事件に關係せざるが如くに粧ひ、己れ調停の勞を執らんなぞと巧に雙方を詐き而して係官に對して益々信用を厚からしめたなぞも其の例である。

一面に於て傲然たる彼は他面に於ける非常な交際家で、一度食卓を彼れと共にせしものは時のうつるを知

らないと云ふ、畢竟ずるに端睨すべからざる人物で所謂好箇の新聞記者なのであろう。

氏一日、あまり高からざる然して痘痕ある鼻を蠢しつゝ曰く、「我が英國より從軍しつゝあるハミルトン中將の名はエンサイクロペジアに記されざるも自分は其の二三行を汚し居れり」と以て、氏が如何なる人物であると云ふ事を知ると同時に所謂新聞記者としての成功の程度を知るに足るてはあるまいか。

○ゴロハ新聞（佛國）の
トーマ氏

年少氣鋭の貴公子然たる男で佛國一流の氣取屋て、服裝も仲々凝たもので常に粋な風をする、然して頗る無邪氣ではあるが無暗に威張りたがる癖がある、何しろ現に佛國龍騎隊の大尉で東洋漫遊中日露戰爭に際會し急にゴロア新聞の囑托を受けて戰時通信員と早換をした男で、記者としての經驗は皆無であるとのこと。

軍人肌で遠慮會釋がないので時に本邦人の怨を買た事もある、余等一行が神戶滯在中或る新聞記者を捉へて我が騎兵を口を極めて罵り遠くコサック兵に及ばずとなし滿州の平原に於ける日露の戰爭は騎兵の劣等なる爲日本軍の必ずや敗北に歸すべしと語つた、而して其の記者は正直に其の談話を翌日の紙上に掲げた。

氏は常に吾々に向ても度々我が騎兵を罵倒した事があつたので吾々も小癪に觸つて居たので何時か一度は驚かしてやらうと思ふて居た矢先であるから直に其の新聞を取て「君、日本に居る間に斯んな事を云ふと君の身に危害が及ぶぞ」と威かした、處が先生非常に狼狽して夫れは自分の話した事と意味が少し異ふから是非取消さねばならぬと云ふて居たが、其日の夕方例の如く騎馬て市中を乘り廻して居ると偶然にも醉漢に暴行されて這々の體てホテルへ逃げ歸り自分の室で小さくなつて居た、其の無邪氣さ加減は笑止にも亦氣毒な程だ。

流石が騎兵大尉丈けあつて大の乘馬自慢で、馬も東京出立の砌り四百餘圓を投じて購ひ來たのは好いが、半月も經ぬ內に足部に固疾のあるのを發見して酷く萎氣て居た。

口の惡い結果吾々の仲間から露探と云ふ尊稱を奉つた程であつたが、鴨綠江の戰爭を見て此度は先生露の砲兵の拙劣なるを嘲り我軍砲兵の精銳なるとをあらん限の讃辭を盡して賞めちぎつた、褒めるのも貶るのも

率ね此の類である、謂ば極めて直情的な正直者さ。

氏の通信の文中斯んな事があつた「朝鮮の道路は險惡にして砲車を挽くに便ならず、日本軍は重砲を運ぶに二里の道程に一日を費せり、鴨綠江の戰にして若し日軍の敗亡に歸せんか凡て砲車を遺棄して退却するの止むなきにいたらん」と此れを見た檢閲官は莞爾として盡く塗抹してしまつた。

氏一日軍司令部に出願して敵狀視察の斥候兵と共に最前線に至らん事を乞ふたが無論却下された、誠に突飛な遣り方ではあるが、夫れて先生頗る眞面目なのである。

凡てが斯云ふ風であるから皆に誤解されて居たが「夫れには佛國と云ふ點もあつたろうが」兎に角先生自身は滿足して歸たらしい。

鳳凰城滯陣中の如きも天幕の前に庭園を作り草花を植ゆるなど何處迄でも生粹の巴里ッ子たる本質を表して居た。

尙氏に關する珍談があるがそれは「從軍餘談」の方へ廻す事とする

婦人問題

下田歌子女史を訪ふ

茅原ふじ子

過る日、女子に關する高見承りたしと、永田町の御宅を、訪ひ參らせたるに、折節御在宅なりとて、請ぜられたる應接室に在りしに、溫容犯すべからざる女史、婉然に坐につかれて、反覆語られたる事共を錄る、文字の責は我が上にあり。

◎女子と職業　女子の職業と申しますと、隨分多い樣です、近頃は女子の方が、大分家庭の外に働く樣に成りました、之は喜ぶべき現象であらうと存じます、會社、電話交換局等の部内にも、女子を使つて居る樣てすが、成績は能い樣に聞きますが結構て御座います、概して女子は指先が器用であるから、美術的に發達させたいと思ひます、又美術ならば、慥かに成功するだろうと存じます、只今迄の經驗に依りますと、日本の女子位手工に巧な指を持てる處は、外國には見ません。

其時坐を起つて、示されたるは、女子が監督の許に在る、實踐女學校生徒の製作品の、造花、編物、押繪の數種で在りました、同じ女性でありながらと、自分不器用な手を思はず、卓上から膝の上に移した。

女史は尙語を續けて、

此頃は化學を應用して、染色の方法も進みましたから、變色の憂はありません、造花などは外國に輸出しましても、外國品と違ひは有りません、押繪類は外國で非常に賞讃致しますから、大に有望ですが、支那、朝鮮位迄は差支ありませんが、西洋諸國に送りますには、十分の荷造を致しましても、海上の濕氣の爲に、糊が剝れる恐があります、之も化學者と計つて改良が出來れば、マア成功と云ふものです、此の器用な手を持て、此の製作品を出しますが、玆に一つの困難があります。第一に製作者に美術の趣味をもたせると云ふことであります、製作品は如何に美ても、時の趣向に投ずることが出來なければ、無功で御座います。第二は賣買の方法が宜しくないと云ふことてあります。

先年私が西洋に參りました時に、私の生國は美濃てすが、美濃は御存知の岐阜提灯が特産で御坐います、あれを贈物に致しましたら、大層賞めまして、五千の注文を受けたのてす、大喜びて早速申し送りましたら、早急の間には五千どころか、五百も出來ないと云ふて參りました、折角輸出の道はつきましても、規模が小さいから需用に應ずることが出來ないのてす、其時に大に經濟の道を講して會社組織にして、盛に致したら善かろうと思ひました、實踐女學校にしても、內國の需用に應ずる事は出來ますが、外國に迄は送る事は出來ないのです、經濟の道がつき、需用に應ずることが、出來ますと、女子の職業は美術が成功するてあろうと思ひます。

◎女子の獨身生活　神樣が宇宙間に、男女をお造りになつた上は、結婚をするのが、自然の條理てありましやう、然し舊來の樣に、何でも結婚をしなければならぬと云ふこともありますまい、心にない配合は、自然破鏡の悲境に陷り易いと思ひます、女子も相當の敎育を受けて參りますと、識見も高尙になり、希望もある樣になりますから、長者の意見で結婚させると云ふことは無理てしやう、又世が文明に進みますと、種々の方面から生存の競爭が烈しくなつてまいります、左樣しますと、舊來の樣に、家を成すことが、容易でなくなります、夫れは自然の傾向てす、何しても將來は、理想と生存の競爭の爲に、止むなく獨身生活を致すものが多くなるだろうと存じます、之は獨り女子のみでなく、男子の側にも、多く成るだろうと存じます。

◎男女の交際　一種の老婆心から申しますと、今の若い方の男女交際說にも、感服は出來ません、何だか青年の男女を、深淵に突き落す樣な氣が致して、危險でたまりません、夫も修身の基礎が鞏固てあつたら、善かろうと存じます、其の修身の基礎もなく、社會の制裁も加へられないと云ふ樣てすと、稍々ともすると、惡聲を流すと云ふ忌しいことがあります、然し「男女七歲にして」云々も、舊式で適應しません、以前は武士道で制裁をされましたが、今は夫れも文明風に葬られはしまゐかと案じて居ります、ですから修身の基礎が定まつて、社會の制裁が御座いますれば、高潔な交際をすることが出來ましやう、終局理想的の男女交際をすることが出來るだろうと思ひます、何事も過渡時代は、困難であります、急進黨もあれば、漸進黨もある、保守黨もあると云ふ樣なものですから、私は先づ中庸を取つて、危險の場所に近づかない樣に致したいと思ひます。

◎女子の宗敎　宗敎てすか、私は矢張何かを信ずるが善かろうと存じます、宗敎は一種の光で丁度暗夜に燈火を點した樣なもので、夫れに依つて悟道と云ふことが出來るのでしやう、宗敎に就ては私は未だ研究中て御座いますから、分明申し上られませんが、神の存在と云ふ樣なことは、永久に變る譯のものではあるまいと思ひますが、信仰すると云ふ樣になります迄の階梯は時代思想に伴はなければいけないと思ひます、彼の盛な「カトリック」敎さへ衰へたのですから、時勢と云ふことは、爭はれません、「ルーテル」が出ましてから久しくなりましたから、私は此後必ず宗敎界に、大人物が出るだろう、又出なければならないと信じて居ります。

◎女子と小說　全く讀むなとも申されません、讀めと申すことも出來ません、其の種類に依つて可否を申す外は有りません、此節の樣に種類が多くては、實に撰擇に困難です、殊に當時の樣な識見の無いものでは困ります、說く所は千篇一律て、靑年男女の骨に、綾羅たる衣服を着せた樣なもの計りですから、夫等を讀ませましたら、空想を畫くだろうと存じます、然し「小公子」の樣なものならば、奬勵しても讀ませたいと思ひます、之は或學校では敎科書中に加へて居ります、該書は他日母となるべき時の心得にもなります、私は取捨の辨別力に乏しい、未だ識見の一定しないものには、止むなく學校でも、關渉して善かろうと存じます、

家庭では勿論母たるものが、十分の撰擇をして、讀ませたら善かろうと存じます、ですが今の家庭の母たる人に、其責任を負ふて頂れますか、否か、一つの問題であります、ですから子女の教導者たる教師が十分の撰擇と監督をして貰ひたいと思ひます。

並に女史は幼時を、繰返して好例話を語られた。

私が幼い時分は、大變に小説が好きで讀みました、一定の見識のないものは、矢鱈に讀でならぬと、母や、祖父母から、申渡されまして、讀むべきものをあてがはれましたが、恐い物見たして見るなと云はれたものは、人の目を盗でも見たい樣でしたが、然かし愧かしくて、見ませんでした、ですから監督を致したら幾分の弊を防ぐことは出來るだろうと存じます。

◎女子と讀書　何々を讀むが善かろうとは、直には申し上られません、一日に幾部と云ふ發刊ものがあります世の中ですもの、實に撰び方に困ります、手當り次第讀むとなりますと、却て多讀の弊がある樣に思はれます、此の說も可、彼の說も可、一も善し、二も善し、と云ふ風て、夫を咀嚼するだけの力がありませんと、朝に、晩に、心を動かして、迷はなければなりません、之が即ち多讀の弊でしやう、今の靑年の方は、精神に健全の處が欠けて居る樣に思はれます、幅は誠に濶いが、實に淺い樣に思はれます、私は何處を押しても、突いても、動かないと云ふ意思を持つて貰ひたいのです、之も終局は修身の基礎が定まらないからでしやう、其起着點が、確實であれば、容易に撰擇も出來るであろうと存じます、撰擇が出來れば、精神的修養も出來るだろうと思ひます。

◎婦人と家庭　一口に申しますと、日本の婦人は家庭に忠實で、外國の婦人は社會に誠實だとも申しましやうか、日本の婦人が其家庭に忠實であるだけ、夫れだけ成績はあがりません、私は日本の婦人が家庭に盡す力の半を割いて社會に働いて貰ひたいものですが、只今の樣な有樣では、注文するのが無理の樣です、之は教育の有る頭腦の人に、改良をして頂き度ものです、過度時代に舊習を破ぶりますには、世間の攻擊や、批評を受くる燒點に成つても仕方ありません、攻擊や、批評を畏れる樣ではとても改良は望む事が出來ません、外國の婦人などは、家庭にも忠實で在つて、社會の半面は婦人のものに成つて居ります、只今の樣な有樣では、社會の半面に立つて働くと云ふことは出來ません、家庭の中に秩序と云ふことが缺けて居る、此不

充分な家庭が組織して居る處の社會であるから、社會もまた不健全である、此不健全なる家庭の中に在る處の婦人が、社會に迄立働くと云ふことは、如何にも無理な注文であろうと思ふ、ですから家庭の改良と云ふことは、急務であります、家庭さへ改良が出來れば、社會は整然として秩序を保つて行く樣になります、左樣なれば、必ず婦人が社會の半面を預かる事が出來ましやうと存じます、此の不秩序な日本の家庭中に在る處の婦人は、夫れは氣の毒なものです、朝から晩まで休む間もなく、立働いても、一日にした處の仕事と云ふものは、少しも見えないし、休息の時間と云ふものも有りません、之は必竟時間の制限と云ふことがないのと、心なく時間を費やすと云ふことに、原因するであろうと存じます、此の時間と云ふものを上手に費しましたらば、婦人が社會に働くことが出來るであろうと思つて居ります　時間を空費すると云ふことは、未だ時間の尊いと云ふことを解しない人が、多いので御座います、忙しい〳〵と云ふ人でも、一日の中に空談雜話に費やす時間は隨分多い樣に見受けます、夫れを利用したら立派に働いて下さる事が出來るだろうと存じます、私共は月曜日の午後三時から五時迄を面會日と定めて置きますが、中々左樣參りません、地方などから出て來た人に、來週の月曜日迄待てくれとも云ひ兼て會ひます、田舍て長閑に暮した方達ですから、三時から十時頃まで居ることが有りますが、實に心無い人だと思ひます、定めておいても其通りですから仕方がありません。

經濟の方から申しましても、只今の處ては、靴の方を通す處も、必要ですし、又疊の間も要ると云ふ樣な譯て、不經濟極まるのです、衣服調度の上からも、飲食物の上にも、斯の通りですから、中々困難です、過渡時代ですから仕方がない。申せば、申すもの丶此儘では、致方がありませんから、是からの婦人、主婦として立つ人は、玆に注目して、漸々家庭の改良と云ふことを計つて頂きたいと思つて居ります。

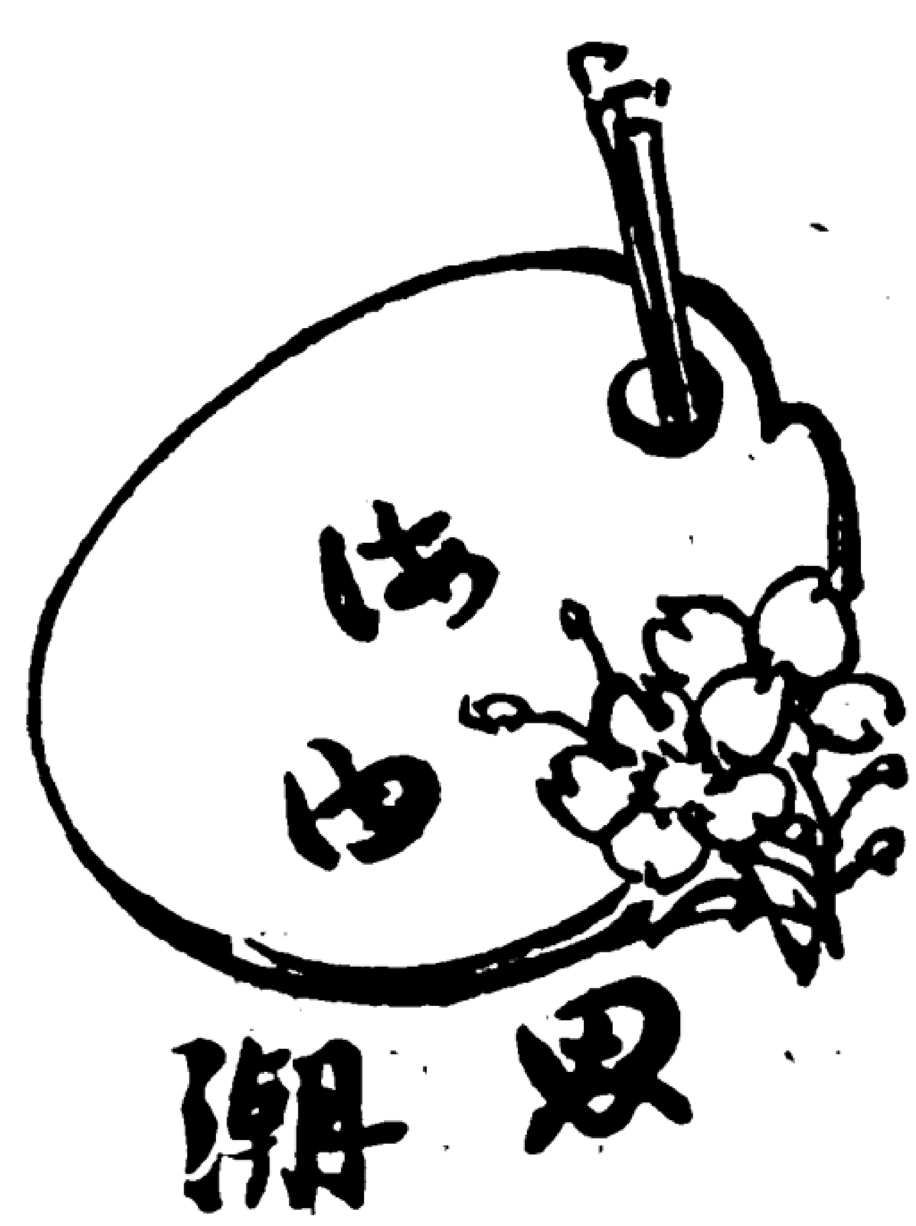
◎寒暑の休日を如何に利用すべきか　私の預つて居るのは、大概別莊に參る樣ですが、旅行と云ふ事は、非常に善かろうと存じます、然し女子は男子の樣に一人て手輕に出來ませんから、家庭の事情に依つて出來ないこともあります、此時は溫き母の膝下に在つて、家庭の實習をさせたが善かろうと存じます、運動も出來ますし、經驗にも成ると云ふものです、玆に成ります

と、又家庭の問題になりますが、此の女子を私が望む樣に教導して下さる家庭は至つて少數なのです、嘗て私は十七人計の女子を預つた事が在りますが、私の生活は女子ではなくつて、丸るで男子の樣でありますから、其時分は自身勉めて仕事などをして見ましたが、中々多忙で其の隙も在りませんでしたから、宜くないと思つて無理に斷つて仕舞ひましたが、實に子女を教導する母たる人の責任は重いものです。

文士初對面錄（その一）

天中天

▲幸田露伴先生　墨堤に添うて、言問より二三町、右に折れてとろ〳〵と下れば突當り、田舍の庄屋めける門構へ、幸田とばかり門札のくすみたるに、襟先づかき合はされる心地がした　頃しも秋の末つ方なれば、河面傳ふ風寒しとて先生手づから火鉢を押しやりて、先づ〳〵と云はれる、通されたるは先生の居間、八疊の坐敷塵一つ止めず、床の前に小かなる經机の置かれたる外、先生と予と火鉢を中に二人かぎり、話は東京座の五重塔、際物と近松時代、坪内博士の浦島など次ぎ〳〵に移り行きて小一時ばかり、謀て見ず戀に憧がれて居た予の心は、此日ばかり永からんことを願ふたのであつた（つゞく）



交戰の終局

『太陽』　法學博士　添田壽一氏

今世上の疑問となれる今回の戰爭の終局如何を考ふるに、露國は實に世界の大國にして數年來軍資金の蓄積に努め、其兵力財力倶に歐洲列强の最も恐るゝ所なり。斯の如き大國と干戈を交ふる以上容易に敵の降服を望むべからず。况や露國の不明なる我れを目するに黄猿猴劣等國を以てす、彼れ如何に失敗を累ぬるも行掛上恐らくは和を請ふを肯せざるべし。加ふるに交戰の地彼れが本國を距ること遠きを以て其急所を突くこと能はず、彼れの失ふ所は他國の領土たるに過ぎず。

露國容易に屈服せずとするも他の列强が干渉することなかるべきやと問ふに或は仲裁に出つることは之あらん干渉に至ては容易に望むべからず。從來列國皆露國を危險物視せざるはなし。露國は他國が貿易の發達を努め、憲法、公法に束縛せられつゝある間に全く之と反對の方向に進めり。故に國として露國勢力の衰弱するを希望せざるはなし。唯佛國のみは之が例外なるに似たるも、眞に佛國の望む所は露國が軍事上に强か

らんより寧ろ重きを產業の發達に置き其債務を果すの力を增加するにあるや疑を容れず。蓋し表面仁義人道を唱道しつゝある列國も其主眼とする處は實利實益に外ならず。私かに軍用品を供給し日露戰爭の爲めに多大の利益を獲得しつゝある以上又自國貿易の侵害せられざる間は列國が傍觀者の位置に立つべきや必せり。

然らば露國國內の不穩は如何と云ふに、虛無黨、革命黨、無政府黨其他の不平分子は內に充滿せるは事實なるも、大擧活動以て國內を攪亂し政府をして力を極東の戰局に集注する能はざらしむるに至るものとは認むる能はず。大多數の人民は無敎育無感覺にして殆んど日露戰爭のあるさへも知らざるが如し。

斯の如き無智の人民に向つて、其政府に反抗せむことを望むは、所謂百年河淸を俟つの類なりと云はざるべからず。好し多少反抗する者あるも巡兵、警察、軍隊は之を壓抑するに餘あり、去れど露國にとりて恐るべきの危機は軍隊及び國民が不平分子と合するの時なりとす。此の事急速に望むべからずとせば改革の前途も遼遠なりと謂はざるべからず。

果して然らば戰爭の終局に達するは意外の事變發生せざる限り幾多の歲月を要するや明瞭なり。斯く覺悟を定めて永續するは不可なきも直に戰爭の終結すべしと誤認するが如きは違算の甚なるべし。苟も露國と一度干戈を交へたる以上は國家の存亡を賭して終局まで戰はざるべからず。徒に姑息の平和を求めなば終局の目的を達する能はざるのみならず世界に於ける日本の地位は忽ち零位に降り、貿易發展の望も立つるに絕ゆるを免れず。國民の決心鞏固にして我が財政經濟にして依然たらんか戰爭の繼續毫も意とするに足らず。

先づ農民を韓國に移住せしむべし

『時代思潮』　　横井時敬氏

朝鮮の現狀に付ての調査は未だ甚だ不十分である、多くは大抵想像八分て事實が二分と云ふが如き調査てあらからして、甚だ當てにはならないけれども、幾多の人の調査した所、想像したる所を根據として考へる時には朝鮮に於て今後開拓すべき場所が少くとも百萬町步位はあるであらうと想はれる、縱し百萬町步無かつたにせよ、今朝鮮に人民が耕して居る所の土地で贊拂ふべき者も少なからんであらうと想はるゝ、其點から言ふたならば先づ我が農民を移したならば百萬町步丈けの土地は得る事が出來るであらうと思ふ、デ先づ其氣候に付て考へれば北と南の方とは大變に違つて居る、南の方は氣候は大變に良好であるが北の方は固より不良である、全體から觀て固より我が北海道より我が國の農民の農業を營むに付ては良好であると考へられる、多くの場所に於て稻を作る事が出來て若しも土木工事を起して灌漑排水の便を十分に開いたならば土地は割合に沃壤であつて生產も極めて多いであらうと考へられる、之が即ち我國の農民を移すのに最も適當なる所以であつて又人參の栽培の如きも我が農民の仕事に決して不適當なるものでない、彼には養蠶は未だ甚だ不開けてある併し氣候から言ふて養蠶が決して適當しないと云ふものでもない、我國民が往つて計畫をしたならば養蠶も大いに開く事が出來るに相違ない、麥も出來る、綿も出來る粟も出來る農產物として殆ど出來ない物は無いと云ふて宜い隨つて我が農民の農業を營むには極めて適當であつて今言ふた如く北海道よりも固より良好であるであらう、乍併假りに今北海道に於て一戸の農民が管理する所の土地の面積を以て朝鮮に於

てばどういふ平均にして農民に管理せしむると云ふ事にするかと考へたならば、其實是丈けの土地と云ふものは農業一方を以て生活を立てしむるには適當であらうかと思ふ其面積は即ち五町歩である、五町歩の平均を以て一農家の管理する所と爲さしめたならば百萬町歩は即ち二十萬戸の家を移す事が出來る割合である、假りに之は餘り多過ぎる所の計算てあるとしたならば少くとも先づ其半分として即ち十萬戸を移す丈けの事は固より十分に餘地があると云はなければならん、既に農業家が十萬移つたならば之に從つて又夥多の人が移住をして往つて遂に十萬は二十萬にもなる事に爲るてあらう、若し二十萬戸の人が移つたならば即ち一家五口として百萬人である、一百萬人の我日本人が朝鮮に於て其業を營んで居つて其母國の爲めに盡すの志を失はずに居つたならば、玆に於て始めて朝鮮の獨立上十分の保證を爲す事が出來ると同時に又我國の藩屛と爲つて東洋平和が極めて之て保たれる事が出來るであらうと考へる、デ是丈けの人を然らば如何にして移す事が出來るであらうか、今興業會社抔の計畫した如く土地を買入れて往つて夫が朝鮮人に小作せしめると云ふ事より以上の目的を立てゝ日本人を成るべく此處に移らしめると云ふ計畫を爲したと假定しても、果して日本人が喜んで玆に移るであらうか、父母の國を去つて遠く異域に往つて生活を爲さうと云ふのには之を引くに十分の利益が無くてはならん、日本の小作人が往つても矢張り小作人であると云ふならば得る所幾何も無い話であつて、小作料が安いとか種々の利益があつたならば多少の人は移るであらうけれども、速に斯の如く多數の農民の移住を望む事は到底得べからざる事と云はなければならぬ、之れを移住せしめやうとしたならば、勿論之に向つて十分の保護を與へなければならぬ、保護を與へた上に十分の利益を與へなければならつ、如何にして之に保護を與へ又之に利益を與へ得るであらうか彼をして移住せしむる丈けの費用の幾部分を償つて貸して遣らなければならぬ、之を移住したならば其土地は其人の所有に歸せしむるやうにせなければならぬ、唯小作せしむると云ふ事では農民を十分に引く丈けの價値が無いのである、デ斯の如く保護を與へ引益を與へると云ふ事は尋常一般の事では到底行かないのである、其計畫は種々あるであらうが、要するに國家若くは國家が特別に保護する所の會社をして購はしめてさうして農民をして更に之を購ひ得せしむるの途を立てんければならぬ、又其土地に移住の經費なり農家の設計費の費用を之に貸與へしむるの政策を取らなければならぬ、

監獄改良の方法

『新人』　浮田和民氏

歷史を繙いて觀察すれば社會に於ける刑罰の始は復讐にあり。從て犯罪數は刑罰を嚴酷にする事によりて減少する者なりてふ鎭壓主義を生じたり。我國維新前の刑法は實に斯種の者なりき。西洋にありてもハワード出づる迄若くは今より七八十年前迄は英國の如きも亦實に其刑法極めて殘忍、例へば一兎を盜んで猶死刑を免れざるが如き有樣なりき。玆に於てかロミリーの如き志士出てゝ刑を重くするの無功にして有害なるを說き、出來得る限り、懲罰を輕減して所謂教誨主義を取るに至れり。之が爲めに犯罪者を增加したる事はなけれども猶其効果緩慢にして適切ならざるや、今日及び將來に於ては漸く豫防主義若くは教育主義大に勃興せんとす。即ち盛に孤兒院、養育院、乃至感化院等を起して犯罪を未發に防ぐの方法なり。從來の如く犯罪の原因を究明する事なくして徒らに其結果のみを改善せんとするの非を悟り、犯罪者に對する思想正に一變せ

る也。抑も犯罪をなすには因由ありて存す。(一)彼等犯罪者は其體格に於て病的なる所あり(二)殊に其精神に於て大に常人と異なる所あり。蓋し財貨を得んが爲めに他人の生命を殺害して敢て怪まざる彼等の心理作用は到底吾人の想像する能はざる所なり。故に吾人は犯罪者數の減少を圖らんと欲せば單に監獄改良に滿足せず。須らく進んで彼等が體格と精神との發達健全を圖らざる可らず。今日の教育制度、社會制度を改善せざる可らず。要するに犯罪の行はるゝは社會其者の責めなりと知らざる可らず、由來犯罪の種類は社會の制度に相應ずる者なり。故に私有財産制度なき社會には當然竊盜罪なく、野蠻未開の社會、夫婦の別なき世には無論姦淫罪などのある可き筈なし。同理にて一部少數の富者が其富を濫用して社會多數の害禍を顧みざればこそ幾多の盜人を生ず可けれ。是に於てか吾人は社會が大に犯罪人に對する同情を喚起せん事を望まずんばあらず。蓋犯罪人は前にも一言せし如く一種の病人のみ、然も之を人非人として度外視するが如きは非常なる謬見なり。即ち吾人は巣鴨監獄市谷監獄等を見る事須らく大學病院、順天堂病院等を見るの感を以てせざる可らず。吾人は恐る。病院内却て監獄にまされる大罪人ある事なきかと。彼等の病氣は單に自然の法則を犯したるに止まらずして寧ろ恐る可き大罪惡の結果たるもの少しとせんや。所謂監獄の囚徒も病院の患者も類に於ては一なり。或は唯程度を異にせんのみ。故に余は大に今日の監獄制度を改良せざる可らずと主張する者也。成程彼等は僧侶若くは牧師の說教によりて悔改するの機なきにしもあらざるべけれども、多くは出獄後世間に齒せられざるを見て自暴自棄再び前過を繰返すに至る也。社會に容れざるを見て憤然自殺する底の男氣は到底之を彼等に求む可らず。斯の如き自暴自棄は寧ろ當然なり天與の貴重なる生命を棄てゝ顧みざる者續々たるが如き社會は吾人却て其滅亡に近からん事を恐る。更に余は彼等囚徒に美術を教へ原因結果の嚴然たる理法に通ぜしむるの必要あるを信ず。彼等が非道行爲の非を悟らざるは畢竟二と二を合して五を得るが如く考ふるによるなり。又彼等に勞役を課するや極めて之を愉快ならしめざる可らず。監獄に入りしが故に勞役に服せざるべからずと思はしめず、須く勞働は愉快なり貴重なりてふ思想を喚起せざる可らず、且彼等に道德を教ふるや其最高理想を以てせざる可らず。罪人なりとて卑近なる道德を以てするが如きは思はざるの甚しき者也。須らく最高尚なる道德を教へ神の前には萬人凡て罪あり、彼も人なり我も人なりてふ意識と自信に到達せしめざる可らず。

時局に於ける生命保險事業の効果

『實業之日本』　片岡直溫氏

生命保險事業は其形式に於ては營利事業たるを免れざる可しとするも、而かも其目的に於ては、正に大なる一種の慈善事業也、大なる一種の社會政策也、大なる國家金融機關也。何を以てか生命保險は慈善事業なる、蓋慈善の眞義は人に教育を與ふるに在り、人の能力を完全に發達せしむるに在り、人をして人たらしむるに在て存し、而して「ホップス」の謂へるが如く、死は人生の最大害惡なりとせば、生命保險は人類を圍繞せる死の害惡より生じ來る可き不幸の結果を、豫じめ排除す可き事を擔保し、之に依て、各人の心裡に慰安を與へ、各人をして齊て其の當に發展す可き性格を、自由に發揮する事を得せしめ、併せて其子孫の教育を完全ならしむ、是れ其の人の爲にも將た其子孫の爲めにも、豈大なる慈善事業にあらずとせんや、何を以てか生命保險事業は重要の社會政策な

る、蓋恆產あるもの恆心あり、恆心あるものは健全なる社會を組織す、背後に生命保險なる一大擔保あるが故に、安心して其業務に就き、輕擧妄動を愼むの結果は、勞働者をして秩序ある勞働をなさしめ、大に勤勉ならしめ、延いて資本家をして資本の投下をなさしむ、此勞働者の自重なる勤勉力、資本家の投資力、是れ既に社會を益する事大なるに加へて、生命保險は更に一時の災厄よりするも貧困に驅られて、遂に罪惡を犯し禍亂を企てゝ、社會を毒するものを豫防し、社會の健全なる發達を期するを得せしむ、是れ豈社會改善の一大政策にあらずとせんや、何を以てか生命保險は國家金融機關なる、蓋國家事なきの時に在ては、生命保險業者は零碎の資金を吸集するの海綿（スポンヂ）となり、公私の團體若くは個人の爲に時に金融の滴々を垂れて社會の經濟の調和に資し、一朝事あり巨額の資力を要するに際しては、國家の爲に更に大なる金融の便を供して、國家をして國資欠乏の逆境に沈む事なからしむるに適す、是れ豈國家の一大金融機關にあらずとせんや、生命保險事業盛んにして英國に自主獨立の民多く、强制保險の制布かれて獨逸の社會に破壞的勢力の源泉衰へ、國內銀行業者の總てを擧ぐるも尙成し能はざりしものも、僅々二三の保險會社の資力を以てして優に成し得べき能力ある事の示されて、米國の財界に生命保險會社が牛耳を執るに至れるもの洵に所以なしとせず。

軍國の財政計畫は先づ其根本的政策を定めて之を斷行す可く姑息の手段の下に禍を後日に遺こす事を許さず、國民の勤儉貯蓄せるに乘じ其財力の一部を吸收せんとして、富籤的勸業債券を募集して、射倖心挑發の下に、資金の一時的回收を計るが如きは固と姑息の陋策として之を排斥す可く、斯かる射倖心の增大せる國民の勤儉貯蓄は單に發作的一時のものたるに過ぎざる可く其の永續を望むに難し、而かも生命保險に在ては其加入契約者は、尠くとも契約限期の滿了迄若くは被保人の死亡に至る迄、保險料は年々繼續して之を貯蓄せざるべからざるを以て、其貯蓄の性質永續的なるのみならず、保險掛金は銀行預金の如く俄かに取付に遭ふの恐なく、會社は此等の掛金を軍事費に充つるの財源としても最も正確適當のものなりとす可く、且つ保險掛金は保險會社によりて轉々融通せられ、其融通せられしものは再び循環し來て、爰きの保險加入者の手に入りて更に保險掛金となり、是等の保險掛金は蓄積の結果、大なる資金として更に軍國有用の資に供せらるゝことある可く從て、戰爭永續し軍費の徵收年々繰り返さるゝ事ありとするも、生命保險會社は優に其負擔に堪えて軍國終局の財的經營を完ふするに資する所大なるものありと云ふ可し。

日本の强大なる原因

『日本人』　文學博士　井上哲次郎氏

（三）　一、二は略す

第三に計ふべきは、我國の文明猶ほ壯健にして爾後愈〻發達せんとするの時期に在ること是れなり、我が日本は固より二千數百年來の舊國なれども、而も維新の大革新に依りて全く一變し、恰も新たなる日本の生れ出てたるかの如き觀あり、而して其の年齡僅に三十有七、實に前程萬里の希望多き靑年に類せりとすべく、隨て日本現今の文明は健全にして活氣あり希望あり、是より後更に大に發達せんとする徵候を表はせりといふべし、然るに彼れ露佛等の文明は如何なりしとするか、佛國の文明は新鮮なる狀態といふよりは寧ろ爛熟に過ぎたるものにして、稍〻文明を通り過ごしたるやの看あり、先づハイカラーの極度と謂ひて可なり。

露國は佛國に比ぶれば半野蠻を以て目すべく、未だ高等なる文明に達したりとはいふべからざれども、而も彼得堡を中心とせる歐洲露國の一部は頗る佛國的文明を模倣し、爲めに同じく爛熟に過ぎたるの狀態に在りとすべし、一例を舉げて言へば、露國の軍隊中には如何はしき婦人の紅粧を凝らして徘徊するを見る多く、其他我が國人の到底信を措き難く見ゆる事實にして現に露國に行はるゝも亦た少からず、其士氣の振はざるもの、一は此に淵源すといふも不可なし。是を我邦の軍隊に比較せば、其差異果して如何ぞや。若しかゝる點に於て善く考ふる所あらば、以て世界文明の氣運が次第に滑移默寄しつゝあるを隱約の裡に視るを得べきなり。

（四）

第四の原因として看過すべからざるは、我國に一種の武士道の發達したりしこと是なり。武士道は獨り之を我國のみに限りたりとす可らず、上古羅馬の時代に在りても多少武士道に均しきものゝ發達したるを観、又た中世『ナイトフード』なるものゝ西洋諸國に發達したるを観、而して其の遺風の今ま尙ほ英獨及び其他の諸國に存するのみならず、彼の露國に於ても亦た同じく一種の武士道と稱すべきもの存するを観ると雖も、獨り我が日本固有の武士道の如きは世界孰れの國にも發見し難しといふも溢言に非ずして、かく日本武士道が一種特別の發達を爲したるもの、全く皇室を中心とせる日本の歷史的發達に淵源したりしなり、長くも皇室の御祖先を攷へ來れば、少くも二千數百年の昔時に溯ることを得、所謂皇統連綿、萬世一系にして、世界萬國に類例なき事實や洵に茲に儼存す、而して此の世界萬國に類例なき事實の儼存するありて始めて世界萬國に類例なき武士の發達せる事實あるを自覺するを要す、武士道は素と大伴氏佐伯氏の如き皇室の護衛者の間に發達せる者にして、中世に至りて久しく武家の間に移りしかども、明治維新の際、政權の復び皇室に歸すると共に、武士道は又た皇室との關係を發達し來りぬ、要するに武士道は漸を逐て次第に發達し來たりしものなるが、其の漸を逐て次第に發達すといふも實は二千數百年の歲月を累ねて發達したるに因り、世界に類例なき元氣の積聚として此の如き壯快なる發展を遂げ來りしにて、我が日本武士道が露國の武士道よりも更に一層優れるは、露國の我に對して連戰連敗せる事實に據りて明かに證せらるゝを見る、我が日本の武士道が何故に世界に類例なきかといふを怪む勿れ、是れ實に世界に類例なき萬世一系の皇室を中心として發達したればなり。

通行稅と電車賃金

『時事新報』

政府が非常特別稅法を改正して徵收せんとする新稅目の中にて通行稅の如きは最も不良のものと云はざる可からず政府の提案に據れば汽車、電車、汽船の走行距離を標準として等級に依り稅金を課し五十哩未滿のものには三等一錢の割合にて課稅するの規定なるを以て市內交通の機關たる電車蒸汽船の乘客も一回の乘車乘船に付一錢の通行稅を負擔せざる可らず東京市の如き近來各方面に電車鐵道の開通すると同時に三錢均一の賃金制を採用したるの結果、市內の交通は全く面目を一新し職工勞働者が朝夕これを利用して工場へ通勤するは勿論、中等社會の市民にして都會雜沓の地を避け電車最終停留場の近郊に居を移したるものも少なからず電車開通の爲に市民の生活を愉快にし市の衞生を完全にし多數市民の交通上に便利を與ふるの事實漸く著明ならんとするの今日、通行稅徵收の爲めに三錢の賃金が四錢に騰貴せんには電車を利用する者は一日往

復二錢の人頭稅を課せらるゝと同一結果を生じ細民に過重の負擔を加へざるを得ず又細民が此負擔に堪へずして電車の乘用を廢止し是れまで短距離間を乘車したる者も亦これを廢止せんには會社の乘客數は著しく減少するの道理なるを以て或は會社は一方に收入減少を塡補せんとして從前の等級別賃金制に復奮し長距離の賃金を引上ぐるの手段に出て政府も亦通行稅を課したる關係より之を認可することもあらんには三錢均一の賃金制に依て漸く發達し來れる市民の生活に一頓挫を招かざるを得ず戰時の財源を得るに急にして通行稅を課するの必要ありとするも市内の交通機關には之を免除せざる可からず又市外の交通機關に課稅する場合にも同一の理由に據り短距離の旅客に課稅す可からざるは勿論なり政府が交通稅に得る所の收入は總計二百十三萬六千餘圓に過ぎざるに斯く市内幷に市外短距離の交通に其稅を免除するものとすれば殘る所幾何なりや思ふに數ふるにも足らざる小額に止まることならん此收入を得る爲めに商賣其他の業務にて旅行する者に課稅し鐵道、汽船會社の營業上に手數を加ふるが如き財政策の宜しきを得たるものに非ず通行稅に依て豫定の收入を得んとすれば市民殊に細民の生活上に困難を來し此困難を免かれしめんとすれば收入は著しく減少す可しと云ふ斯の如き稅は如何にしても賦課の理由を見出す能はず鹽專賣と云ひ通行稅と云ひ穀物稅と云ひ細民に負擔を及ぼすの恐あるが爲め文明國に於ては漸次排斥せられたる稅目を我政府が殊更に襲用せんとするは如何なる意に出づるものなりや我輩の了解に苦しむ所なり。



增稅案と經濟學者

我國の學者が時局に對すること極めて冷淡に、恰かも對岸の火災を視るが如き風あるは、予輩の怪訝に堪へざる所なり。

今や我國は全力を傾注して驕慢なる露國を膺懲し、以て年來の素志を貫き、百年の基礎を定めんとす。之に要する莫大の費用は遂に增稅案を提出せしむるに至る、勢止むなきに出づ。我國民たるもの衣を薄くし、食を輕うするも、甘んじて服從すべきの義務あり。然れども增稅を課すべき貨物の種類、及び稅率の高低如何は、將來の國家經濟に關係すること極めて重大に、深思熟慮以て之れが施設をなし、改むべきは改め、變すべきは變ぜざるべからざるなり。議會亦是に見るあり



歌

尾上柴舟選

前田夕暮

わが歌にまためづらしき譜をよせて風の舞樂に世はあらたなり

右手に劍ゆん手にうたの筆とりて年の御神はおとづれましぬ

きゝなれぬ音やと細う戸を繰ればゆふうす月夜雪しろう降る

雲まよふ古關の秋のたそがれをかすかにひゞく三井寺のかね

ほのぐらき枯野たどるに道さえて星ながれぬると見ればさめぬ

たとふれば罪は天彦おそろしきひゞきとなりて胸にかへり來

ひやゝかに胸を領ずる氣にみちてなみだながるゝさびしみの洞

にひ月のひかりさやけきわか杉のいけ垣小路姉もゆくかな

夕鐘のふと野におちて消ゆるごと棼よほまれよはた智慧よ名よ

黄泉の醜女夜がらすやみの夜にわが病むやどの屋根に來て嘯く

風や來と紙燭に袖をかざしつゝ姉とつま戸によるの雪見る

みつ足の木馬に乘りて小狸が公子と化くるこがらしの夜や

淺山山茶花

秋の野に常世のかげをしたひきてさむしと啼きぬ椋になく百舌鳥

霜とこらむおもひは消えてうら枯れのたゞさびしうもなりし我胸

あぐがるゝ遠野のゆふ日雲におちて闇にまかるゝわが運命かな

土をうつ落葉のこゑつめたしや聖者みち說くグリースの秋

水やせてみづには葦のかげやせてゆふ雲さむし秋野ゆく川

やつれては枯れてはあきの風にうらむ名なし小草に似たらずや我

人の世はほゝゑみながら行くべくばわれら涙の子はゆるされじ

詩の國や今朝うつくしき雲湧きてわかき子の額みなひかりあり

夕闇のせまる大野に風おちてあはたゞしうも雲に入る鳥

日影さゝばきえむ運命のあさの霜しばしを神のはしらと立つも

正富汪洋

あな眩ゆ金矢擁してゆふばえのひかりうつろふ雲に立たす神（以下四首金箭會といふを起して）

黄金の神矢たか鳴り扉に入りぬそれかいとれば雲裾にながし

賜ひませしこの大矢もて力こめて大地にきざむ歌はわれに在り

われこそは遠矢にかけて仇射らむこゝ美の領の門守（かどもり）護男神（をがみ）

耕崎朝陽

夕鐘のひゞきのひまのしゞまをば芦のうすら氷そとはなれたり

大銀杏むかしながらの風のこゑ木魂ひとだまさゝやく如し（鎌倉なる八幡祠頭に立ちて）

米野町子

ともしびの消えむとしてはまた燃えぬ夜あけ一時似ぬおもひ湧く

意地といふか君ゆゑ涙かくす身ぞ世にたゝかひのわれもひとり子

ふとおちし涙にひゞく琴いとのしめりさぐりてまたなく夜かな

なる時はなるにまかすのさとりありてさても捨てたる戀わすられぬ

本郷ひで子

師のきみが誦しますみ歌うるはしき星は地をうつくれ秋の宵

東薫

香に酔ひて毒百合かまむ春はしらずわれらの戀はまとかなる戀

馬場いでゝこよひ八幡の盆をどり妻へのふみは繪葉書

にせ打

若山牧水

憂かりける秋は去にけりなみだ知る人にわかれし朝こゝちかな

ゆめ守りにさぶらふ野菊をみなへし狐晝ぬるくさの宮かな

秋霧やみだれ八千草みだれ髪野分のあさのひとうつくしき

から松やさむき山の日やまがらす山のこゑきくあさ峠かな

啄木鳥の木つゝくおとに朝木立木立しづかに秋めぐるらし

紅の實は蔓にしだれつ蔓草のもみぢに舞ひ來べにのさゝ鳥

おもひ出の夢の小ぐるま糸ふるみたえ〳〵繰れば夜ぞうつくしき

このみ鈴小野のみどりにまろがさば露みな鳴らむ草みなさかむ(銀鈴をよみて)

前號正誤、聖堂の鐘に暮れゆく野の丘に杖たてゝ見ろ古羅馬の秋、夕暮、山ゆけばわが身眞珠とまろがりて音なばなすこと秋は鳥なく、見かはして思はず仰ぐ夕雲やあゝさびしみの秋よ姉君牧水、君が袖の鈴に目ざめし歌の子のやさ眉あかうさすよ　新日の、汪洋、

▲歌募集　別に課題を設けず寄稿者の意に隨ふ
締切毎月十八日限り

新年雜詠　綾石選

新しき手綱映えけり初荷馬　竹香庵
廻禮の雪降りいでゝ泊りけり　同
乗そめや七浦の舟笹かざり　同
正月も鰤の頭に廿日かな　同
雪洞に初夢消えて行衛かな　同
大阪の入舟出舟初荷かな　同
萬歳やチラ〳〵雪の女郎屋町　五湖
戀ひそめて羞みそめて松の内　同
小娘の袂ゆたかに松の内　同
貼り換えて障子明るき初日かな　青龍
裾村の國旗見ゆなり初霞　門
門松の門美しく掃かれけり　同
先生に小さき賀客の並びけり　五遷
客の間や餅飾して具足櫃　同
元朝やくらきに開く表木戸　雨翠
軍服の寫眞の前に御慶かな　同
初空や占領の山皆日の御旗　黄村
元日の神燈明くともしけり　浦亭
姉妹連れて寫眞も花の春　英子
袴着て先生の宅へ年始かな　圓外
初鳥一番汽車の通りけり　翠藹
福引のあと一本とどよめきぬ　蓼舟
雜兵のしどろもどろや歌がるた　萍雨

書初の墨だぶ〳〵と太き筆　七三三
藪入や縫上げ厚き絹二子　苦風
歌がるた女少き此夜かな　五習
鍬初め庭へ下ろせし鉢の梅　蘆風
正月は嬉しかりしを貧に處す　三溪
燈臺の灯白みぬ初烏　一歩
着衣始南枝の梅の開きけり　蝶衣
元日の早く暮れたり爐のほとり　同
同居して一つ竈に君が春　同
何が何雜煮とけたる鍋の底　同
着衣始夫に見せやる鏡かな　同

漱石氏に

君が春文武の家の梅の花

選者吟

初日の出愛宕の塔を仰ぎけり
日本橋初荷の旗のひるがへる
酒のまぬ妻にも屠蘇の三が日
嫁が君にひかれて行きぬ小殿原
書初や我が意を得たる發句一つ
よき火して炬燵一日も御正月

二月分課題寺（春季）一月十八日限
三月分課題社（春季）二月十八日限
應募俳句は東京市本郷區駒込曙町十一番地大谷正信宛の事

姉のおもひ

正富汪洋

年の始めのほぎごとを
のべにこしたるその人は
あゝいもうとの此春に
ともに棲むべき好男子
（あのたのしげの笑ひ聲）

われは悲しや片つ貝
かたみに深うちかひてし
それは夢かや仇なりし
枕一夜も幷べずて
戰の地へ追ひたりし

うちひるがへる日の旗の
下に立ちより亡き人と
去年遊びてし今日思へば
世の咀はしくなりにけり

て數多の調査委員を設け、日夜盡瘁しつゝあるもの、如し。然れども直言すれば、彼等議員の多數は、經濟に關して其智識甚だ淺薄に、又動もすれば、黨派的感情によりて其見解を二三にするもの少からず。此時に當りて斯學の研究最も深くして、其智識極めて確實に、其見地獨立にして些の拘束なき經濟學者が、堂々として增稅案の可否を論じ、該案が一國の經濟に及ぼすべき影響を述ぶれば、未だ定見なき議員の心を動かし、又國民全體の輿論を喚起し、其効果の實際となつてあらはるべきこと言を俟たざるなり。今や歐洲の世界に於ては最上の權力議會を放れて新聞記者に移り、新聞記者を去りて學者に渡りつゝありといはるゝに反し、いかなれば我國の學者は俗物ならざれば即ち隱者に類し。堂々たる人格と熱烈なる士氣とを備ふるものに乏しきや。增稅案に對して其意見を述ぶる經濟學者のあらはれざるが如き、適々以て彼等平常の態度如何を察すべきなり。

彼の普佛戰爭の起るや、獨の哲學者フイヒテは自ら起て其書を抛ち、戰終りて再び此講座に見えんと叫びぬ。何ぞ其意氣の壯にして其精神の盛んなるや。我國の經濟學者の如き之に對して慚死して可なり。

戰爭と國民生活

戰爭は重大なり。されど之が爲めに國民生活を輕視するは斷じて不可なり。

我數十萬の同胞海を渉て遠く滿州の野に戰ふ。露國連敗屈せず、益々兵を增し、艦を加へて飽くまでも我を挫かんとす。加ふるに時は嚴冬に向て、大陸の風雪人の血管をも氷らしむ。我軍人の艱難辛苦、今后一層甚しかるべきなり。我國民たるもの滿腔の同情を濺ぎて之が後援をなすに吝なるべからず。然れども餘りに戰爭に熱中し全國民生活を度外視するが如きことあらば、よし其情は嘉すべしとするも、其理に暗きの甚しきを嘆せずんばあらざるなり。

戰爭は數十萬の軍人勵精之に當りつゝあり。他の四千七百萬の國民は宜しく彼等軍人の精神を以て、各々其業務に從ふべし。たゞ憂ひ、たゞ悲しみ、たゞ案じ、たゞ噂し、以て平常の業務の停滯を來すが如きは大國民たるものゝ恥辱とする所なり。時局の開始に當りて畏れ多くも陛下が教育者に向て給はれる令旨を按ずれば、ひとり教育の上のみならず、農にまれ、商にまれ、工にまれ、あらゆる國民生活の一日も忽にす

べからざるを感ぜずんばあらざるなり。只濫りに節約を叫び、縮少を唱へて、國民生産の法を妨止し、國民發展の道を沮碍し、以て百年の大患を貽すを思はざるが如き、予輩の痛惜する所なり。

革命と改良

狂暴なる革命の時代遙かに去りて、世は已に穩健なる改良の時代に入れり。此時に當りて濫りに革命の叫喚をなす。人間の好奇心茲に極れりといふべし。

根本已に腐朽すれば宜しく斧を揮うて其樹を截るべし。枝葉僅かに凋衰すれば宜しく水を與へて其樹を養ふべし。革命とは畢竟斧を揮うて截るなり。改良とは畢竟水を與へて養ふなり。今や我國内の情勢を察するに維新以來年を閲すること茲に三十八、萬般の事物略ぼ其緒につきて、將來の基礎已に確立したり。例へば根本大地に固く、幹木天空を凌ぐ大樹の如し。たゞ此大樹や無數の枝葉を有せり、中に或は其凋衰したるものあらん。我等は之に水を與へて培養を怠らず、枝葉亦爾々として榮えんことを勉むべし、これ我等の所謂穩健なる改良の實にして、現時我國の最も須要とする所なり。

蓋し革命を要せざる時代は之れ有り。されど改良を要せざるの時代は未だ之れあらざるなり。何となれば人間の理想は無窮にして、一歩理想に近けば理想も亦進むこと一歩、昨日の理想を實現せば、明日の理想又隨てあらはるゝこと、彼の己れの影法師を趁ふが如ければなり。これあるが爲めに世に進歩あり。人に生氣あり。若し現實に滿足し、追求すべき理想なきに至れば。印度、埃及の歷史は直ちに其土に再現すべし。

我等は決して前途に理想を失ふことなく、穩健なる改良の旗を揷して徐ろに前進し、日より日に、月より月に、年より年に改善の途に就かんことを希望す。彼の濫りに革命を唱ふるものゝ如き、世を毒し、人を害するに了らずんば幸なり。

（以上三件櫻陰）

名所的根性と日本人

血來山人

▲名所古跡と美的感化力▲他の半面▲亡國の基▲名所的根性とは何ぞ▲日本人は遊女か

○名所古跡と美的感化力

山は秀でたり、水は淸し土かんばしく、花美はしき

自然の美、これに添ふるに雄麗の建築、幽邃の城趾の如き人工になれりと雖も姿自ら天然のものに似たるを以つてし、染むるに歴史の色を以つてして、更に一段の威嚴と詩趣とを忍ばしむるもの、即ちこれ名所古跡にあらずや。

國として名所あらざるはなく、到るところとして古跡の存せざるは無し、吾人は實に之れに依つて常に幾多の教訓を享けつゝあり、日々に汚れ行く我精神を洗滌しつゝあり、美的賞翫心を養ひつゝあり、而してまた時としてこれに依つて天地の靈と感應し得る也、古人の英魂と道交し得る也、その不知不識の間に吾人が蒙るべき感化力の偉大なる、思ひ半ばに過ぐるものある也。

日本は全世界の中に於て、たしかに名所たるの資格を有せり、而して其美しき國は、其國に住める人民をして美ならしめたりとは、常に外人の口より聞ける處也、これ恐らくは客人のお世辭ならん、而も吾人は之を以つて全然無意味なるお世辭として解するを欲せず、少くとも或る事實のその中に存在するを認め、私に以つて誇りにせんことを思ふなり。

○他の半面

自然の美や歴史の美が人を感化する力は實にかくの如く大なるものあり、然れども他の半面に於て發達しつゝある現象は、亦決して侮るべからざる惡性質を有す、吾人は之を名けて名所的根性といふ。

京都に遊びたるものは、山や川や花や名所や古跡に美化されたる市民の優にやさしき雅致を認むるとともに、其浮華輕佻なる人情を思ふべく、奈良に行けるものは、その附近の住民が何となく古雅の風あれども、媚を賣ることの巧にして油斷のならぬところあるを見るべし、其他苟も名ある所にして多少人の入り込む場所には悉く、淫靡、浮華、遊怠、狡猾の風あるは旅行せる人の認識するところ也。

之を以つて即ち都會の惡風なりと云ふ勿れ、名所の性質ある所と都會とは似て非なる人情の差あり、都會の惡風は人間が進取活動に伴うて生ずれども、名所の如きにあつては靜止遊怠の中に起る、從つて都會の惡風は裸體にして掩ふはざれども、名所古跡のは外面菩薩内心夜叉的なり、即ち一は積極的にして一は消極的の差ある也、而もかくの如き差ありといふと雖も、名所には又都會と異れる一種說き難き惡性質あり、吾人は只之を名所的根性といふより外なき也。

かくて此名所的根性は發達し〳〵て、そが汾泌する毒汁は四方に侵潤し、その初め自然の美、歴史の美より感得したる人間の美性を滅殺し、更に反對に名所古跡の美をも穢さんとす。

○亡國の基

啻に自然の美や、歴史の威嚴を汚損するのみにあらず、更に重大なる事あり、何ぞや、亡國の基となること是也、何となれば名所的根性は前にも云へる如く消極的にして、事業の觀念從つて乏しければ也。

見よ、比較的名所古跡に乏しき大阪は商工業の發達彼の如く盛んなるものあるに、たとへ土地の利便と否らざるとの相違ありとはいへ、京都は則ち織物陶器等二三稍々注意すべきものある外、舊態のまゝ毫も進歩する處なく事業の發生亦見るべきものなきにあらずや。

其他名所古跡にして產物らしき產物あるは殆んど稀有の事にして、たま〳〵あれば實價以上法外の價格を貪るものゝみ。

○名所的根性とは何ぞ

畢竟名所的根性とは物に依賴するの心也、名所に依賴して我慾を充さんとする慾心也、恰も娘の美貌あるに任せて之を人の妾となし、これによりて徒食せんとする親に似たり。

即ち人の懐中を的にする也、自ら工夫するところは如何にして多く客人の金を絞らんかといふ事也、これその事業也、人情の浮薄なるは、今日と明日とその對手を異にすれば也、眞實といふ語は名所的根性の解せざる處、いふ事と行ふ事は皆悉く詐りにして、巧言令色、恰も遊女の如し、而して外來の客は彼等に置土產するに淫靡と華美の俗を以つてす、蓋し旅の恥はかき捨てとは當今紳士の好んで使用する勝手よき言葉にして、紳士は罪惡を犯さん爲めに名所に遊び、古跡を探る、旅行して罪惡を犯さゞるは損なりとの觀念を有すれば也。

○日本人は遊女か!?

近來外人の日本に來遊するもの年々數萬を以つて數ふ、而して之を待つべき設備は朝野共に殆んど遺憾なしといふ、これ日本をして世界に紹介するに最も都合よき法にして、之が爲すべき間接の利益は頗る大なりと云はざる可らず、而も當局者と之に與かる商人等は、其間接の利益を思はず、直接に彼等外人が落し行く金錢の多寡を勘定して以つて利益の大小を云ふ、從つて

其設備等も亦之にならふ、如此は實に帝國の威信に關するものにして、自己が美を賣つて利を貪り、人の懷中を的にする所謂名所的根性と何の撰ぶ處かある、日露戰爭終結の曉には、外人は爭つて我國に來遊すべし、吾人はこれ等の直接のあがり高を計算せずして、遠大なる帝國發展の大事業の爲めに外來人を待つべき設備をせんことを望むもの也。

嗚呼美しき蜻蛉洲、これに住める美はしき民は宜しく内外に論なく其名所的根性を捨てゝ、此神聖なる土を汚すことなく、益々光あらしめんことを努むべきにあらずや。

文藝時觀

新曲浦島に就ての所感

上田敏

文藝評論の種類許多ありと雖、注目す可き一製作を題材として、之に關する批評或は所感を述ぶるは、最も興味に富み且つ効果多き方法の一なる可し。「新曲浦島」が評壇に喧傳するも蓋し此所以あるがためならむ、余も亦先月發刊の「歌舞伎」誌上に、聊か短評めきたるものを述べたるが、玆には其際言ひ洩らしたる二三の所感を陳ぜむとす。

新曲に對する世評の多くは、唯其梗概を紹介するに止まり、稍精細の觀察を施す者と雖、主として詞章の美を稱揚するを常としたり。獨「時代思潮」に於ける姉崎氏の評論は他の批判と撰を異にしたれど、未完の說なれば、未だ氏が音樂の方面に涉りたる意見を窺ふに由なし。謂ふに著者が世評に待つ所あるは、實に此音樂上の方面に存す可く、世人も亦主として之に批判を加ふ可き筈なれど、樂劇其物に關する攷究未だ深からざる今日の狀態なれば、唯此新曲の實施に就て心密かに疑團を抱きつゝも、進て精細の考量を盡すに躊躇する者無きを保せず。素より短日月の研究を以て輕々しく論去す可き問題に非らざれど既に樂劇の創說を冀望する以上は、如何にして實行され得可き新曲を創設す可きかとの工夫は著者も世人も共に考案す可き所なる可し。

是に於て著者は其「新樂劇論」に於て豫約したる本

論を公にして、世人の實施に關する疑惑を釋き、更に細密なる指定を加へて、其曲の決して空想に非らざるを明らかにし、渾然たる一藝術品の完成を示す可く、世人も亦之に對して、特に音樂上の方面より是非の月旦を試むべきなり。されど目下の、狀況よりすれば樂劇に關する觀念未だ模糊として捕捉し難きこそ遺憾の點と思はるゝなれ。こは吾國樂の現狀が樂劇の基礎とし材料とする迄に發達したる位置に在らざるが爲めなり。故に余は刻下の急務としては、國樂に關して、更に正確なる智識を蓄積して、一方には樂器の進步を計り、他方には、之を將來の樂劇に應用する方法を案出す可きを奬說す。

田中理學博士が爾來孜々として、國樂を譜に寫取り延いては之に對位法の如きものを附加せむと試むるは、余が大に賛成する所なるが、將來の樂劇に對して眞正の基礎を築かむとする者、必らず先づ此一點に注目せざる可からず。「新曲浦島」に所謂長唄がゝり、一中がゝりは畧其何たるの概念を讀者に與ふれど、是等の旋律を綜合して、斬新なる一種の樂を作り、調和を缺かず、矛盾を避け、充分に存在の理由を有する樂曲

ける音階或は普通多く用ゐらるゝ旋律、或は演奏の時に於ける肉聲の使用法を研究して、異種の音曲を結合するに當り、何等の變化ありや、又或は多少の不都合無きか等を精察し、以て初めて一曲を成す可きものならむ。

且つ又著者の創設せむとする樂劇は在來の所作事以上の大規模の物なる可ければ、三絃を以て主樂器と定めたるは再考を要す可き點なり。三絃は素と室內樂に適したる樂器にして、其微妙なる美は、單に撥を以て彈奏する絃聲のみならず、かの幽かなる餘響の交も錯綜するものありて、初めて趣味を生ずるものなり。故に初めて三絃の彈奏を聽きたる外人等は、此樂器を以て一の大鼓の如き物ならむと推察する程なり。現に角堂々たる純雅の音、或は奔放不羈なる情熱の聲を表はして、多數の民衆を一時に壓倒する如き大音樂の主樂器と定むるには不適當の物ならむ。

既に三絃を以て主樂器と定めざる以上は、延いて復音の樂を創設するに何の躊躇かあらむ。又自然の結果として、男聲女聲の別も出で來りかくては終に長唄其他の國樂は其形式に甚しき變化を受け其彈奏法の如き

有の分子を基として、發展を試みむとする旨意にも背馳するに至らむ。これ日本畵の將來に於けると同樣なる一の雙角論に陷ゐるものなり。誰れか亂刀を揮て此亂麻を斷つものぞ。眷戀の情を脫して、歷山帝の故智を學び、ゴルディウスの䌙を切斷す可きなり。即ち一方に國樂の主成分を研究し分解して、成る可く國民族根本の樂旨、旋律、拍節若しくは諧調の萠芽とも云ふ可き物を闡明し之を彈奏吟詠するには、泰西の發達したる樂器或は發聲法に依りて、復雜なる今日の民心を滿足す可き新曲を案出す可きなり。而して此目的を貫徹せむと欲せば、上記田中博士が研究の如きものを遂行し又西樂を敎授する音樂學校が從來の無主義なる態度を一變し新藝術の大成を目的として、種々の有益なる事業を開始するを以て第一着の頁好手段とす。

去歲の文壇

孤村生

新らしき年は廻り來た。果して新らしい年は新らしい文字を孕み出すであらうか。新春の文學雜誌は新らしい意氣組て、何れも特に大飛躍を爲す可き事を宣言して居る、噫果して諸文學雜誌が云ふ通りの大飛躍を爲し得るであらうか。文學者は、去歲の文學者と尠しも變つて居らぬ。其の意氣込みに於ても研究的態度に於てもて゛て所要の作者の方に何等の變化も來たさない以上、雜誌の方で如何に飛躍しやうと思つても、掲載する作物は依然たるものであらう。其れとも大飛躍と云つて有望でありながら憐な作者に保護を與へて大作を書かせ樣とするなら知らぬこと。或は俗受け專問にして讀者を集め樣と謀るなら知らぬこと、大飛躍と云ふ事は今迄今春には年々歲々全じ樣に用ひらるゝ言葉て、云はゞ一つの附景氣である。例の如く何等見る可き事なくして終つて了はう。

新春の文壇に就ては未だ見る事が出來ないので何とも評し樣か無いが、僕は去歲の諸作家の働き振りに附て評して見やう。一言に評して去歲の文壇は大作とし、傑作として見る可き作物か無かつた歲である。勿論戰爭の影響があつたからと云ふ人があるが、戰爭は雜誌に影響かあつたにしても作家には何等の關係が無いと見て差閊えか無い。歐羅巴の文學歷史て見ると却て恁う云ふ際に傑作が產れて居る。歐羅巴と日本とは大分行き方が違ふかも知れないが、現今日本ての大作家として目せらるゝ人は、去歲も相應に其の作物を公にして居るのである。露伴氏の空うつ浪も、多くの矚目の中に引續き顯はれて居るが、事實を白狀すれば、僕等にはあき足らない。之が果して露伴氏の作の眞價値とすれば、氏は從來の名聲を維持するのは難かしからう。恁うは云ふもの丶讀んで居る中に何處やらに大家らしい處がある。之は僕等の頭腦が世評から知つた氏の面影が自分に映ずるからでは無いかと考へらるゝ。氏の人格や、學識は成程現今文學者中第一位に位して居る。幽玄な佛教の奧義を極めて世の所謂大悟徹底なるものなして居らるゝ氏が、作の中に折々其の香を匂はせる。あゝ之が恐らく吾人をして大家と感ぜしむる唯一の點であらう。遠慮せればならない言てはあるが、氏は作家として世に立つ可き人てなくて、大學の講座にある可き人だと思ふ。

柳浪氏や眉山氏や水蔭氏は殆んど何等の作を公にせなかつたと云つてもいゝ程である。新紙の上ては水蔭氏の名前は絶えず揭げられて居る。二六紙上に公にせられて居る日每の短篇は、氏の名聲を落しこそすれ、上げる氣遣ひは無い。從來氏が獨特よと思はれた清新と云はうか清い美しい感情に觸れた作品は、去歳中を通して見る事が出來なかつた。匿名で公にして居る作品も、結構は蕪雜だし、感情は漸々粗雜になつて行く傾向が見えるし、何となく氏の末路が見えて行く樣な氣がする。勇氣のある作家が何故恁うなるてあらう。立入つた話てあるが。生活と云ふ事に追はれると云ふのが一原因てあらうが、水蔭氏には特に作家の眞心と云ふものが欠けて居る樣な氣がする。未だ四拾の齡にも達せぬ此の作家、世評は隨分酷に氏を遇するが、僕は然うでないと思ふ。氏にして若し陣立を少し違へて、靜に作する樣にしたならば、將來は恐ろしい作家の一人ともなられやう、

眉山氏は沈默、柳浪氏も沈默、硯友社の中ての話では眉山氏はいつも作の趣向なるものを多く持つて居て、逢つて話す時は、順順に語たり出して、朋友の作家をして、其の創作心の旺盛なるに驚かしむるのだが、偖その話した作は些つとも世に公にせられず、氏の胸から胸へ葬むられて了ふ。所詮は氏の幻想に終つて了ふ。氏の傑作の一なるかの暗潮も、非常なる大趣向だつたが、世に公にせられたのはあれ丈けだつた。恐らく氏は去歳幻想にのみ耽けつて居られたので本年になつて働くつもりなのだらう。柳浪氏は眉山氏と正反對て、昔から一向趣向のない人て、人の話を聞くと直ぐ其れを小說に組立てるのである。此の點は小栗風葉君と同等である。去歳の沈默は氏の心を動かす程の談話を聞き得なかつた行爲てあらうか。敢て冷評するのぢやない。創作と云ふ事に就いて深く考へて、其の作を公にして頂きたい。

部を離れて小田原の海岸に居を占めながらも小杉天外氏は去歳の文壇を賑はした唯一の人である。其の作は絶えず種々の文學雜誌に掲載せられて、若い評者をして絶えず評論の花を咲かさしめた、之れに就いて見ても、氏は現今の文壇の花形役者である、後半期になつて文藝倶樂部に顯はした、大友家、新小說の相續人など、隨分世評の離があつたが、他の作家に見る可きものが無いので氏の名聲を維持せしむる佳作となつて了つた。然し僕は敢て云ふ　氏は畫を描いて居る。あの自然派に屬した畫家が、少しも自己の意を用ひずに、目に觸れたまゝに山、河、森と見て色彩を施す、氏も其れを追つて居る、て讀み果てゝ了ふと、新聞の三面記事を讀んだ時の心持ちと少しも變らぬ。あゝ藝術だなアと思はする甘味は、何としても氏の作品から感得する事が出來ない。自分は何も自然派を罵るのぢやない。云ひたいのは眼に訴へる畫を心に訴へる小說とは同じ自然派と云ひ條描寫法が違ふ、天外君の自然の見方は間違つて居ると思ふ。あんな薄つぺらな自然派の見方が何處の國へ往つてある。若し氏が此の點に氣が附いたら、大作家となられるのだ。いくら長篇を作しても、人生を見る見方が此の儘てあつたなら、氏の價値は依然たるものてあらう、

鏡花氏の去歳の歴史は何等の傑作無しと云ふよりは、惡作のみを公にしたと云ふ方が適當であらう、僕は泉君に就いて此の雜誌で二度論じた。氏の想像力が恰度高田實が轍下讓二をやつて藝の限底が見えた樣に、氏の想像力の限も見えた樣な氣がした。氏は今不思議な江戸ッ子主義と云ふものに捕へられて居る。之は氏が草双紙を讀み過ぎ、其の變化ある色彩に、自己の敏捷な神經を餘り多く刺激さし、餘り多く然る幻想を描き過ぎた結果ではなからうか。僕をして云はしむれば惜可し才子進路を誤まれり矣て、氏が若しあの感情的な熙衆狂言的の方に進んだなら、評家をし

て啞然たらしむ今日の樣な事は無かつたらう。此の儘にして其の惡傾向を續けて往つたら、前途は深い陷穴だ。風流線も續けて讀んだが成程局部にはい丶所があるが、全然草双子的の陳腐な思想に埋まつて居る。小栗風葉君も去歲は不名譽な歷史を掊へた。創作は殆ど絕無と云つてい丶、飜案にのみ其の精氣を費やした。春伊井一座で演せられた作を世間で大層に持囃した人もあつたが、年末になつて公にせられた登張竹風君の寶鬩奴を讀んだなら思ひ半ばに過ぎたであらう。只文藝俱樂部の臨時增刊の花吹雪の卷頭に其の艷麗な筆致を猶依然として有した事を示したのみである。

田山花袋子は去歲は半分は戰地で暮らし從つて何等の作に接せず。德田秋聲子、柳川春葉氏、中村春雨氏、生田葵山氏、田口掬汀氏、等格別な作に接しないと云つてい丶、田口掬汀氏の女夫浪は版を重ねて世評も少しは立つたが、掬汀氏自身が若し此の作を自己の眞心から傑作と任じて居るか奈何だか、若し傑作と任じて居るならば、氏の前途は憐む可きものである。天外氏に比して一層人生の見方足らず、人物とても類性のみ描いて居る、殆ど個性が描かれて居ぬ、今から六七年も前だつたなら、或は立派な作と稱せられたかも知れない。所々間の抜けた蕪雜な壯士演劇の樣な所のあるのは注意して貰いたい。德田君は姓格を描くに妙を得て居る、春葉氏は平凡な材の中から詩材を見出して居る。葵山君は感情的で力めて人生の或物を解釋爲樣と爲懸つて居る。其の他三島霜川君。米光關月君、洒汀君。小川煙村君。とりぐ\の特色を持つて進行して居る、未來の文豪は必ず此の中から出る事であらう。

終りに云ひたいのは御伽話の作者巖谷小波氏の事業である。俺まずたゆまず拾年一日の如く其の事業に忠實にして、御伽芝居を起し、又御伽會を起して去歲も筆に辨舌に働いて居る。僕は其の精力に感心して居る。去識の動きとても目覺ざましいものであつた。氏の位置は他の文學者の地位と放れ、隆として動かす可からざるものとなつて居る。

文士初對面錄（その二）

天　中　天

▲幸田露伴先生（の二）　快辯流る丶如しにはあらで、惇々として說くといふ、何處までも沈重な、大家の風はありながら、さりとて勿體ぶりし樣子も見えず、たゞ客觀的に大家と胸に響くのである、先生の癖は兩の手に堅く拳を拵へて、それを膝の上に押し付けつ丶、一口話しては下を向いて莞爾と笑まれることである、序に云ふ、先生歲は三十八九

その有益にして趣味多き談話は玆には云はれど、曾て大阪の某芝居にて五重塔を無斷のま丶演じたりしは可かつたが、最後の幕にのッそりと川越の源太とか捧引提げての擲り合ひには、先生少からず不感心の樣子であつた

障子に隔てられて、庭の樣子は見えないけれど、小鳥の來啼くがチリ丶く\、流石は詩的の向島、こ丶に當代の大詩人と膝突き合はして語らふことの、如何に詩的であつたかは容易に想像し得られるであらう、然り、全く自分はさう感じた、あはれ先生をして圓頭長袖の僧侶たらしめたならと、弗つと考へ及んだのも此時、天晴れ五重塔の朗圓上人にも立優れた大德が出來るであらう、幽玄微妙の文字の湧き出るのも決して其風采と不釣合てはないのである

（殘念乍ら餘白がもうない、次には他家を最少し皮肉に……）

漫評

當世美術家氣質

八面生

川端玉章

美術家での金持といへば、誰れもこの人を第一に推す程で、無慮十數萬は確かだとは、この社會での噂。例の健筆で書いては溜め〳〵、溜まつた金はうまく運轉して、利に利を生み、それで上方物とて無駄な事には一厘一錢も使ふといふこと、嘗てないのだから、畫家として分相應の財産を積んで、貧乏畫家の羨望の目標となるのも無理はない。歳の暮れになると、新年に因んだ「日の出」とか「松に鶴」といふやうなお目出度畫題で小幅を注文する者が多いが、先生繪絹を山の如く積重ねて、一枚々々機械的に同じ筆法で墨をなすくつては乾かし、それが終へると、今度は赤と青とか順々にぬつて行く。これで學校出勤前一二時間に四五十圓の仕事は容易であるさうだ。大幅とか屏風とかになると、かう手取早くは行かぬから、少し報酬が多くともいやだといつてゐる。日本で一二といはれる先生でありながら、丸で提灯屋と同じだ。興に乘つて書くなどはあり得べからざる事。去年の夏も米國の博覽會へ出掛る筈であつたが、内閣へ出頭して旅行免狀を貰うとした所、この時局に亞米利加などへ行くよりも、其の費用を軍事費に献金した方がよからうといはれ、先生大に驚き、外國で一儲けの計畫も破れ、不承々々三百圓を献金したさうであるが、先生生れて以來の大金の寄附で、嘸かし清水の塔から後ろ飛した氣がしたであらうとの噂。しかし先生が繪を畫くのは、單に金がほしい〳〵と思ふばかりでなく、畫をかくこと其自身が面白くて、外に道樂がないからである。羨ましい性質だこれで只畫くばかりでなく、立派な製作をしたいといふ考があつて、濫作の弊がなく、も少し金錢に寡慾ならば、眞に大家として耻づかしくないのだが惜しいことだ。

鈴木華村

兎角浮世は色と酒とは昔が今に至るまで。ついぞ變はらぬ大眞理にて、美術家もこの境涯を脱せぬもの。わけて豪の者のこの社界には稀ならぬが、大家株ではこの人など、天晴一方の旗頭。酒の氣韻とか白粉の色彩がなくては一幅の繪も出來上らず、艶つぽい有聲の姿に接して始めて無聲の詩が書けると定めて、極度のずぼら、虫のいゝ天道様もそう／＼勝手な眞似はさせず、歳と共に體内を腐蝕して、今では好なき酒も飲めず品行も方正ならざるを得ぬ餘儀ない次第となつて、昔の夢を悔悟してゐるとの事、その代り家計稍々豊かになりて、妻君大喜びだそうな。其の道には華村先生にも負けを取らぬ富岡永洗先生も重患に惱めりといふ靑年。畫家たるもの前車の覆轍愼むべきことにして。華村翁廣業先生を評して曰はく「あれも今に歳を取るとおれのやうになるのだ」

寺崎廣業

美術院派で最も好運兒の一人である。この人の社會に歡迎される第一因は、極めて利口に立廻つて、文士にでも學者にでも貴族にでも、力士にでも役者にでもあらゆる方面に立交つて評判を造ることにある。酒の勢でなぐり書きの弊は、勉強すれば發表の餘地ある天才を委縮させて今では最早進歩の絶頂たる趣がある。人氣取りの觀戰行もさしての功なく、戰爭畫も甚だ拙劣。伏見宮殿下のお供をしての渡米の企ても蹉跌し、年末には債鬼に責められて、大煩悶の態。

小堀鞆音

畫師の中にもこんな邊幅を飾らぬ人は少からう。金があれば酒を飲むか甲冑調度など故實に必要な者を買つて家に擔石の貯なき有様。玄關の汚ないこと室内の取ちらせること、土佐派の老大家の住家とは思へぬ位。しかしこの人は比較的名利に淡泊で、根性の卑くない方である。

言ひたい事

美中天

▲近來匿名にて人物や作者を彼是批評するものが多いが、膽玉の小さいこと夥しい、何だつて堂々と名乘りを揚げて花々しい武者振りを示さないのぢや、お叱りを蒙るのが怖いなら文壇なんぞへ出陣せぬが可い、それだけの自信がないて、人物月旦だ、批評だもスサマジい、無禮なことぢや

▲坪内博士の浦島に對してもぢや、酷てはコツ／＼是非する者も少くな

いが、扨てと云へば後しざりばかり、心にもないお世辭を申上げて、さも怖さうにハラ〱して居る、たま〱柄にもない浦島批評と出かけても、今にも息の根を止められはしないかと、それは〱見つともない身振りをして、當り障りのない事を云ふ、これが今の批評家、桂月君など此類ではないか、寧つそ、私には解りませんと云つて了へ

▲此文字を此處へ使つては可かん、これは文法に違ふ、この古事は痴氣筋ぢや、とは桂月君の批評ぢやが、文章の支離滅裂になつて居る今日の我國には此種の批難は最も必要な事で、我々青年を指導する點少でない、これは桂月君として最も適役ぢや。

▲有美先生の流行時代は過ぎて、今じ秋田出身の銀月先生が全盛時代、兩者何處やら似たと嫌味たつぷり、垢ぬけのせぬ、山師らしいところ、矢つ張りそのまゝ、美的東京、詩的東京も最早聞き倦きた、此は愚か、花も今一時、折角風に當らぬやう願ひたい、但し情的日本史と海賊史とは勿々今日企て及ぶ者は少い、これで例の嫌味と山師らしい處を抜いたら立派なものぢや、私は銀月をして少し禪學をやらせたい、タケさんに問ふ、何うぢやらう。

▲緒方流水氏が創作を廢したのと、二葉亭四迷氏が文壇を退いたのは二氏の爲めに惜しむべしぢや、流水氏は批評家たるの資格はない、チョイ〱天才的の筆鋒のある處、寧しろ作家として成功する方ぢや、又氏の書いたものには時によりて非常に巧拙の段がある、序ぢやが流水氏私を捕へて、君の說は二ツとも出來お知れぬ、何う云ふのぢやと云ふ、出來もヘチマも私は知らぬ、是は杵傑ぢや、權兵衛八助といふが如しと、何うても可いが答へて置く。

▲名聲を墜しもせず、揚げもせず、依然として先輩を以つて目されて居るのは柳浪氏、其作は平々凡々ぢやが、人をして讀ましむる力のあるのは、どうしても小說家の資格が除かれない、作中智識の含まれて居ないところ、眞の藝術家に近い、近頃見るべきものがないが、少し賑はせて貰ひませう。

▲云ひたい事は澤山あるが、お早々だから又次に讓らう、いろ〱と惡口をたゝいて嘸かし御腹立の方もあらう、けれども匿名ではない、左樣なら。

如是我聞

窮鼬子

◉古歌に曰く『年月のくれぬと何かをしみけむ春にしあれば春ぞたのしき』歲の暮に臨みては嗚呼又暮は來れりと嘆ずるが多かり、去れども一年は長きものに非ず、否人生も亦長きものに非ず、長からぬ人生に爲すべき事業は多し、歲と與に大に改まらんと云ひ、一年の計は正月に在りと云へりし如く、此の一陽來復と與に吾人は讀者の健康を祝福し、且つ此の短き人生に少しにても出來得るべきだけの善事を勉め勵まんとを警告せんと欲するなり。

◉或人曰く、議會は年々國民の注意を引かずなれり、議員の良心は年々痲痺し去れり、殊に今次の議會の若き單調平凡なる未だ曾てあらざる處なり、如是んば議

會なきに若かざる也、見よ政府と政黨の交渉と云へる如き奇怪の現象何れの議會史にあるや、政府若し鞏固なる主張あらば正々堂々として其主張を一貫するに勗むべし、議院若し協賛せざれば之に停會を命じて考慮せしむべし、尙聽かずんば解散を命じて汎く是非を正直なる民論に質すべし、議院は何故に交渉委員なるものを選んで政府の內請に應ぜしめたるや、交渉委員なるもの有て政府と協定するを得ば交渉委員以外の多數議員は無用の長物に非ずや、世若し非立憲的動作ありと云へば今次の議會に於る政府政黨の動作ほど非立憲的なるもの非ざるべし、其言を聞けば曰く外無前の國難なり、內豈に漫りに爭鬩すべけんやと、笑ふ可きの甚しきもの也、無前の國難本より深憂すべき也、然れども名を國難に假りて憲法に違背するの行動を爲すも可也との條理焉に在るや、旣に斯る惡例を作れり、我が立憲政治の前途を思へば眞とに痛嘆に禁へざる也と。

◉今次の議會に於て種々の法案出でたる中に賄賂運動の起りしもの三あり、鹽專賣法案なり、砂糖課稅問題なり、織物稅法案なり、之等の業務に關係ある問屋組合等は多額の金員を醵出し之を散じて良心の痴鈍なる議員等に喰はしめ以て己に利益ある法案を作成せしめんと勉めたり、是に於てか鹽毒議員、糖毒議員等の新名稱は作られたり、無學無文にして名譽を重んぜざる百姓議員等が收賄したりとするも、人は只彼等の蒙昧にして卑吝なるを憐みて止まんかなれども、世に政治家顏して名譽を重んずるの士にして尙且つ鹽毒糖毒に罹れりと傳へらるゝに至ては沙汰の限りと云ふ可し、政友會の栗原亮一、櫻井駿など云へる人々に此の醜聞ありとは公然の秘密なりと云ふ、吾人は敢て之を信ぜざらんと欲するも世人は固信せるに似たり。

◉今次の議院開會に先ち首相桂太郎氏は政友、進歩兩黨の領袖を招き、晩餐會の席上政府の意見を吐露し、議院に於て圓滿に議了せんとを懇請したり、踵て復た裾分けの意にて中立派、無所屬の議員をも招待して懇談する處ありたるに招待の榮を得し中立派の議員等は、之れ實に殘飯頂戴なりとて自から嘲りたり、流石に島田三郎、尾崎行雄の二氏は招きに應ぜず、以て品格を保てり

◉鹽專賣法案附則第四十四條に『本法施行の際販賣の目的を以て所有し又處持する鹽に付ては百斤に付金一圓五十錢の割合に依り鹽稅を納むべし』とあるに豫算

委員會に於て委員の一人長谷場純孝は威丈け高に政府委員を罵りて曰く、「處有し又は處持す」とは文章の重復も甚しからずや、無學サ加減驚くの外なし、此の人曾ては內務省勅任參事官たりしとあり、今は政友會總務委員として黨內に勢力あるの人也とは愈々以て驚く可きに非ずや、動產不動產の區別を質問せし議員あり、樺太島は日本の領地なりやと尋ねし議員ありたれども彼等は田舍の山出しにて深く尤むるに足らず、却て其無邪氣にして愛嬌あるを可憐とすべし、長谷場の如きに至ては議院の大恥辱なり。

◉島田三郎氏は潔癖あり、偏狹なり、器量小なり、然れども操守堅く、品格高く、學深く識高、淸節梅花の如き、蓋し議院中の第一品、議院政治家として殆ど完人に庶幾し、氏の如き代議士の議院に在るは議院の名譽として尊重すべく、復た正しき國論を代表する好個の人物として愛敬すべき也。

◉幸德秋水盛んに非戰論を主張し、筆鋒の迸發する處、論議往々にして、奇矯に涉り、遂に秩序を紊亂すとの法文に問はれ、今其の審問中に在り、秋水歲晚書懷に曰く、

啾々風雪夕、百年與我違、文章頻買禍、意氣未救饑、淺水遊魚躍、寒林倦鳥歸、山妻聊解事、沽酒典春衣、

鬼面魔語

酔美生

▲日本の社會主義者は、其說を唱導するに於て、確かに其時期を失したり。日本の政府當局者は、其說を鎭壓するに於て、確かに其所置を誤りたり。其時期を失したるが爲めに、今少し勢力あるべき此主義をして挫折せしめ、其所置を誤りたるが爲めに、今少し靜穩なるべき此主義をして喧噪せしめたり。起さんとするもの却て倒れしめ、殺さんとするもの却て生かす。人生の一奇といふべし。

▲すべて人にヒントを與へ得るものは、必ず常人より大なる所あり。

▲女に戀せられんと思はゞ、半ばは其女を戀したるが如く、半ばは戀せざるが如く裝ふべし。餘りに熱愛したるを示せば、相手はつけ上りて却て安く直踏(ねぶみ)し、其戀成就せず僅かに其情の半ばをあらはせば、相手は想像を逞くして其熱度次第に加はり、暫しの間にこれはく〵と驚かるゝ程狂ひ遊ばすものぞ。とは或粹なお方の說なり。

▲大行は細謹を顧みずとは所謂東洋的豪傑の套語(セットー)なり。されど世にはいふに足らざる一小些事の爲めに終世の大事を隳すこと決して其例に乏しからず。パスカルは曰く、クレオパトラの鼻にして稍々長きか又は短かりせば世界歷史の局面必ずや一變せしならんと。又那翁のウオートルローに敗れしは、其日雨降りて砲車の運轉自在ならざりしによる。故にユーゴーは叙して曰く、今宵一滴の雨世界歷史を一轉せりと。鼻の長短、雨の一滴尙世界歷史を變轉せしむるに足る。細謹の顧みざるべからざるや

論なし。

▲野口米太郎氏は優雅温藉なる詩人風の人ならんと想像せしに、其談話を聞けば「日本人といふ奴」「米國人といふ奴」等の如き職人風の言葉使ひ甚だ多きには思はずも呆然、漫りに見ぬ人を想像するものにあらざるを感ずること切なり。

▲音樂に於て最も大切なるは間といふことなり。間の悪しき三味線などは撥使ひ如何に巧みに、其音色如何に冴えたるも、到底聞くに堪へず。彼の間拔といひ、間違ひといひ、のろまといひ、とんまといふ恐らくは此間といふことより起りし名稱ならんか。

▲日本人が海外に出てゝ最も恥かしく感ずるは、其軀格の小にして見すぼらしきことなりとは殆んどあらゆる洋行者の語る所なり。穂積陳重博士曰く、我等が外國人と談話すれば、何時も申上る氣味ありと。警句といふべし。

▲新小説載する所の島崎藤村氏の「津輕海峽」は流石に詩人の筆なり。よく自然の景象を寫して思はずも恍惚たらしめ、よく人情の幾微に觸れて思はずも落涙せしむ。たゞ僅々十數頁の短篇に於て或は露艦襲來の實景を描き、(噂を書したるはよし)或は偸掬見取調の現狀を寫すが如き、悲哀沈靜なるべき此作には波瀾多きに過ぎて却てふさはしからぬ心地す。又華嚴瀧をかつぎたるも如何のものにや。

▲志賀矧川氏の「悲劇一齣、喜劇一齣」の下(國民新聞)は日露戰爭中の最大快事、否な人類が産み出したる最大奇觀の記錄なり。最も悲慘にして最も醜悪なる戰場に於て、最も壯快にして最も善美なる此會談あり、暗黑なる大空に輝く、唯一つの明星にも譬ひつべし。兩敵國の軍人盃を交はして互に敵の勇武を賞し、又攻擊を論じては互に大笑し、或は日光の景況を問ひて戰後の遊觀を約し、又は兩國併力せば世界を二分すべきを談ずる等眞に想像にも從さる快絶の事實なり。我は之を讀みて露人は我永久の敵にあらざるべきを明かにしたり。

▲攝津大椽上京して連日歌舞伎座の寶切を掲ぐ。人氣とは驚くべきものかな。予は其最も得意なりといはるる十種香を聞き、七十の老翁がよくも斯く若々しき美音を出すものよと思へり。されど予の感じたるは只之れのみ。大椽は聲を以て情を作らんとするの人、未だ情を以て聲を出さんとする人にあらざるなり。之を以てよく人物の眞情を語りて聽客の精靈を動かすが如きは彼のよくする所にあらず。彼の老齡に達して、斯道の名譽を一身に擔ひ、而かも東京に於てはお名殘なるべき此興行に於て未だ情語をする能はず、聲と節とを以て俗受を博しつゝある、藝術の神聖を解するものゝ一種の恥辱とする所なるべし。

▲名人となれば人氣がなくなると眞理といふべし。

▲我が東京に於ける生駒太夫は其年齡殆んど攝津大椽に等し。而して其藝は神に入つて賤爾沈靜、各個人物の語り分け眞に迫して、よく聽客の肺肝を貫き、聲迫り、情極まるの處に至れば涙頬りに落ちて顔を擡ぐること能はず、確かに斯道の名人なり。而して寄席に出れば聽客僅かに五十にも滿たず、常に場末の席にありて眞の聽人にのみ知られたりしに、其れさへも今は休みて暫く其神聲に接する能はず、斯界の一大恨事といふべし。而して未だ藝の三昧に入らざる攝津大椽の如き歌舞伎座狹しと威張りつゝあり。世俗の好尚、時代の趣味眞に人をして哭せしむ。

▲日本の演劇に於てチヨボの必要なる所以は坪内博士の浦島凡例第四によつて簡潔に記せられたり。「曲の白に異なる點は概して激切なる情感を表する點にあり、然らざれば口に言ふ能はざる又は言ふまじき筈の心中の苦悶、悲哀、默想等を暗示す場合又は深く感じて景を賞し、物を詠じ、事を敍する場合などに用ふ」と。博士は一般の曲について立言せられたるも、移して以てチヨボ有用論となすを得べし。芝翫がチヨボ有害論を唱ひたりと噂あるが如き其愚到底及ぶべからさるを思ふ。

社會

藝妓屋の家庭

樋口二葉

家庭の一斑

藝妓屋の家庭と云つた處て、それが必ず結構なものてないは、既に營業そのものから想像しても知れる。けれども其想像も普通の腦力を以て、彼等の家庭を完全に斷定することは餘程困難てあらうと思ふ。由來彼等の營業には表裏があつて、菫花咲く野邊に長閑な春風の吹いてゐるやうな、光景の裏には、草木黄落して秋風颯々たる趣きが、常に延喜棚の燈明から燻る油煙に交つて寂しう棚引て居る。語を換へて言へば、年中お竈ぐるみてぞべら〳〵として、陽氣に三味線でも彈いてゐると、如何にも樂しさうて、西方淨土まで往ずとも安樂世界は彼等の境遇にあるかの如くなれど、機關の巖洞返しは焦熱地獄の苦を脊負て立ち、絶えず火の車は鼠鳴きする丁子吉丁子を挽き潰し、日懸の高利貸に親しみあるのが多いのてある。

然れどもさ、何營業にても一から六まてある如く、藝妓家とても同じく有福なのもある。また貧乏神と親類交際して、何時もピイピイ風車のもある。一概には云はれぬけれど、多くは千兩箱積んて御神燈吊下てるのはない。先づ團栗の丈比で五一三六、更衣の期節になると大まごつきが普通て、今時のお客に中々藝妓の支度までをウン宜しいて鼻毛を延す、良くいへば通人、惡くいへば鼻の下の二本棒は容易に捕獲されるものでないのだ。

て、あるから此處で御披露する彼等の家庭は普通一般に渡つた、尤も多い部分を重もに解剖するのてある。先ア熟讀して後實地に探見されると、一層この記事が光彩を放つのであるが、世の中にそんな閑人もあるまいし、また手前味噌の甘いか辛いを味ふだけの價値もあるまいから、社會の一部分にこんな家庭もあると云ふことだけを、認めて貰へばそれて澤山だ。

藝妓屋と藝妓との關係

家庭を說くには、藝妓屋なるもの、即ち抱主と、藝妓間の關係より入らざれば、詳細の有樣を知るに難からうと思ふ。故にその關係を簡單に述べやう。けれども秘密に屬する鑰までを打明けると、餘りに卑猥なる文字の競進會となる虞れがあるから、其邊は總て淺黃幕の内に籠めて置いて、讀て厭氣の起らざる以内に筆を擱くが却つて興があるであらう。

新橋でゝも藝妓屋を開くには、料理店、待合、遊船宿、貸席、藝妓を五業組としてあるので、先づこの五業組合に加入しなければならぬ。組合に入るには看板料と稱して百圓を組合に出し、而して稼業をするのである。他の場所に於ても此の制定はある、近來大分組合の規約が崩れては來たけれども、正當に營業するには矢張この規約を踏むが本街道で、拔路次を潜つて營業するものも無いではないが、畢竟それ等は一時の瞞着手段に依つて居るのである。

藝妓屋と名乘りて看板を擧げるからは、家の娘一人位でコツンリ稼業をしても立往くものでなく、何うしても抱妓を置く必要に迫られる。抱妓には切半、七三、丸抱などの名稱あり、切半とは抱へた藝妓の稼ぎ高を抱主と切半するを云ひ。七三とは同じく抱主が七分を取り抱妓が三分をとる約束になり。丸抱とは藝妓の稼ぎしものは祝儀も揚代も全部を抱主が收めるのである。而して藝妓を抱へるには、中々嚴重なもので公證役場で公正證書の契約を結ぶのである。その證書の文例を擧ぐれば、

第何百何拾號

藝妓營業に關する契約書

日本帝國司法大臣の認可を受け設置したる本職役場に於て何某(抱主)及び何某(藝妓となる者)父何某保證人何某は何某の立合を以て左の契約を締結す

第一條　何某(藝妓)何某(其父)は今回必要の爲め連帶し金何百何十圓を何某(抱主)より借受けたるに付き其返濟方法は何某(藝妓)が明治何年何月何日より明治何年何月何日迄の三年間(或は五年間)藝妓と成り何某(抱主)方に寄住して同營業を爲し其收入を以て漸次償却すべし

第二條　何某(抱主)は何某(藝妓)が營業中に要する同人が負擔を支辨すべし

第三條　何某(藝妓)父何某保證人何某が何某(抱主)に對する金錢上の義務は總て同人と連帶責任を以て之れを盡すべきものとす

第四條　何某(藝妓)父何某保證人何某は第五條第三項の時期到來するも借受金を辨濟せざるときは直に強制執行を受くべし

第五條　何某(藝妓)は何某(抱主)に對し左の事項を履行すべし

第一　契約期間は總て指揮に從ひ業務に服する事

第二　契約期間疾病其他故障の爲め休業したる時は期間後も此契約と同一の條件を以て其時日を補充する事

第三　契約解除を申込ときは第一條の借受金に一年一割五分の割合の利息を附し元金を即時皆濟すべきは勿論外に食料その他の費用として一ヶ月金七圓宛の割合にて其時迄の費用を直に支拂ふべし

第四　承諾を得ずして家出し三日以上に及びたる時は契約解除を申込たるものとし本條第三項の要求を受くるも異議を唱へざる事

第五　營業上の收得金即ち玉代纒頭は自己が何某(抱主)方に寄居し營業を爲す報酬として(此間藝妓屋と藝妓との約束に成る割合金額を挿入す)何某(抱主)の所得とし殘り……を何某(藝妓)の收得とし此收得金を以て第一條の借受金を漸次返濟する事

右關係人へ讀聞せたる處一同相違なき事を認め左に署名捺印す

以下關係人一同の宿所族籍姓名印

右當事者の陳述に據り本證書を作成したる事を確證する爲め左に署名捺印するもの也

明治何年何月何日公證人何某役場に於て公證人何某印

斯くの如くにして抱妓を置き、之れが披露をするには、衣服その他の費用に三百圓以上を要する。併し藝妓と抱主との割合によつて、出金にも亦等差あり、藝妓の披露する場所によつて、其費用にも多少はある。

●●●●●●藝妓屋の主權者

主權者は重に女房にあつて亭主は置物に均し（女主人ならば無論だ）主權者の權威と云へば、それは驚くばかりで、到底普通の家庭に於ける主人などの遠く及ぶ處でない。それ等の主權者となるものは、何れ數十年斯業で練磨の功を積み、所謂筋金のはひつた手腕のあるにあらねば、迚も抱妓を制御して行くことは出來ぬ。

で、其逆鱗に觸れざらんことを、戰々兢々として一家族が御機嫌をとるのである。が、其尊敬が主權者をしてます〳〵我儘氣儘を敢てせしめ、先づ一例を擧げれば朝も十時ごろまでは、褥中にあつて華胥の國に遊び、亭主が起きて臺所の指揮を爲し、お爨婢どんと共に朝餉の支度をする。日三竿はおろかのこと、五竿にも六竿にもなつて、先づ褥中に煙草を吹かすこと數十服、漸く起き出でゝ食事をするや、昨夜の收入等を胸算用して、抱妓の中で流行者にはチヤホヤの世辭を振蒔き、お茶挽には横目の馳走を一つ浴びせかけて、壁訴訟などをする。また雛妓のある家ならば、これにガミ〳〵と當りて愈々萎縮させ。亭主を亭主とは思はぬ如き振舞など往々あり、只だ火鉢の傍に横坐りして、煙草スパ〳〵俳優の噂さ藝人の品定め、我家の抱妓の手腕の功拙から、客の善惡、客に對する懸引の魂膽等、自己の經驗と浮氣とを交捏て教授する光景、實に云ふべからざる奇あり妙ありで、殆んど特別智識を稟け居

るかの威に打れざるを得ざるものがある。

而して其尊大なること、横柄なること、天晴女王のそれの如き特種の權力をふるひ。同業者間に對する挨拶のごときは、極めて簡易で、しかもお座なりで輕薄追從の所謂お世辭笑ひを以ての丸め合に過ぎないのであるが、同業以外の者に對しては、其の冷々淡々たること、寒中の冷水のごとく、碌々挨拶だにせざるは亦奇觀と謂はざるを得ざるの趣きがある。其の代り自己の利益となる事あれば、それは／＼掌の裏を返すやうに喋々しさ、また以て他に類を求むるを得ざるものがある。

●●●●●
藝妓の平生

藝妓とても。自前と抱妓との差別なく、一種特別なる藝妓屋の家庭の水に馴染しことであるから、殆んど小主婦の光景があつて、客席にあつて艶語縱横、媚を呈するに反し、互ひの確執は女子のことゝて免かれぬとしても、支那人的自尊の風が俗を爲し、人三化七的のものでも自己の面影が鏡面に映ずるを知らぬものゝ如く、小町も楊貴妃も何んのその、氣位凄しく、彼等が客席以外で素人に對する態度は、ツン／＼然たること野中の一本杉の如く、隣り近所の者たりとも與突合しても自から會釋するは稀れて、他より會釋されても恰も自己の三味線を運搬する箱屋と云へる意氣地なき男性に接すると異なる點なく、鼻の先きでフヽンと拔ひ澄すさまの面憎さ。何う考へてもこの社會は一種の社會で尋常人を以て律することは出來ぬ、能く人の云ふには「あの家の奧樣は藝妓の成りあがりだから。いやアにツンケンして材木屋の鳶だ」と。その平生が斯くの如き有樣の習慣に泥み來たれば、一朝その地位を得るや、第二の天性とも沁みこむでゐる自尊の風俗が自然にあらはれ、他人に對して輕侮の意志あるにあらずしても、知らず識らず高い／＼を極めるのではあるまいかと、われは近頃藝妓より成あがつた細君に對して、大いなる憐愍の情を懷いて居るのだ。

而してその性行の如何などに就ては、改めて云ふまでもないことで、單に營業柄の一語を以て盡くすに足ると思ふ。その藝妓屋の家庭にあつて、海千山千に老熟した教師の教授を受け、卒業證書を得たものだから……。

それから之れは何れの家にでもある譯でないが、或る藝妓屋の如きは、前夜お茶挽くものがあれば、其藝

妓は翌朝早く起され、お爨婢どんと同じく臺所を働かせられ、甚だしきに至つては、主婦の二布まで洗濯させられる。苟且にも藝妓と云はれて、そべら〳〵と平生絹物を纏ふ身で、斯くまでに虐使さるゝが辛さに、如何なる客にても媚を呈し、朋輩よりの輕蔑と抱主の御機嫌を損ぜざらむと努めるやうになる。尤とも本場所ならぬ土地の藝妓には、素人にも劣る綿衣の垢染たのを着て、首筋に寢白粉を其儘尻端折りで働くものもあるが、これ等は藝妓といふ名稱の下に藝は賣らぬ、否、賣物にするだけの藝のない者である。

また雛妓に至つては、大抵は可哀さうなほど虐使されて居るが多く、友禪の振袖てしやなりくなりとして居るを見ると、如何な好い日の下に生れたかと思はれるが、意外大違ひで深夜人定まり御神燈の燈明消えて、雨蕭々と降る夜半には床の中てクス〳〵涙に咽ばぬはないと云ふ。

藝妓屋に於ける食物

外形より彼等の境涯を觀測するときは、誠に暢氣至極にて風吹かば吹け雨降らば降れ、朝寢をして起きると湯に行き髮を結び、紅粉に彩色して白痘痕ぐらゐは巧みに塗り埋め、毎日料理店待合等へ出入し、茶屋酒に微醺を帶ひて佳味の喰飽きもしやう。又家にあるとも贅澤三昧に飲物の選り嫌ひをして、驕奢は口まで伴ふて居る如くに思はれ、また斯く思はしむる如く客に向つて贅澤を吐くこともある。けれども臺所口よりソツト覗いて見たら、イヤハヤ再度吃驚の沙汰で、更にお話しにならないのである。

藝妓屋の食物と來たら、實に驚くばかりで、昨今ならば三等米を食する家は非常な贅澤な家であつて、先づ四等五等の米に餓を凌ぐのであるが、それも甚だしい家になると、一人に三碗かぎり、若い女で喰盛りの者は左樣限られると、猶更喰ひ足らぬ氣のするもので、飯を山盛りにつければ、主權者は横目にぢろり「女は上品になさいよ、若し好旦那でも附たときに喰物でハチにされたら、笑ひものになるから」と減食を宣告するが例である。副食物はいかに、これ又世人の意想外ならむ、我々の食するものより一層粗食で、殊に少量なること驚くばかりだ。チト極端には走つてゐるが「藝妓〳〵とえらそにいへど内にゐるときや梅干三粒で飯を喰ふ」の俚歌能く眞情を穿つてゐる。先づ芋の煮てろがしなら四ツ五ツ、油揚の燒たのなら半枚が一食の

お采て。其他流行妓のある家では、抱妓が自己の收得より魚類を買ひ求めて主權者の機嫌を取るが多い。抱妓もなく親娘三人位で一層質素に稼業をするものなどは、一切の鹽鮭を三人突つき合ふて食するが平生である。これ等で總ての副食物も想像し得らるゝならむ。

以上の有樣で買喰ひは勢ひ免れない。今日はお鮨を驕るの懸聲大きく下女に命ずる横柄さから考へられば、少くも二十錢位はと思へば何ぞ圖らん白銅一ッ、それが而も二人三人の出し合の醵金に成立して居るとは。否らざれば、燒芋、蜜豆など尤も彼等社會の歡迎物で、清潔口を拭いて客の前での喰物えらみ、能くづう〳〵しく言はれたものである。蓋し常に粗食の反動をわが懷中の痛まぬとき遣る心懸ならむ。雛妓がはじけ豆を咬りつゝ稽古通ひするも宜なる哉と思はれ、轉た彼等の上を憐むの情に堪へぬものがある。

將來の藝妓屋

如上が普通藝妓屋なるものゝ梗概であるが、病膏盲に入つた家庭の弊風は、いかに改良を施さんとしても到底根本的改良の實行されるものでなく。藝妓と云へば「かりん胴油臭へに曰あり」の看板となつた今日、倍々墮落する傾向があるは自然の趨勢で、風俗上の取締りを嚴重にするより仕方があるまい、二十世紀の社會にこの營業を繼續させて置くからは。併し藝妓屋の家庭が改良されて、清潔なものとなつたら、御神燈の光明がパッタリ消える時である。尙その取締る人その人にも非常に注意を要する譯であつて、現今藝妓屋の家庭をヨリ多く紊亂させる媒介者は、直接か間接か暫らく明言はせざるが、取締る人その人に罪の半は負擔せしむることが出來る。將來も猶今日の如き取締法であつたら、此の社會の墮落はます〳〵激甚を來たし、いよ〳〵公に害毒を流すに至るのである。故に藝妓の品性に幾分の改良を舉げんには、先づ取締る人その人を選ぶが目下の必要であるのだ。

裏門から這入つた女學校

白　也

御定紋附きの高張提灯、冠木門に幕を張つて玄關奧深く、御免下さいと艶かしく女が訪ねても、どうれと禿頭

が羽織袴でまかり出やうと云ふ嚴かめしい御館も、裏門の方から這入りこむとおさん魚屋の脊中をたゝいて「そんな事を云ふとお前のお神さんに云ひつけてやるよ」などゝげたく笑ふに、此處は又表とは打つて替つた碎けやう、禿頭も此の場では四角な顏で誰何とも云はず「魚屋、お前何ぞ弱い尻があると見えてえらく凹まされてるな」なんて平民にもお聲がかゝるて、表門ばかりを見てわけもなくぶつたまげて了ふ人は、お白粉をつけた女を見てその色の白いに驚くと一般で、愚も亦甚だしい哉とか何とか云ふべきである、華族樣のお館だつて九尺二間の裏店だつて、神棚の脊さに替りはなく下水の不潔いに差別はあるまい、誰某は脊が高いからと云つて、其人の妻君も亦大女であると云ふ理窟が何處にある、

と一人で怒つた處で仕方がないが、總て世の中の事何事も皆一樣であるから、一方のみを見て譽めるのも輕卒であり罵るのも輕擧である、僅か一枚の紙にも裏表があるぢやないか、宇宙に陰陽の理がある以上は物事に表裏のあるのは當然であらう

女學生と云ふものが、海老茶の袴裙長に着なして、天[illegible]日々通ひ行く女學校なるもの、其數實に僅少でない、公立私立とを合せたら實に四五十の多數である、いづれも皆これ嚴然たる門を構へて何々女學校と太文字に書かれたる大々的看板を掛け、大厦高層儼に田舍者の膽ッ玉をひしぐに足る、唯に田舍者ばかりでない、我々と雖ども亦膽玉をひしがる、一人であることを自白するべく餘儀なくされて居る、

表門から見た女學校は、かすかに音樂の妙なる響きも聞えて、誠にこれ天の樂園であるかのやうだが、易者の言ひ草ぢやないが陰陽の理だ、九星術は奈何するのか知らないが物はためしだ、長いお手間は取らせません、代は見てのおもどりでも何でもないから一寸裏門から覗いて見やうぢやないか

生徒控室

敢て女學校ばかりでない何の學校でもこの生徒控室と云ふやつは、日當りのよい空氣の流通のよい、清潔な健全な室を用ひたのは極めて罕だ、大抵は陰氣な一年中日のめを見ない不潔な處で、とても敎室としては用ふることの出來ないと云ふ、いはゞ使ひ道のない室を使つてゐる、これは學校の經濟上から起る弊害であらうが、何とか敎育家は一と考へして貰ひたい、而かも破

れかゝつた卓を一とつ二つ置いただけで、おまけに隅の方には不用品のいろ／＼がごちや／＼と置かれてある、されば生徒も大抵は運動場の方に出て此處に居るものは甚だ少ないが、時々には五六人集つて大氣焰を吐いてゐる事もある、

女學校生徒控室に於ける大氣焰は何れも空想（女學生自身は理想と云ふ）の甚だしい事を意氣衝天の勢で論じ立てるのと、次は敎員の批評とである、

「あなたの理想的ホームは？

「妾？そうねえ、先づ學士位のハスバンドを持たなけりや困るわ、然し妾は學者的の人は嫌い、多少文學的趣味を持つて…音樂的テーストを持つてゐて：：：

「ハイカラがいゝの？

「うそよ、そうぢや無いけれど、多少……

「あなたの說は理想的良人ぢやありませんかホーム說ぢやないわ、

「だつてあなた、ハスバンドがあつて始めてホームがあるのだわ、ハスバンドの方が先きだわ

「だから萩野先生が理想にかなうのでしよう

「いゝわ、隨分だわ

と此時頰邊紅を潮してツンと後を向くと知るべし

玆に於てこれを見るに、女學校で若い獨身の男敎師を用ゆることは考物だね、靑柳有美君の女學校に獨身靑年男子の敎師を用ひよと云ふお說には俄かに贊成は致し兼ぬる、若し夫れ：：：いやにやかましくなる樣だが：：：敎師にして少しく紅顏であるか、將た又紅顏でなくとも、熱心だとか親切だとか云ふならば、直ちに全校生徒の視點の集る處となつて其人でなければ夜も日も明けないやうな騷ぎになり引張凧になること請合である、さらばと云つて女敎師となると、皮肉で陰險で邪推深くつて、常に學校でえさくさばかり起して居る、思ふにこれ亦適當な敎師でない：：：となると年寄の男敎師を用ふるより外に法はなくなるわけだが、年寄は舊式でいかんと云ふと差當り女學校の敎師は無くなつて了ふ、であるから止むを得ず多少の弊害は忍ばなければならない事になるので、女學校に完全なものゝないのも又止むを得ない事であるて、

女學校の完全なのがないのは、女それ自身に完全なものゝ無いと云ふことも亦其一大原因である、婦女と小人とは度し難しと古語でさへ手に餘した代物を、何百人と集めて置くのだから度し易い道理がない、第一おだてればつけ上る、小言を云へば泣く、命令すれば

ねる、賴めば恩に被せる、いやはや始末にをへない、それが又女の特性であるから遣りきれない、だから女の教師とは常に衝突してゐる、

男教師は手加減をするから衝突はしないだけに、吾人から見ると馬鹿々々しいやうな事をしてゐる、或る女學校の試験の問題を見たら斯うだ

一、御飯のこげた中へ炭を入れて置きますと臭氣が取れるわけを書いて下さい

二、夏は白い衣を着ると涼しく冬は黑いのが暖いわけを書いて下さい

三、窒素の取りかたを書いて下さい

これが理科の試験問題だ、其甘ッたるい事實に驚くの外なしだ、おまけに一週間も前に五題ばかり出して置て其内三題ばかりを撰んで答案を書いて持つて來させるなど丶云ふのだから學力の附く筈がない、女學生が生學問に終るのも全くこんな事の爲めであらう、

賄

而かも女の性たる影口をたゝく事は到底吾人男達の企て及ばざる所であるが、扨て流石に面と向つては、心の中の萬分も云ふものでない、非常に虚榮心の盛なものであるから苟も飲食物の不平などは、決して公然と漏すものでない、寄宿舍に於ける賄屋はこの性質を看破して、盛に貪慾を擅にして居るのである、若しも男子の寄宿舍であるならば、やゝともすると賄征伐と云ふ大々的の頭痛があるから、從つて万事に注意して一に生徒さんの御機嫌を損ぜざらんことをつとむるのであるが、奈何してお孃樣がたにそんな手荒な料理が出來るものか、されば影では色々と不平を云ひ乍らも矢張り其粗食で辛棒してゐる、尤も舍監もこの飯を喰ふのであるから、餘りな事をしたら舍監が承知すまいと云ふ人も有るかも知らんが、何んの今時の賄屋に其所に、抜目があるものか、ちやんと舍監が承知するやうな呪ひをして置くから恐ろしい、

先づ朝は味噌汁、晝が鰯、晩が海苔、と大抵こんな事である、勿論毎日同じ物を食はせるわけではないが、先づ似たり寄つたりの物である、これで食料として一人分一ヶ月四圓内外とあつては賄屋の暴利も亦甚だしい哉である、況んや女子の食量は遙に男子のそれよりも少量なるに於てをやだ

又時々異樣な御馳走が出來る、これは男生の賄などでは殆んど夢にも見られないものだ、曰くうどん、曰く牡丹餅、曰く猶恐れ入るはお汁粉、これ等の物を晩飯

にする、流石は女だと寧ろ感服するね、
然し近來生徒の方から色々と指圖をして、賄屋は唯その命令通りのものを作ると云ふ組織になつた所も少くない、つまりこれは前に云つた弊害に對して工夫された新法である、

教授法

女學校の教授法に就いては大に教育家の頭を痛めて居る事であるが、前にも云つた通り、女の性質が性質であるから、女學校に經驗のない教師が行くと一度は屹度失敗する、僕の親友に理學士があるが、この男が女學校で理科を受け持つ事になつた、所が先生、未だ大學を出たてのほや／＼であるから何の經驗もないので、出席簿をつける時いきなり生徒の名を呼びすてにした、ところがさあ大變、名を呼びすてにするなんて失敬だと云ふわけ、早速談判を持ちこまれたので二時間目から一々さんをつけて呼ぶことにして、示談になつた、
一事が萬事で、この筆法で行くのだからやりきれない、勢ひ教師の方でも、さわらぬ神にたゝりなしと云ふやりかたをするやうになるのである、されば女の最も力を注いで勉强すべき裁縫でも、裁縫專門の女學校の外は隨分出たらめのやりかたである、先づ一とつみから初めて、最初斷ち方を教ゆるのであるが、「あなたの布はこれですか、鋏を忘れて來た？困りましたね、今度は忘れないで下さいよ」、などゝ一人一人やつてあるくのだから、一時間位では生徒半數の斷ちも出來ない、而かも一週間に二時間か三時間であるから、一とつみ一枚で一學期（即ち三ケ月）もかゝる、それでも卒業までには袴まで教ゆるけれども、生徒の方では出來ないのだから詰り何にもならん、それが證據には普通の女學生にほころびを縫せて見れば直ぐわかる、針の持ち方などは隨分覺束ない手つきだからね、縫目のびくしやくなるは勿論の事である
料理の事に就いても、贅澤な料理を先一のやうに教へて日通中等生活の事を第二にする傾がある、然かも女學生上りの細君に飯の水加減の出來ないのは稀らしくない、フライのあげ方は知つて居るが味噌汁の作りかたは知らないと云ふやうでは、我が日本の中流の細君には向かないではあるまいか、これらも其教授法を一と工夫して、最も實用的にして貰ひたいのである

教師控室

授業中は勿論教室にあるから、此處は時計の刻む音よ

り外には何の物音もしない、扨て休み時間はと云ふと、種々雑多な世間話し、喋々否寧ろ喧々として居る、第一の話しのたねは新聞の三面記事で

「可愛さうな人もあるものですねえ、六十になる婆さんが首を縊つたんですつて、

「まア可愛さうに、奈何したんでしよう、

「貧を苦にしてださうですよ、死なずともですにねえ」

總て男の話は客觀的であるが女のはいつも主觀的である、男は淡白で女は感情的である、此の如くにして稍久時、三面の話もつまると、今度は生徒の批評である、生徒の批評よりして父兄の批評である、父兄の批評よりして容貌の批評財產の批評である

「吉野と云ふ子は算術は出來ますか

「出來ない事もありませんが、出來ると云ふ程でもありませんよ、全體あの子は容貌がいゝものですから少し傲慢の氣味がありますね、

「さうかも知れませんね、親は辯護士ね、學士でしよう多分、

「さう道理で理窟は中々達者ね、その上おめかね

「財産があるからでしよう

「さうらしう御座いますね、たんとあるのですか、

「可なりあるさうですよ、四五万は乾度あるんでしよう

と先づこんな鹽梅である、其敎師の內でも月給の少しでも多い方が威張つてゐるので、隨分男敎師をも眼下に見下しかねないである、作文を添削する、習字を直す、などゝ云ふ事は大抵この間に於てする、而して其點數は男敎師の點は安く女敎師の點は高いと云ふ事も一寸注目すべき現象である

附記、實は女學校の裏面については、最う一層きり切んで書くつもりであつて、恐らく讀者諸君もその御注文であつたらうが、悲しい哉僕の調べた處では、其女學校の或者は、暗黑面が豫想外に甚だしいのでこの甚だしいものを標準にした日には、實に筆にするのも厭々しい記事となるから、極めて普通の事の大略のみを草してこの稿を終ることにした、

本誌三十七年第十九年は第十一號を以つて終れり

社會側面觀

▲奇警なる觀察の投書を歡迎す▲二百字以内の者に限る▲締切は毎月十八日

▲電信柱と巡査　下谷　無名氏

予が家交番の傍にあり、一日交番の前なる電柱の人の丈ばかり床柱の如く光澤あるに氣付き、之を查公に語る、公慨然として曰く、寒風膚を裂き、夜氣人を襲ふのとき、而して大盞を手にして待合の床柱に倚るとき、我等は竊かに電柱を背にして眠る也、其光澤ある蓋し之が爲のみと、予之を聞いて覺えず涙潸々として下る

（記者曰、余も亦之を讀んで泣けり）

▲落選少說の廢物利用　本郷　虛月生

牛尾とならんよりも寧ろ鷄口となれと申し候、小生度々短篇小說を萬朝報の懸賞に慾を出して只管牛尾とならん事を願ひしも叶はず、いつも落第のみ致候處、此度某小雜誌にて無賞小說の募集するを聞き落選小說を投じ候に、喜んで二號見出しにて掲げ呉れ候、これ鷄口となりしものには無之候や、愉快禁ずる能はず候、但し讀者の皆無なるは小生先刻承知の事に候草々

▲舌の上げ下げ　青山　翠也

人間といふやつはをかしなものだ、舌の上げ下げ一つで笑つたり怒つたりしてゐる「お前さんばかり惡いのぢやない私しだつて惡い」と云ふかわりに「私ばかり惡いのぢやないお前さんだつて惡い」といふと佛頂顏をする唯精神のある處が違ふのなんのと稱するやうなものゝ結果は少しも替りはないのであるのに、

▲貞操　神田　樂天生

貞操といふことは女の負ふ處の任責（或は義務）であつて男には關しないといふのは不都合だ、宜しく男の貞操をも守らせろと八釜敷云ふ人があるが、何にもそんなに大騷ぎをするに當らない、丸髷の髮美しく、家には立派な旦那樣のある人にして他人に肌を許すもの決して少數でないのだから、亭主の待合入り位は當然來るべき結果だといふ人もある

▲日本的商賣法　大坂　梅幸

客をして常に快感を持たしめて奈何の斯うのといふやり方よりは、御安値主義でなければ日本での商賣は成功しない、食器より室内の裝飾にまで意をこらすよりは、安くてたんと食はせると云ふ家の方が屹度繁昌する、つまり未だ蠻カラなのが日本的商賣の成功法だ

▲どぶ泥の家　衞生掛

甚だ不潔極めて汚穢、大に非衞生的なる泥を用ひて尤も清潔なるべき家屋の壁を塗り、平然其内に起臥して少しも其醜を知らず、而してやれ清潔やれ衞生と只空騷ぎに汲々たる我東京市民の支那人朝鮮人の不潔を笑ふは所謂臭いもの身知らずだ

▲白骨の貴賤貧富　牛骨先生

凡そ人間の最終の住所なる墳墓を見るに、生前鐵柵や石垣をめぐらし

た立派な家に住んで居た人は、此の處にも鐵柵や石垣が有り、生籬や竹垣ぐらゐ有た人は同じくそれをめぐらしてある、何も無かつた人のは矢張り何もない樣だ、考へて見ると人間が現社會の一員として生てる時にのみ有るべき筈の貴賤貧富の差が、死んではどれも一樣な只の白骨と成た後までもちやんと區別されてるのは一寸面白い事だ

▲東京市政の一大缺點

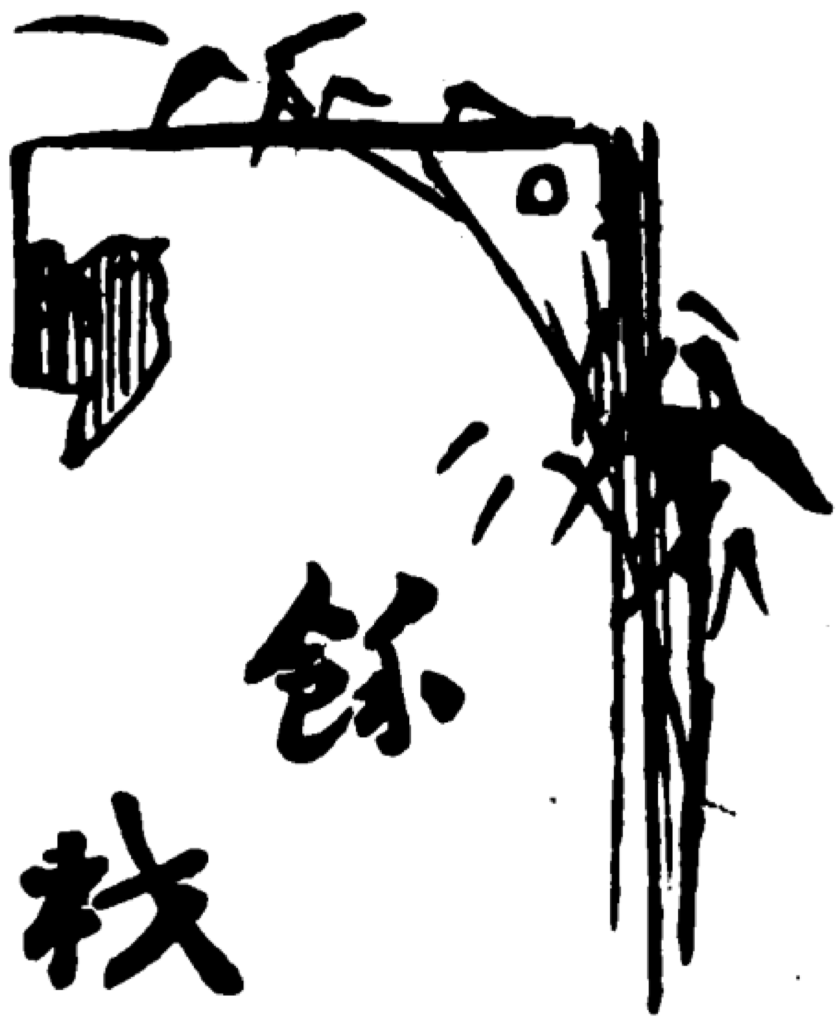
麹町　郵便配達夫

僕近來上京して郵便配達夫となる。然るに僕の最も閉口したるは大なる官省には多く門札を掲げず、私宅の門口にも半ば以上番地を記せず、殊に夜に入れば瓦斯燈に文字を記入せざるもの甚だ多く、配達の困難實にいふばかりなし。日本帝國の首都たる東京にして此儘に放任するは實に市政の一大缺點なりといはざるべからず。當局者は此際斷然門札の制度を一定し、獨り我等新郵便配達夫に對する功德のみならず一般人民の便益を計られんことを切望す。

▲狂人の自信

巣鴨　流月生

巣鴨の精神病院に一人の狂人がある、開院以來入院して今に至り古參の一人、自ら某少將と名乘り、人を呼付けにし、泰然として坐せる處、知らぬ者ならば少將とも大將とも思はしむる威嚴を備へて居る、而して他の狂人も彼の前に到れは低頭半身して怖れ戰く、『閣下、何番室の何某が命令を奉じませぬ、乍恐御說諭を願ひまする』と申上げると『左樣か』と御意あつて出張遊ばすのだ、何んと我々も慾稱の自信が持つて見たいものではないか



明けました春

茶　人

ぐつすりと寢込んだ去年の夢續きに初鷄の聲を東天紅と聞いてむつくり起きれば。かしこくも九重の空には紫の雲棚引き、天つち玆に新たに分れ、都の初春は品川の海より明けてほがら〳〵と日の登るに。軒毎の國旗鮮かに輝くに、國旗紅々と嘯きしかと疑はる、

若水にみそぎして衣をも替へつ、桐火鉢引寄せて眞面目くさつて控ゆる、誰一人侍候して御機嫌伺ふものもなけれど、青鬼赤鬼に攻め立てられてあはれや九尺二間の城廓めちやめちやにならんずる所を、やつとの事で一と晩寢ればがらりと明けてお正月お目出度う、奈何やら孤城もとりとめたれば又一年は太平樂と、我

ながら濟ました春なり

雜煮腹たゝいて、後すべりの下駄突掛け、よしのずいから天上見れば品色々に替るからくり、廻る浮世の春やさま〳〵

政治家

うむ好い春ぢや、まづ雜煮はどうだ、今喰ふて來たばかりだと、さうか、

戰後の經營？それは勿論必要だが未だ戰爭は濟みはせん、この先まだ幾年かゝるか知れやせん、何も今からそんな問題を周章て騷ぐにや當らんよ、未だ戰後ぢやない戰時ぢや、戰後とは戰の濟んだ後と云ふ事ぢやからな、

元日早々そんなむしやくしやした話は止せ、まア一杯のめ、酌は單婦と云ふが家にや居らんよ、餘り飲ると身體にさわると？兎角正月はありがちぢやはゝゝ

今日は黨の新年宴會があるてこれて失禮する新橋の若いのがだいぶ來るさうぢやはゝゝ

俳人

元日の明けゆく空やもの靜か、初鷄の聲に目覺めて起きにけり、うら〳〵と初日さしけり庵の庭、若水に白い鬚をば洗ひけり、老ひたれど四椀の雜煮喰ひけり、炬燵して寢すは惜しき今朝の春、よそ行きの衣物を婆に出させけり、十徳は明治の御代にをかしけれ、さらばとて短かい被布を着たりけり、のこ〳〵とあかざの杖で出かけけり、軒ごとの國旗ながめて通りけり、中途より電車に乘りて行かん哉、財嚢からつまみ出したる銅貨かな、三錢の電車安しとつぶやきぬ、電車には新年の客滿ちにけり、よき程の處にて電車下りにけり、兼ねて知る俳人仲間訪ねけり、奧の間に招じ入れける主かな、我が先きに發句の客あり五六人、歲時記も硯も紙も置かれけり、打ちよりて運坐一卷まかん哉、彼是と題を撰ぶや小半時、初鷄の題よからんときまりけり、あちこちに頭抱へて苦吟せり、小半時へボ句ばかりを列べけり、とかくする內燈火のつきにけり、新年の賀儀とて主酒を出す、どの顏も眼元に茜初日影、俳人の醉ふて發句もなかりけり、めん〳〵に千鳥足にて歸りけり、無殘やな石につまづき倒れけり、大切の被布口惜しや土まみれ、折角の醉も醒めたる恨み哉、星冴えて元日の夜の寒さかな

俳優

戰爭騷ぎの其中にも奈何やら入りのあつたのは、こりや何よりの仕合と云ふもの、是非今年の初狂言には、

何がなうまい物を出して、うんと當てたいものであるが、何れを見てもありふれて、これと眼ざさんものもなし、ハテ何としたなら可からうなア‥‥と思入がある折から表格子に案内あり、主は起ちて

「どなたで御座る‥‥ヤアこれは思ひがけなき可うこその御入來、何はともあれいざ先づあれへ、

「然らばお許し召され　（ヲヒユードンドン）

「先づ回陽の祝儀、お互にお目度う存ずる、して今日まかり出てたるは餘の義に非ず、先づ本年の初狂言につき、實は内々某も、あれやこれやと案じたれどよき分別も相つかずほと〳〵困却な仕りたるにより、貴殿のお考案をもとくと承つたる上、一と當て仕らんと存ずるが、御明案も御座りますかな

「さればで御座る、其事につきては某も色々と思案致しましたなれど、無い袖は振れぬとやら、淺才の某故別段の分別もなく、唯迷つてばかり居る事で御座、それに近來は彼の新派とかいふもの、中々侮り難く成りましたれば猶々以て一と通りの事では大受は取れませねば、心痛至極に存ずる

「それにつけても團菊が、居つてくれたら吾々が、こんな心配致さずとも

「萬事よきなに役割も、世話をばやいて貰はんに

「てまへならぬ　（チヨン）

「浮世ぢやなア

と兩人思入よろしくあつて幕

職人

べら棒めけち〳〵するなえ正月だ、酒も持つて來い肴はねえか、無けりやちよつくら買つて來な、序に干物屋であたりめを、歸りに八百屋や玉ねぎ三つ、夫から肉屋で一分が豚を、角の酒屋で一升ばかり、忘れちやいけねえ嬶どの、あわてゝ德利こわしなさるな、お酒をこぼしちや玉なしだ、今日は仕事はお休みよ、今日は一日どんたくだ、八も呼んで來い熊も來い、お正月だえ嬶も飲め、飲んだ杯やこつちへよこせ、おれが飲んだらお前にやらうおれも醉ふからお前も醉ひな、お正月だえかまこたねえ、

學生

然し考へて見ると呑氣なものさ、凡そ世の中に學生といふ商買程呑氣な商買は又とあるまい、斯うして下宿屋の二階で煙草をふからして太平樂な熱を吹いて居れば、自然天然と飯にありついて月々小遣も舞ひ込ん

てくる暑くなつたかたびらをよこせ、寒くなつた綿入を送れ、僅か一錢五厘の元手を用ゆれば小包てちやん〳〵と送つてくるなんぞは有りがたいね、いくら金満家だのなんのと威張つた處てこんな呑氣な暮しは出來まい、やれ歳暮の送り物は斯うしろの、やれ結婚のお祝ひはどうしろの、その交際の煩しさ到底堪ふべからずだね、吾々の商買にはそんな手數のかゝる事はないよ、「貴樣ワイフを持つたさうだな、畜生め羨ましがらせるぜ、おごれ〳〵」これで濟んで了ふんだ、お正月だつてさうだ、「や、お目出度う」と云へば、向ふても「やお目出度う」と同じことを云つてそれて濟むんだから簡明だね、これで試驗さに無くなりやいよ〳〵天下太平だ、早く無試驗制度になればよいて、どりやかるた會にても出掛けるか、

新刊批評

▲向上の一路

茅原華山氏著
日高有隣堂

六百頁の大册、予は未だ精讀する能はず、兎に角安部磯雄の社會問題解釋法を批評して自家の主義を立てんと試みたるものにて、氏の社會主義は其結局遂に主戰論を生ずる也、次に個体責任篇として氏が文章演說を集録し、生命一体篇として先聚友人知己より得たる文章談話を收め、學野百合篇として諸家の愛誦詩歌を蒐む、即ち後半は凡て餘興附録也、學生の寶鑑的也、而して氏は文章の美を以つて知らるゝ人なれば全篇皆文章を學ばんとする者に取つて最も適當ならんと信ず、其說の可否に至つては精讀の後にあらざれば云ふ能はず、只申分あるは其体裁の如何にも鎧カブにて、一見古本の如きこと也、競つて新意匠を凝らしつゝある現今の趨勢に反し、人をして頭からツマラヌものに思ひ做さしむるは華山氏のために惜む處、これ書肆の罪也

（定價六十錢）

▲教育寓話 我子の惡德

大村仁太郎氏編
同文館發行

ザルツマン氏の著、惡德養成法、一名蟹の横這ひに基き、之を我國風に翻案し、以て世の父兄父は教師等に警戒する所あらんとするは此書編述の趣意なり。今其目次の一二を示せば「疑念深き人物を養成する方法（秘訣、兒童に對して虚言を弄ぶべし）。「仲の惡しき兄弟を養成する方法」秘訣兄弟の一方を偏愛せよ）。「我儘なる人物を養成する方法」（秘訣、兒童の要求を悉く滿足せしめよ）等の如し、反言逆意を以て反省頓悟する所あらしめんとす、亦教育の一法なり。されど其文章如何にも巧妙を缺き、其談話如何にも趣味に乏しく、惡德養成法なる奇拔なる題目に對しては殆んど失望する程平凡なる書籍なるは甚だ惜むべし。たゞ原著が蟹の横這ひなる奇異の標題を冠せられたる因果は一寸趣味あり。之れ原著の表裝に一疋の親蟹、三足の子蟹を率ゐて河畔に逍遥する圖を示し、親蟹子蟹に訓戒して曰く、「汝等決して横行する勿れ、只正しきに隨て直行すべし」と子蟹は答へて曰く、「父よ請ふ自ら直行せよ、兒等は悦んで父の爲す所に從はん」と然れども親蟹は依然として横行し子蟹亦直行する能はざるによるものにして、「即ち實踐躬行にあらざれば子孫を教養する能は

ざる寓意を示すものなりと。

（定價六十錢）

▲英獨對譯 小倉百首評釋　文學士佐藤芝峯氏 本郷書院發行

三十頁に餘る總論以て著者の抱負を窺ふべく、以下各首に就いての解釋評論皆見るべし。評論の文、稍々漢語の熟字を過用し、やさしき和歌に對しての調和を缺ける憾なきにしもあらずと雖も華麗にして暢達、著者の文藻尋常ならざるを見る。英獨の譯文は主として其意を傳ふるに附せるもの語學研究者の參考となるべし。時は新年に至つて男女學生歌かるたの會合に熱中するの時、此書の發行や頗る其機に投じたりといふべし。

（定價四十錢）

▲職分論（中）　栗原元吉氏著 内外出版協會發行

先きに紹介せる職分論の續き、譯文の體、裝釘の裝全く上の部に同じ、其目次を擧ぐれば、男氣――忍耐。最後までの忍耐――サヴオナロフ。海軍軍人水夫。等にして我國現下の情勢に最も適合したる教訓、青年子弟の一讀すべき好著なり。

（定價三十錢）

▲世界お伽噺第六十四編 龍宮の使者　岩谷小波氏編 博文館發行

▲仝第六十五編 森の女　仝　上

前者は朝鮮の談話後者は印度の物語にて共に輕妙なる筆致小供のみならず、大人にも面白き所あり。殊に前者が日本の昔噺猿と海月とに酷似し、全く同一の起源なるべしといふが如き學問上より觀察するも餘程面白き問題を含めりといふべし。

（定價各々八錢）

▲カーライル 英雄論詳解　本田増次郎氏編 内外出版協會

内外出版協會この頃英和對譯のものを出版するに努め居れり、此書亦此類也、而して此編は譯者最も其人を得たりと云ふべく、註釋詳細にして英學生の喜ぶところ但し此篇は英雄傳中マホメツト論だけ也

（定價二十五錢）

▲滿州西比利亞 地理唱歌　高須治輔氏作歌 本元子作曲

ポツケツトブツクにて體裁美なり、卷頭に滿州西比利亞の地圖を附したり、これもと滿州西比利亞の地名を記憶せしめんが爲めに作られしものにて、高等小學校位に採用せば大に地理の助となるべし、但し辭句の多少小學生徒には難解の節はなきやと思はるゝ處あり（定價十錢）

▲良人の自白　木下尚江氏著 平民社發行

先きに「火の柱」を著したる木下尚江氏の作にして、こは八月より十月に亘りて毎日新聞紙上に連載したるもの、此小説の前篇なり。木下氏の著は其主義主張に基きて作せるものにして世俗の紛々たるものと自ら其選を異にせるものあり。他日此の篇の完く世に出づるを俟て細評せんとす。

（定價三十五錢）

▲瑤琴　龜谷天尊氏著 東亞堂發行

東京朝日新聞記者龜谷天尊氏が文章集なり、子の文は時として殊に誦すべきものあると同時に、又甚だ拙なるものあり、此書も亦これなり、子貴顯と交多し、故を以つて本書天覽に入るの榮を擔ふ、從つて體裁頗る美也。

（定價四十五錢）

ホトヽギス八卷四號廣告

一月一日發行

例年の如く八卷四號は頁數を倍加し一月一日に發行し、且つ今回は左記の如く口繪二枚を附す。

▲素盞嗚尊八俣の大蛇を斬る。　默語筆

▲孫叔敖兩頭の蛇を撲つ。　默語筆

つとめて用筆を省略し、大膽に色彩を塗沫したる新俳畫にして、共に木版四度刷。一見肉筆の水繪に異ならず。其彫刻印刷は木村德太郎氏の苦心經營になる。

尚收錄する所の文章は

▲吾輩は猫である。　漱石

「吾輩は猫である。名前はまだ無い。」といふ冒頭より滔々十餘頁に渉る一匹の猫の經歷談にして、寓意深遠、警句累出、我文壇始めて此種の好諷刺文に接したりといふべし。

▲吹灰日記抄。　四方太

一ヶ月間の日記紙面を埋むる事僅々一頁、是亦好笑の文。

▲屠蘇に醉て。　虚子

明治三十二年の正月作者一度へゞれけてくだを卷きたる事あり。明治三十八年の新春二度へゞれけてくだを卷かんとするもの也。

▲挿畫十數葉。

默語、爲山、朱冠、はしぐち諸氏の挿畫。

尚附錄として、

▲仰臥漫錄。　故子規著

これ子規居士最後の病床手記にして、其名の示す如く仰臥して筆を採りたるもの、俳句あり、記事あり、議論あり、繪畫あり、其活字とすべき部分のみを抄して載す。子規居士遺篇中に在つても特に珍品とすべきもの、數十頁を埋むべき長篇也。

〇

此號に限り、定價參拾錢、郵稅貳錢。即平常の倍額。

東京市麴町區富士見町四丁目八番地（電話番町七四八）　俳書堂

投稿規定

▲二十四字詰にて句讀を切り楷書にて認むること

▲締切は毎月十八日最終便まで

▲投稿者諸君は住所本名を記入ありたきこと

中央公論定價表

		郵税共
一冊	金拾貳錢	金拾參錢
六冊	金六拾五錢	金七拾壹錢
十二冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓卅貳錢

中央公論廣告料

一行（五號文字二十四字詰）	一回	金貳拾錢
四分の一頁	一回	金貳圓五拾錢
半頁	一回	金四圓
一頁	一回	金八圓
表紙の二三四一頁	一回	金拾五圓

送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名幷に社名を拂渡局所を**東京駒込**局と指定せられたし弊社印鑑は駒込支局へ差出有之候に付決して途中にて盗取せらるゝ憂なし

一郵券代用の場合は必ず壹割增のこと

一誌代、廣告料とも總て前金にあらされは御需めに應せす

一前金切の節は帶封に朱書いたすべくに付早速拂込まれたし然らされは其號限にて發送を止むべし

一雜誌の發送を以て領收の證といたすべくに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし

一御拂込み金額の端金の場合には左表に準し御勘定可致に付御注意相成たし

一金七拾壹錢以下	一部金拾參錢の割
一金壹圓參拾貳錢以下	一部金拾貳錢の割

都下大賣捌所

神田表神保町　東京堂
神田裏神保町　上田屋
京橋銀座四　東海堂
本郷四丁目　文明堂

明治三十七年十二月卅一日印刷
明治三十八年一月一日發行

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行兼編輯人　武田福松
印刷人　清水金右衛門

發行所（電話下谷九一九）　反省社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

●日露戰爭活動寫眞新フイルム

●遼陽總攻擊ノ實況及衛生隊ノ負傷兵收容●我艦隊ヨリ旅順口ニ於ケル敵艦隊砲擊ノ實況●旅順口ニ於ケル敵兵大砲ノ陸揚ケヲナシ之ニ依テ我兵ト砲戰中戰死スル實況●南山附近ニ於ケル我兵野營準備ノ實況●遼陽總攻擊後我兵休養及點呼檢閱ノ實況●南山ニ於ケル我騎兵トコサック兵ノ衝突●大石橋附近ノ激戰●九連城ノ大激戰●我騎兵及歩兵カ新橋并ニ品川停車場出發ノ實況●其他戰爭ニ關スル寫眞十數葉○寫眞ノ長サ五十尺ヨリ五百尺迄各種

○弊店技師藤原幸三郎氏ヲ第○軍從軍寫眞班トシテ戰地ニ派遣シ活動寫眞及幻燈用ノ原版ヲ撮影セリ

●活動寫眞器械

一大形金八拾圓ヨリ二百五十圓迄○輕便活動寫眞瓦斯器械共一揃六拾五圓○一舶來器械二百圓以上○フイルム一尺四十錢以上

●幻燈器械

○アセチリン瓦斯幻燈二百燭直徑二丈寫四拾貳圓○同一丈五尺寫卅七圓○同一丈一尺寫廿圓●改良石油五本燈一丈五尺寫廿七圓○同二段形卅圓○同一丈三尺寫廿五圓○同一丈寫廿圓○同七尺寫拾圓○同五尺寫五圓

幻燈映畫

●日露戰爭實況幻燈映畫第一回(十二枚一組金貳圓四拾錢)同第貳回(十五枚大形金三圓)●同第三回(廿枚四圓)同第四回(廿枚四圓)同第五回(廿枚一組沙河大會戰ヨリ旅順口背面攻擊マデ)●露國ノ軍事(五十枚)十二枚ニ付貳圓四拾錢●露國ノ滿洲經營(五十枚)十二枚ニ付貳圓四拾錢●日本ノ軍艦(五十枚)十二枚ニ付貳圓四拾錢●日本軍艦ノ大砲及艦內(四十五枚)十二枚ニ付貳圓八拾錢●日本ノ將校(二百餘枚)十二枚ニ付貳圓四拾錢●日露戰爭ノ狂畫(二十四枚)十二枚ニ付貳圓拾四錢

●定價表ハ御報次第進呈ス

東京新橋南金六町
電話特新橋三七八

吉澤商店幻燈部

中央公論

No. 190

前號概目

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可
明治三十八年一月一日發行(毎月一回)

(定價一部十二錢)

發行所 東京本郷區西片町十番地
電話下谷九一九番
反省社